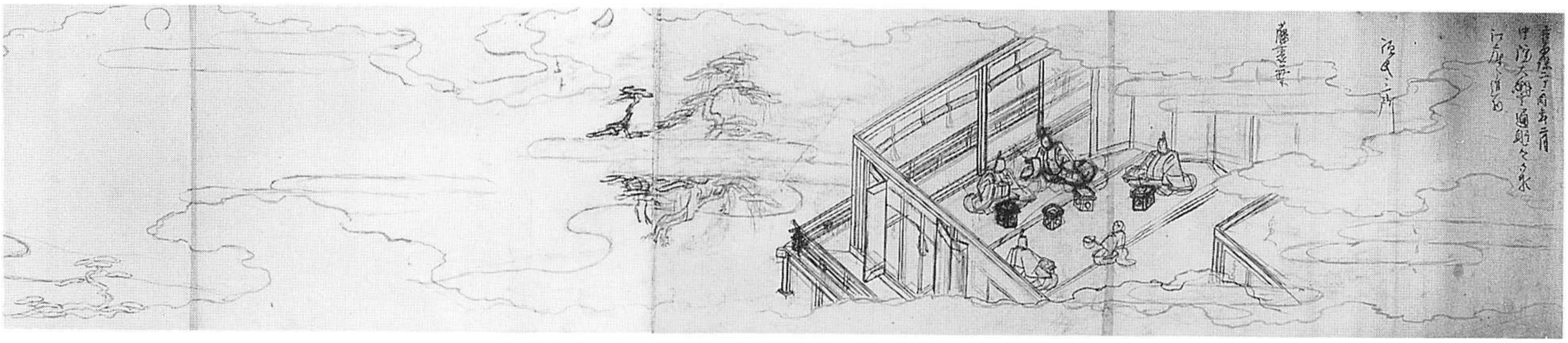
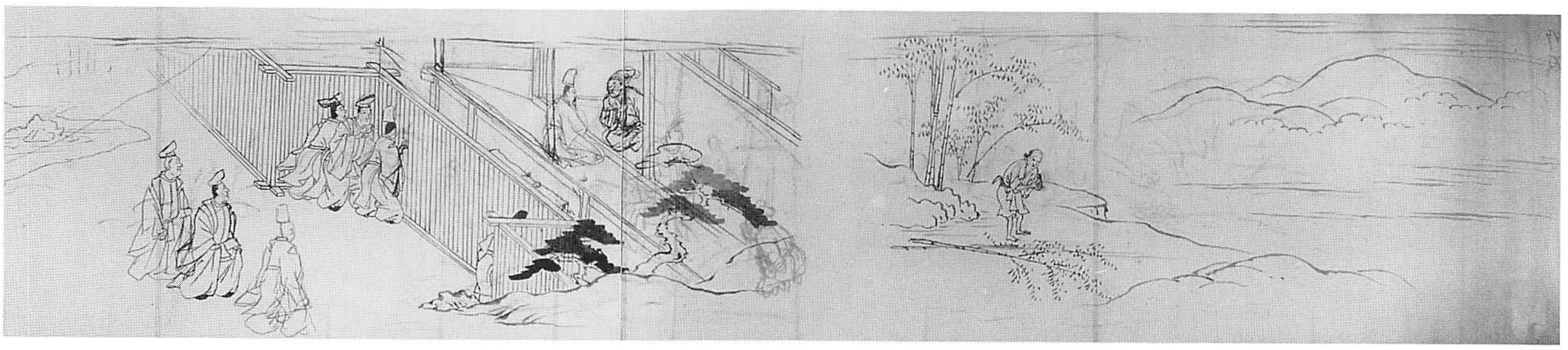
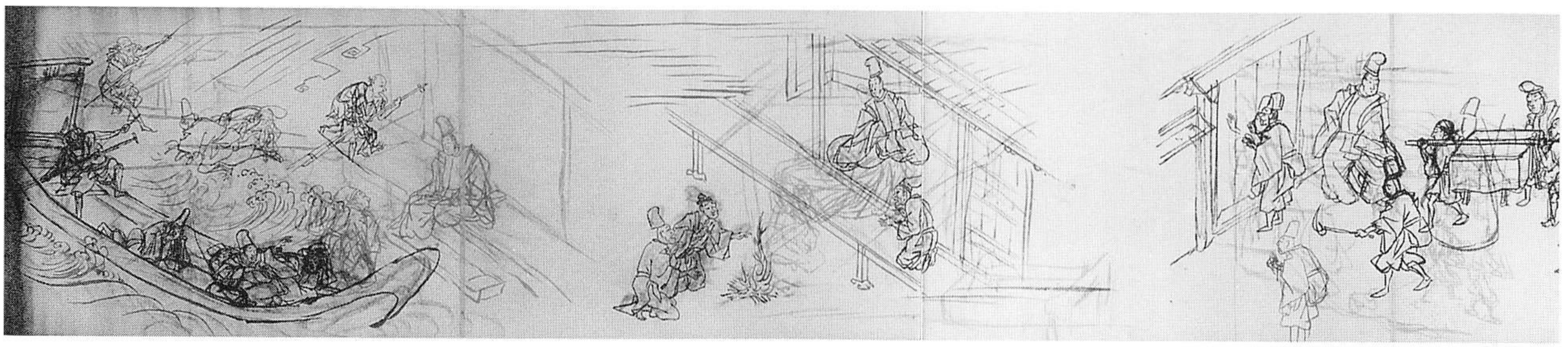
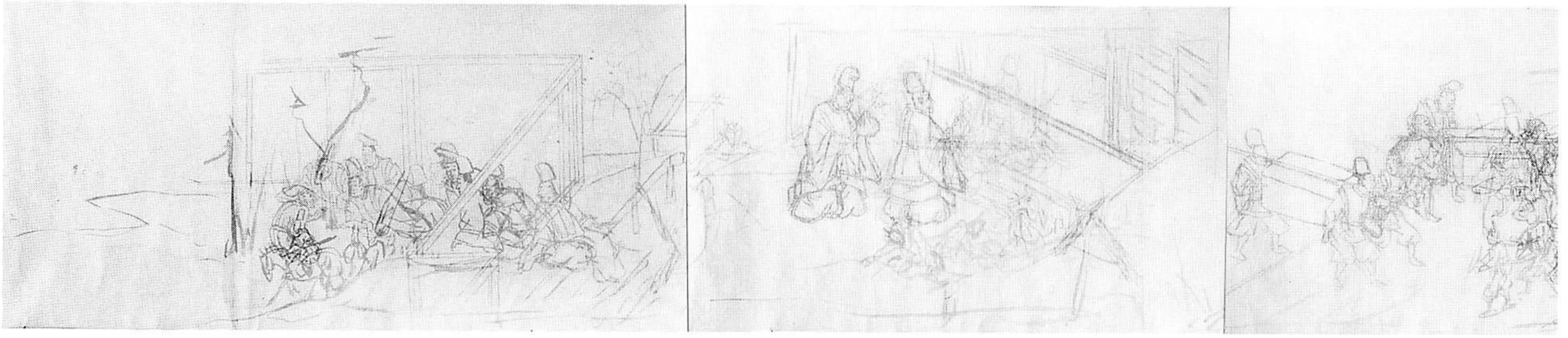
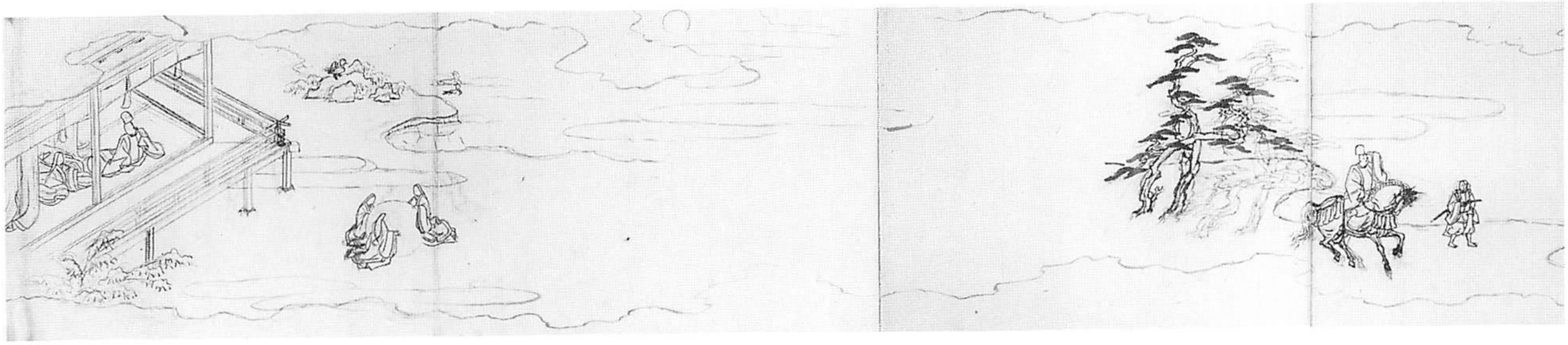




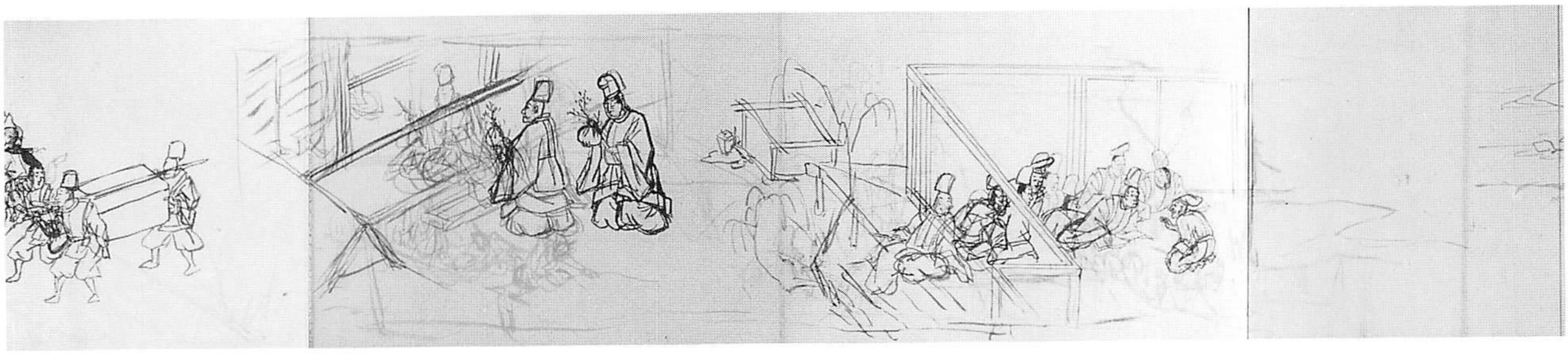
（表）

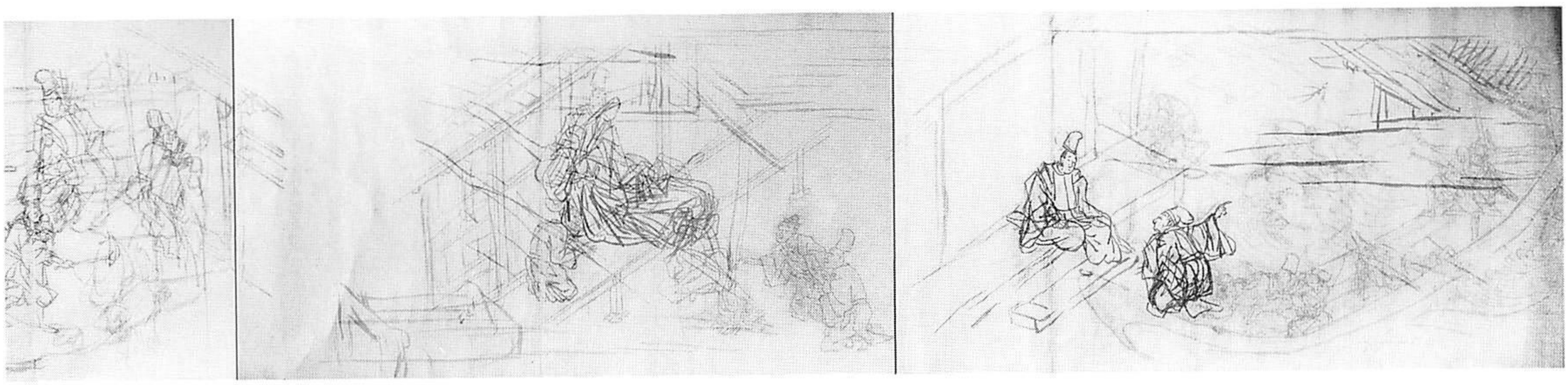






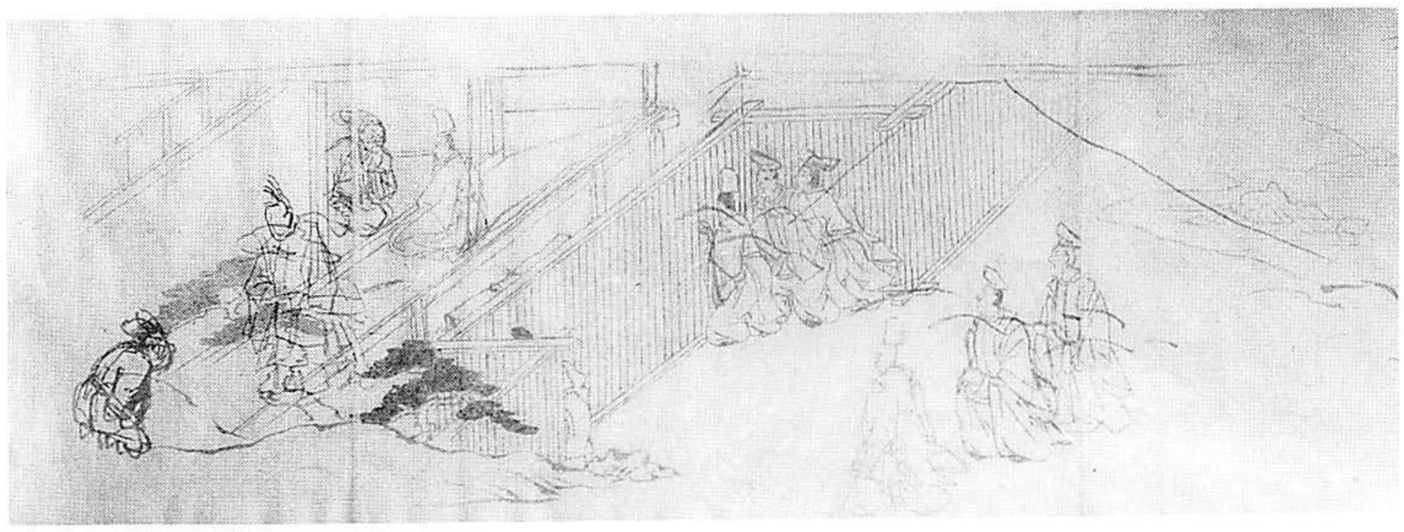
1源氏物語絵　（二三一）
紙本墨画　一巻　二八七×二七三九
享保二年（一七一七）
七紙継、焼筆あり
（第一紙右墨書）享保二丁酉年二月／中院大納言通躬卿御頼／江府へ進物」源氏三所」藤裏葉」白かへ」ミス」ヤリ戸」ミス」藤」

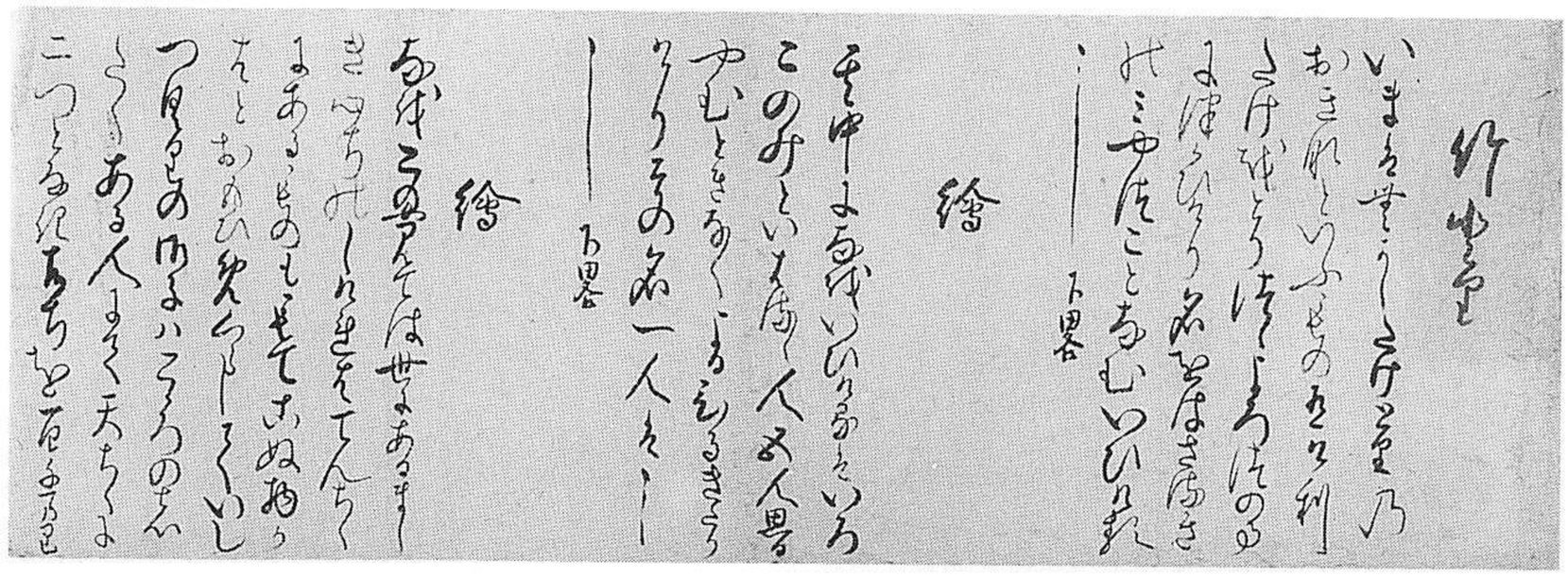




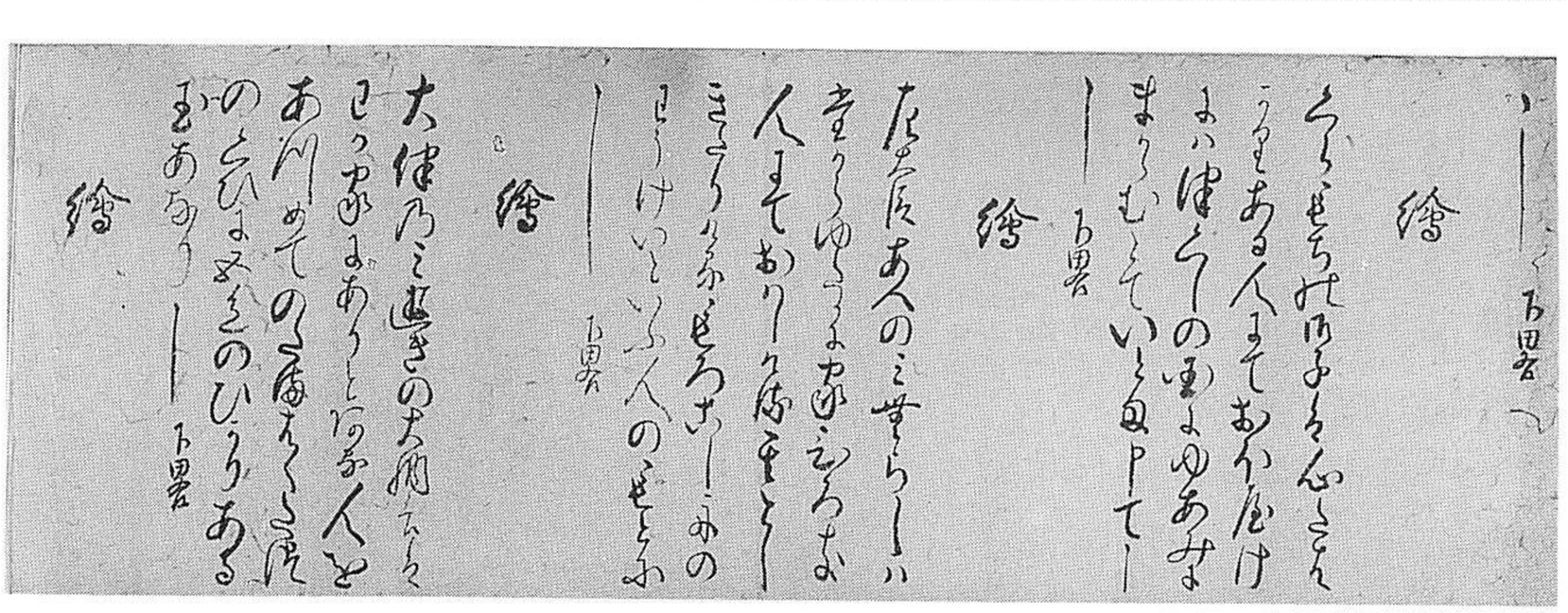
（裏）

2竹取物語絵巻　（二三〇）
紙本墨画　一巻　三〇六×四三三四
十紙継、焼筆あり、裏にも図あり
（第一紙右裏墨書）竹取」

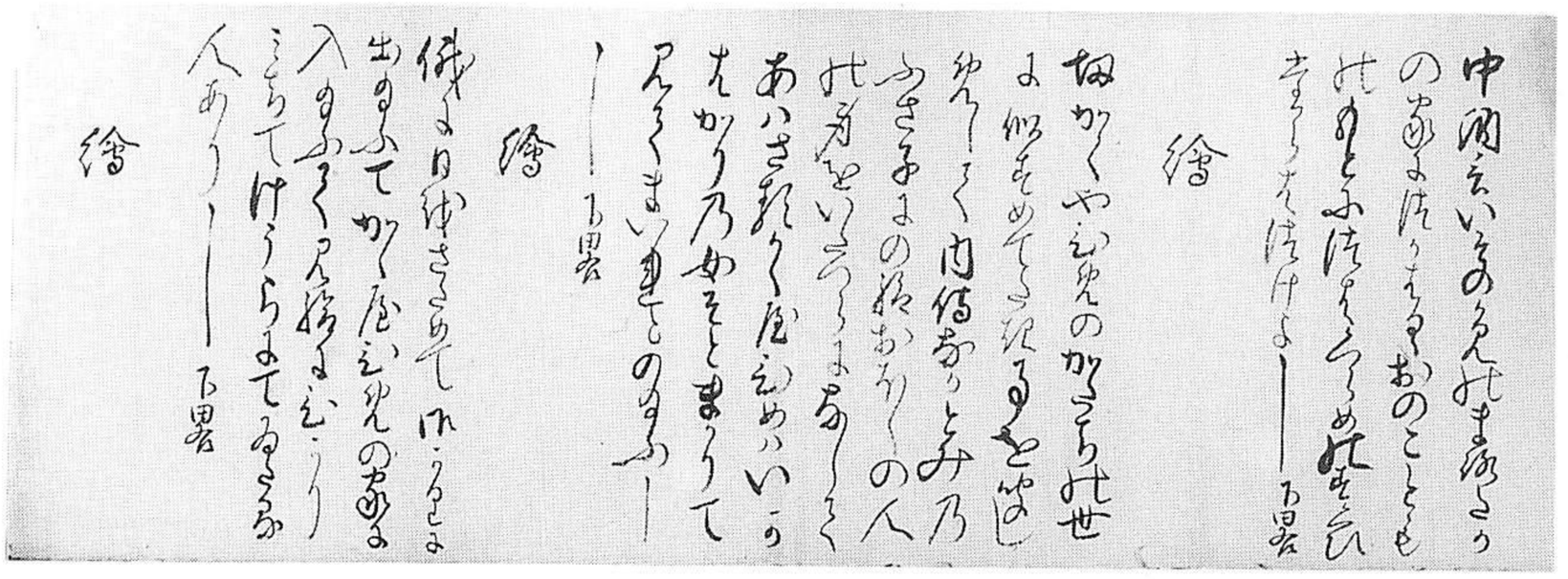




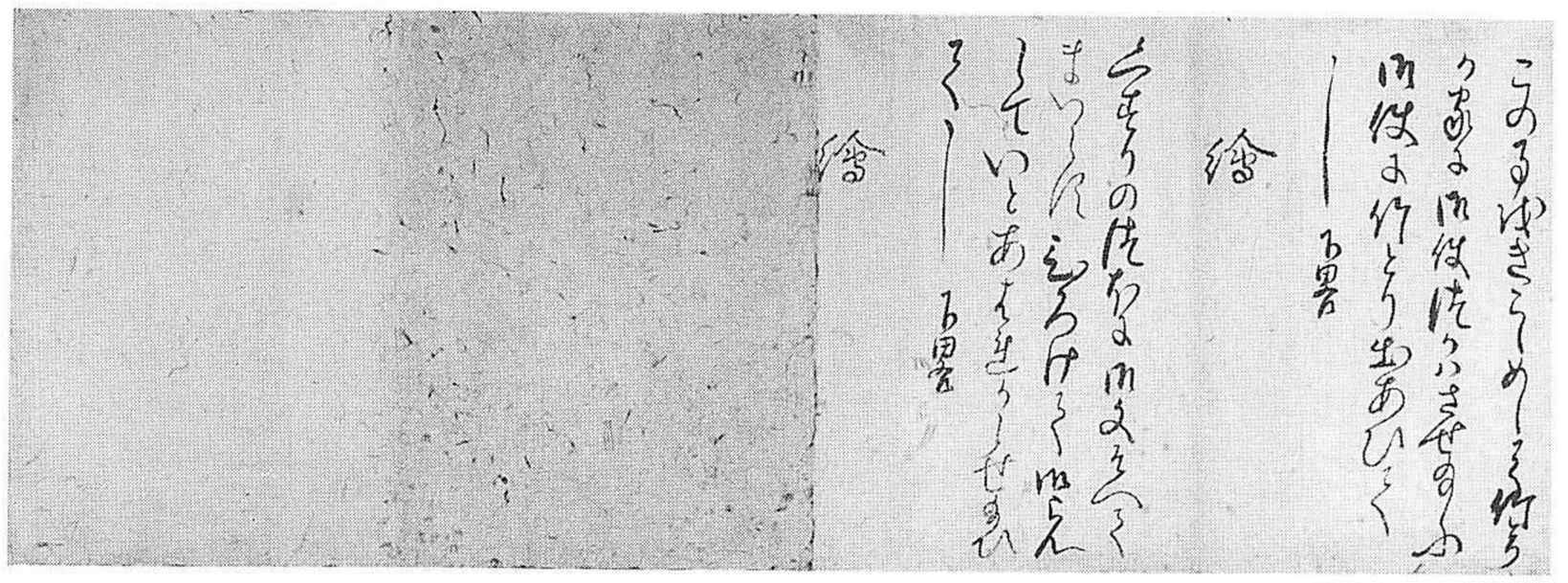
（一オ）



（一ウ）



（二オ）



（二ウ）

3竹取物語絵巻詞　（三三〇）
紙本墨書　一帖（二紙）　一六七×四七二
折紙二紙右端こより綴じ

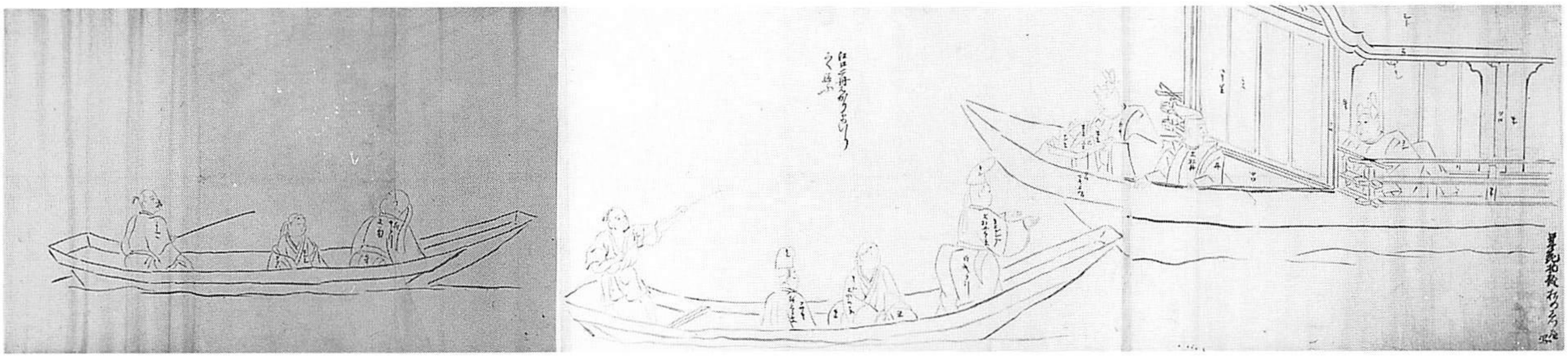
（第一紙表墨書）いまはむかしたけとり乃／おきなといふもの有けり／たけをとりつゝ／よろつの事／につかひけり名をさるき／のミやつことなむいひける、、、下畧」繪」
其中になをいひけるはいろ／このみといはる、人五人思る／やむときなくよるひるきたり／けりその名一人は、、、／、、、下畧」繪」

（第二紙裏墨書）この事をきこしめして竹とり／か上に御使つかハさせ給ふ／御使に竹とり出あひて／、、、下畧」繪」くすりの／つほに御文そへて／まいらすひろけて御らん／していとあはれからせたまひ／て、、、下畧」繪」

（第一紙裏墨書）、、、下畧」繪」くらもちの御子は心たは／かりある人にておほやけ／にはつくしの国にゆあみに／まからむとていとま申て、、／、、、下畧」繪」左大臣あへのミむらしハ／たからゆたかに家ひろき／人にておハしける其とし／きたりけるもろこし舟の／わうけいといふ人のもとに／、、、下畧」繪」大伴乃ミゆきの大納言は／わか家にありとある人を／あつめてのたまはくたつ／のくひに五色のひかりある玉あなり、、、下畧」繪」

（第二紙表墨書）中納言いそのかみのまろたり／の家につかはる、おのことも／のもとにつはくらめのすくひ／たらはつけよ、、、下畧」繪」扨かくやひめのかたちの世／に似すめてたき事を聞し／めして内侍なかとみ乃／ふさ子にの給おほくの人／の身をいたつらににして／あハさるかくやひめハいか／はかり乃女そとまかりて／見てまいれとの給ふ、、／、、、下略」繪」

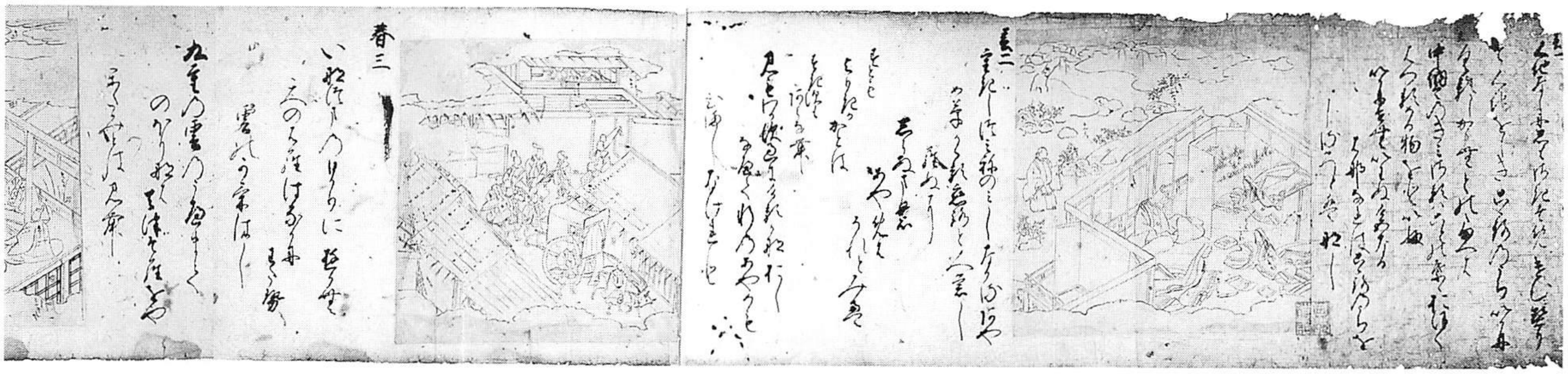
俄に日をさためて御かりに／出給ふてかくやひめの家に／入給ふて見給にひかり／ミちてけうらにてゐたる／人あり、、、下畧」繪」

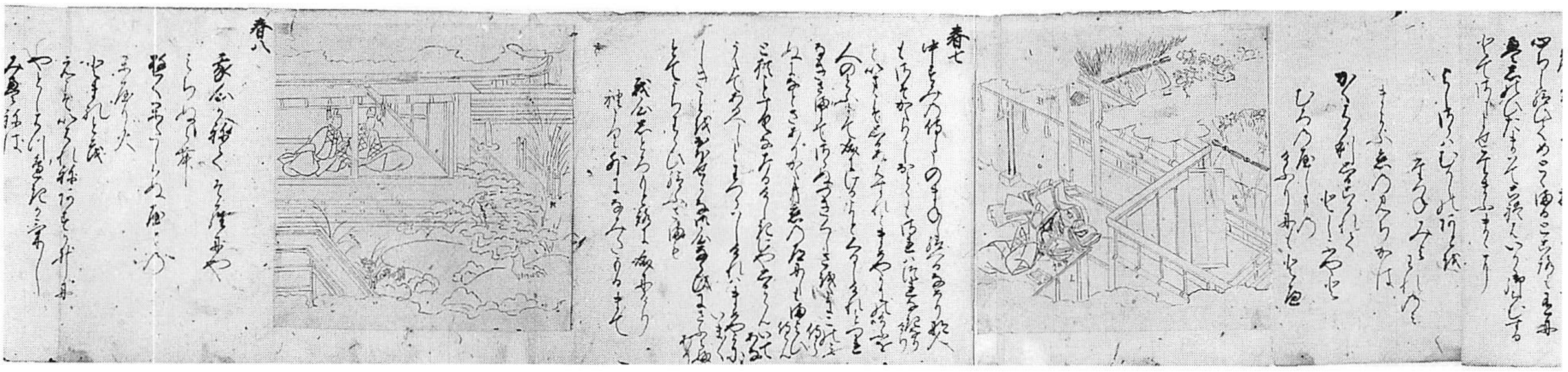


6栄花物語絵　（二七七）
紙本墨画　一巻　二八七×一二七一
三紙継

（第一紙右下墨書）栄華物語松のしつへ写」
（第二紙中墨書）江口二舟はかりまいり／ろく給ふ」

［画中色指示］
（第一紙屋台）朱」クロ」朱」シト」クロ」
キン」朱」クロ」ミス」ヘリ紫」クロ」
（第一紙人物）コン」丹」文牡丹」
（第二紙右端人物）アサキ」朱重」朱重」コン重」六重」クロ／マキエ有」
（第二紙下部人物）キン」生エンシグ」文牡丹唐草」白キラ引」朱」キノグ」文水取草」朱」キン」アサキ」桜唐草」シト」
（第三紙人物）白」キラ引」文菊」朱」エンシ」クン上」チヤ」





4狭衣物語絵　（二八一―一）

紙本墨画　一巻　三二〇×一〇三五〇

（第一紙色紙形継目朱文方印）画所／預記」

二七紙継、色紙形十八紙貼り付け

（第一紙裏右墨書）さころも」

（詞一墨書）春一」くちなしにしもさきそめけむ契り／そくちをしきこゝろ乃うちいかに／くるしからむとのたまへは／中納言乃きミさるハことの葉ゝおほく／はへるめる物をといふ／いかにせむいわぬ色なる／はなれはこゝろ乃うちを／しるひとはなし」

（詞二墨書）春二」うきしつミねのミしなかるあや／め草かゝる恋路と人もし／らぬに／しらぬまの／あやめはそれとみえ／すとも／よもきかかとは／すきつもあらなむ／見もわかす過ぬけるかなおし／なへて軒乃あやめも／ひましなけれと」

（詞三墨書）春三」いなつま乃ひかりにゆかむ／天のはらはるかにわたせ／雲のかけはし／九重乃雲乃うへまて／のほりなは天つそらをや／かたみとは見む」

（詞四墨書）春四」身のしろも我ぬききせんかへしつゝ／思ひなわひそ天乃はころも／と覚さるゝ御ありさまにやと心うる事もあれ／といてやむさし野のわたりよるの衣ならましかは／とけにかへまさりにや覚えましと思ふくま／なき心ちすれとうちかしこまりて／むらさき乃身のしろ衣それならは／乙女乃袖にまさりこそせめ」

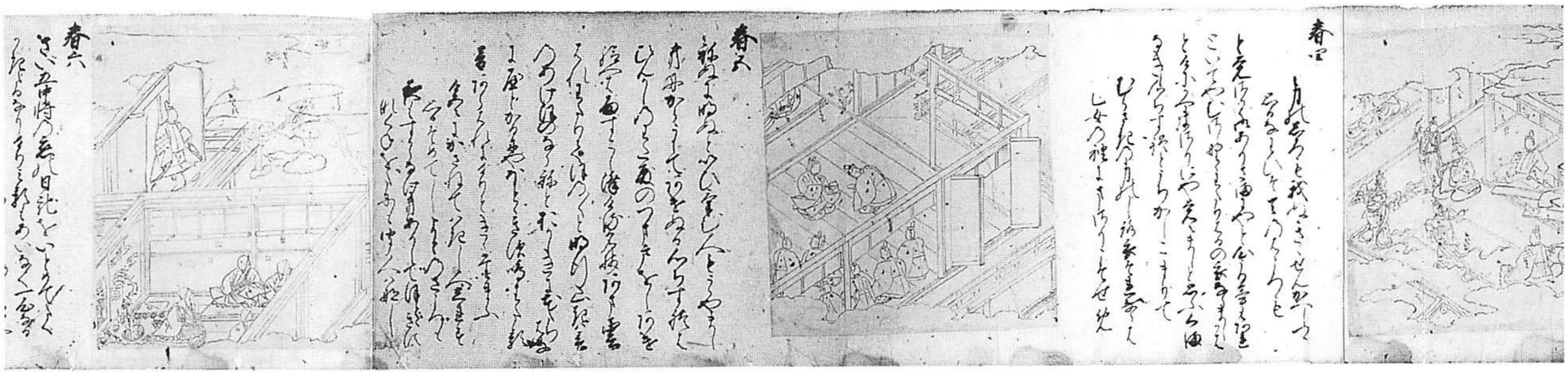
（詞五墨書）春五」ねぬに明ぬといほけむ人もうらやまし／きにからうしてあけぬる心ちすれは／ひんかし乃わた殿のつま戸をしあけ／給へは雨すこし降ける名残あま雲／はれわたりてほ乃〳〵と明け行く山きハ／乃あけほのならねとおかしきに花たちはな／にやとかるにやほとゝきす鳴わたる／音あらはれにけりときゝたまふ／色々にかさねてハきし人しれす／思ひそめてしよはのさころも／夜もすからなけきあかしてほとゝきす／なくねをたにもと聞人ハなし」

（詞六墨書）春六」さい五中将乃恋の日記をいとめてたく／かきたるなりけりミるもあいなく一心なる／心ちし給ひてめとゝまるところも有に／えしのひたまハてこれはいか、御らむする／とてさしよせたまふま、に／よしさらハむかしのあとを／たつねみよわれ乃ミ／まよふ恋乃みちかは／かくはかり思ひこかれて／としふやと／むろ乃屋しま乃／けふりにもとへ」

（詞七墨書）春七」中すみ乃侍しうのまねし給へるなめりな人／もさそかたりしなと、もされハつれなきなりけり／といまこそ思ひあはすれとまめやかにの給ふを／人の人のとふまて成にけるよとくるしけれとつれ／なきさまにてさらぬつき〳〵しさをたにこのミ侍ら／ぬになとさありかたき恋乃道にしもまよひ侍らん／とおことすくなるけしきにやしるからんいてあな／うたてあるへしとわつらハしけれハまめやかにいと覚さるゝ御ありさまにやと心うる事もあれ／といてやむさし野のわたりよるの衣ならましかは／とけにかへまさりにや覚えましと思ふくま／なき心ちすれとうちかしこまりて／むらさき乃身のしろ衣それならは／乙女乃袖にまさりこそせめ」

（詞八墨書）春八」我心かねてそらにや／ミちぬらむ／ゆくかたしらぬやと乃かやり／火」とまれとも／えこそいはれねあすか川もうらやまし／きにからうしてあけぬる心ちすれは／ひんかし乃わた殿のつま戸をしあけ／給へは雨すこし降ける名残あま雲／はれわたりてほ乃〳〵と明け行く山きハ／乃あけほのならねとおかしきに花たちはな／にやとかるにやほとゝきす鳴わたる／音あらはれにけりときゝたまふ／色々にかさねてハきし人しれす／思ひそめてしよはのさころも／夜もすからなけきあかしてほとゝきす／なくねをたにもと聞人ハなし」

（詞九墨書）春九」聲たてゝなかぬハかりそ物おもふ／身はうつせミに／おとりやはす



る」なとくちすさミにいひまきらハして
蟬／くわうよふにないてかんくの秋なり
と／しのひやかにすんしたまふ」
（詞十墨書）夏十」よし野川わたるよりまた
わたれとや／返〳〵も猶わたれとや」ひは
をとりミせて姫君に奉るまたに／まつさる
をつなけとさざめくしもれ／いのあらハに
そきこゆるをしへられて／いとしとけなく
ゆる〳〵とそつなき給ふ／又さしよりてそ
のつきにかなてをと／ひちしてつくめれハ
いたち笛ふくさる／かなとつとひき給ふえ
おしろいとおもしろう／めてたう覚ゆるに
ゑたらす心もすミ／わたりていなこまろハ
ひやうしうつきり〳〵／すハなとほそめあ
かてくひすちひきたて、／おれかへりかい
なくそはかほのみすにすきて／みゆるもい
とおかしなとは世乃子ことこそ」
（詞十一墨書）夏十一」あすか川あすわたら
むと思ふにも／けふ乃ひるまはなをそ戀し
き」まことしく／とくかたり／あはす」へ
き／夢をこそ／ミつれいと／心もと／な
く」なむと／こまか／なれは／御かへりに
は」わたらなむ水まさりなはあすか河／あ
すはふち瀬に／なりもこそすれ」
（詞十二墨書）夏十二」かはらしと／いひし
椎柴／まち見はや／常盤の松に／秋や見ゆ
ると」とかへる／山若とありし／月影は／
此世の外に／なりぬとも／忘るへき／心地
も／せぬをいかになし／つるそとあや」し
う心／ほそう／ひをつく〳〵と／なかめ
侍／涙くミ給へるけしきのいとらうたけ／
なるをめ／のとはさすかにうち見／おこせ
て／こゝろも／しらぬ」人に／うちまか
せ／きこえて／はるかなる／程にいて／た
ち／たまハむハ／くちをしき御さま／かな
と／さす／かに／なミた／こほれ／けり」
（詞十三墨書）夏十三」天のとをやすらひに
そ出しかと／夕つける鳥よととハゝこたへ
そ」我身ハいかに成ぬるにかとしふかいミ
しきに／淀といふ所にいきつきぬれハ舟に
のせんと／てのゝしりあひたるにされハこ
そときはにハあらさるけりと思ふに物も覚
ねとめハ／見ゆるにやきしに舟よせてうつ
さんとて／とし廿ハかりなる男のそゝろか
なるさまかた／ちいといミしう思ふよなけ
にて心ゆきたる／けしきにもてなして大貳
殿ハ御物いミのかたかりつれハとみにもい
てゝをくれ／奉りぬるも御きそくのよろし
からさり／つれハいとまもえ申こそたまは
らせたれ／なといひて」
（詞十四墨書）夏十四」わたる舟人かちをた
えと返々かゝれたり／そのおりには我とし
りてかゝれたるにあら／しをされとたゝ今
ミつけたハことしも／こそあれといかゝか
なしとおもはさらん／かほにあてゝなか
るゝさまゑもミなかれ／出ぬべし」かち
をたえ命もたゆとしらせはや／涙乃うミに
しつむ舟人」そへてける扇のかせをしるへ
にて／かへる波にや身をたくへまし」海ま
ては思ひやいりし飛鳥川／ひるまをまてと
たのめし物を」
（詞十五墨書）夏拾五」おく乃おましにひき
いれ給へるに／思ひもあへすたそといはれ
給ふに」しにかへりまつに命そたえぬへ
き／中〳〵何とたのみそめけん」かつらき
の神乃かたにあらはれいつへき／心ちもせ
す神とさま〳〵に覚しみたれて」岩はしを
よる〳〵たにもわたらはや／たえまやあら
んかつらき乃神」出給へはうらめしくてお
したて給ふ」
（詞十六墨書）夏十六」吹はらう四方の木か
らし心あらは／うき名をかくす雲もあらせ

よ」人しれすおさふる袖もしほるまて／しくれと共にふる涙かな」き、わくへくもあらすいひまき、ハし／給ふを中納言のみ、くせに」心からいつも時雨乃もる山に／ぬる、ハ人乃さかとこそきけ」

（詞十七墨書）夏十七」若宮の御ありさまに大宮乃御心地もす／こしなくさミ給ふてつねよみ奉らせ給に／あかすまことにうつくしき御有さまいすこなりし／人そと覚さる、涙乃ほろ〳〵とこほれかゝり給／もかハかりおくゆかしく物思はせ給ひつる人とも／覚えすかゝる御ありさまをみすくしてあらん／人乃かくこゝろうく覚されて」雲井まて生のほらなんたねまきし／人もたすねぬみね乃わか松」

（詞十八墨書）夏十八」かハかり思ひなけくを夢にやみ給ふらん／と思ひつゝけ給に袖もしほるハかりに成ぬ／池舟もたちぬるをしの音なひもかなし／心に覚さるれハ」我ハかり物は思ハし冬乃よの／つかはぬをし乃うきね成とも」

（第二十六紙墨書）一二乃次第ハおしやうの事也繪の次第にてハなく候」

［画中墨書］

（絵一右人物）白」こうはい／かさね」うすむら」こん／かさね」ゑんし／かさね」あさき」たん」白

（絵一屋台）あひか／てい」こまかに」ミつ」ミつ」

（絵一庭）そさう／ミな／山ふき」てい」てい」こんミつ」松ニふち」てい」てい」

（絵一左人物）山ふき」たん」

（絵二上屋台）しとミ」こ」チ」しゆ」白」キ」すたれかゝる」

（絵二中人物）白」白」うすこうはい」ゑん

（絵二車人物）白」ていにてミす」白」白」

（絵二左屋台）もかり」

（絵三右人物）あさき」あさき」あさき」ゑんし」あさき」わこんか」

（絵三右雲）そら色」

（絵三右屋台）ていミ」ていミす」ていミす」

（絵三左舞人物）わうとのく」しゆ」うすあさき」うすあさき」うすこう／はい」白」

（絵三左上人物）ていミす」しゆ」しゆ」しゆ」うんけん」

（絵三左下屋台）ひわた」

（絵四左上人物）しゆ」ちや」うんけん」六色々／にて／あり」

（絵四下人物）む」む」む」あさき」御ま／こう／あり」

（絵五上鳥）ほとゝきす」

（絵五庭）かしわ」ミつ」なつはき」

（絵五屋台）うス」

（絵五下人物）白」うすすミ」同」同」かうのころも」たん」此内くろ也」

（絵六庭）ざくろ」秋はき」秋き」

（絵六調度）白」たん」

（絵六人物）うすむら」かさ／ね／うすこうはい」

（絵七人物）かむり」

（絵七庭）■（不読）」はなさく所」なつはき」

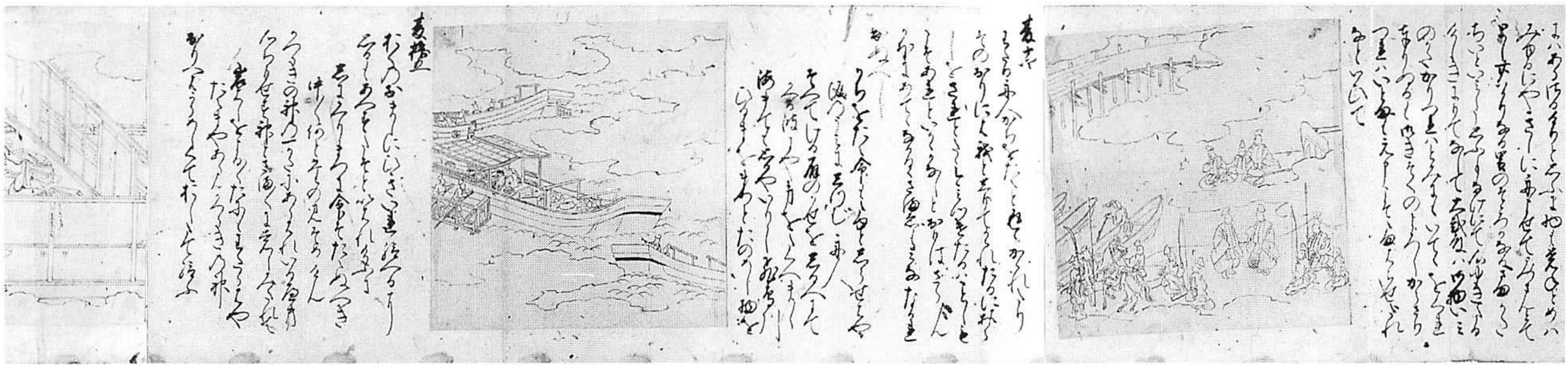
（絵八庭）月」しハかき」つきゝ」たけかき」

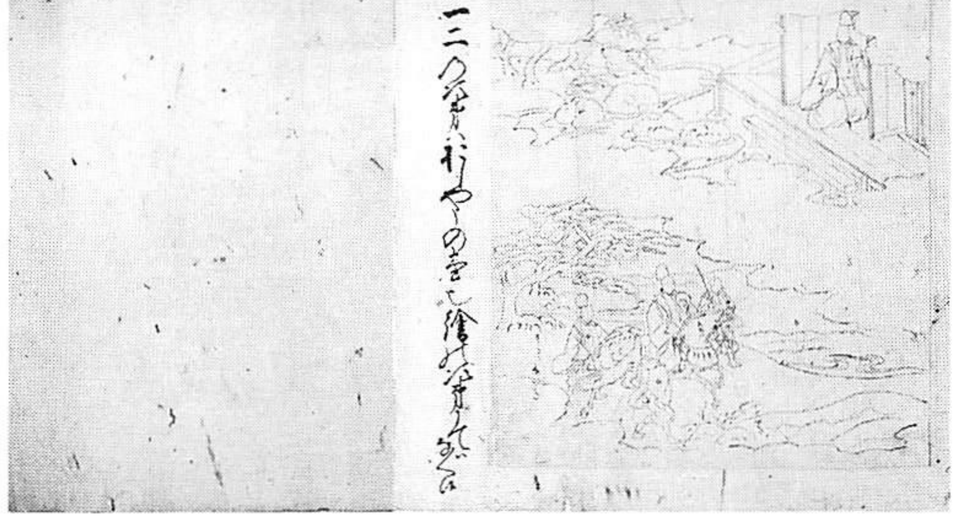
（絵八上人物）てい」ミしてい」てい」白てい」

（絵八車）わきミす」六し」

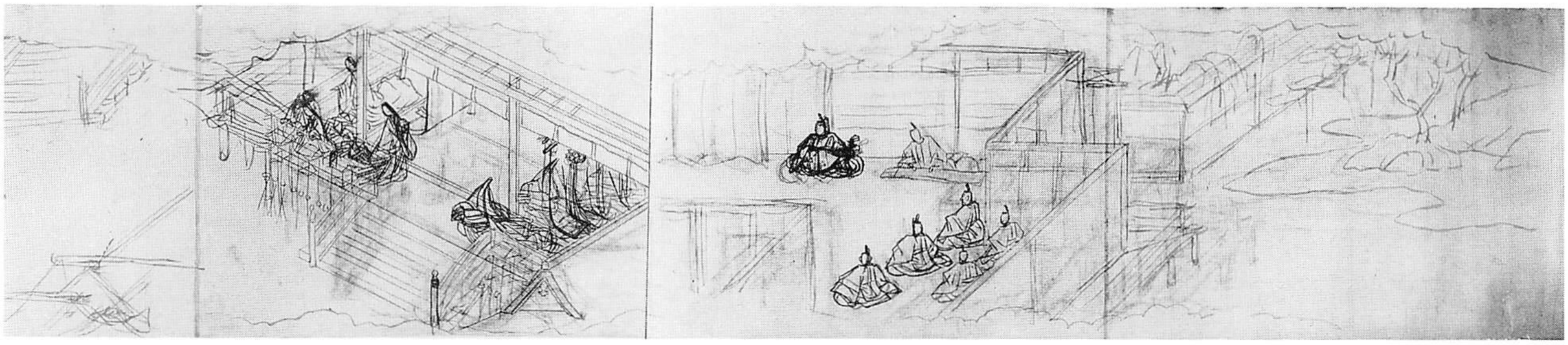
（絵九庭）ひま木」ミあり」なてしこ」

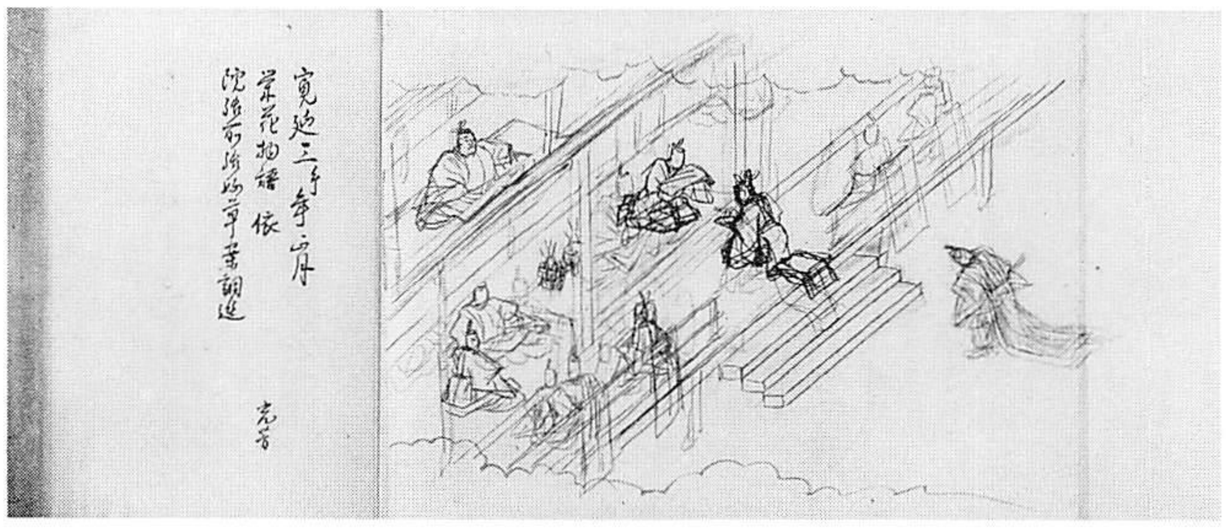
（絵九右人物）き」たん」たん」き」白」

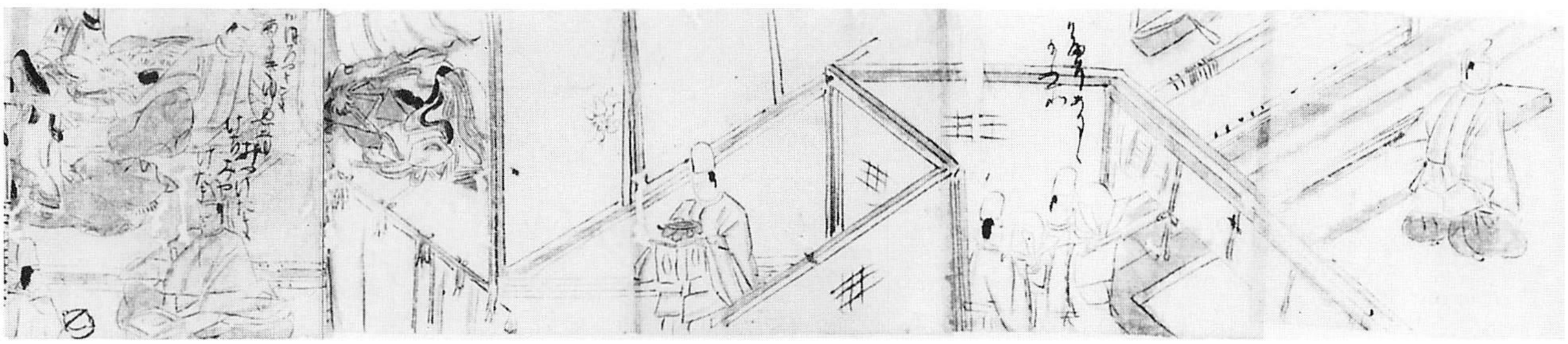


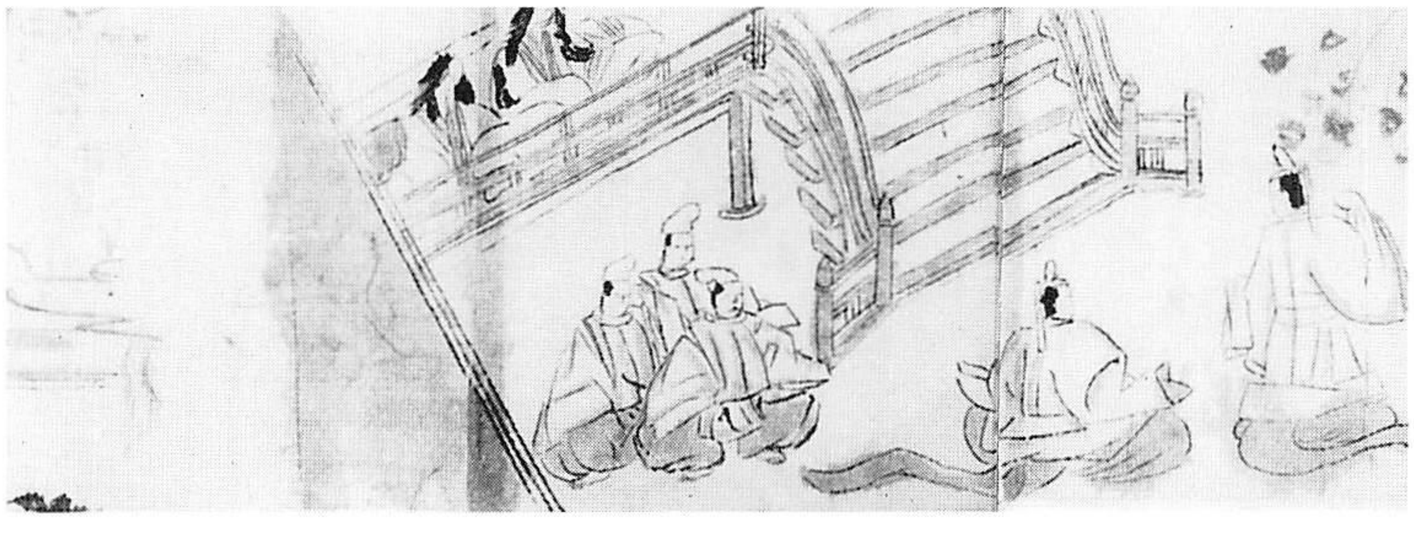


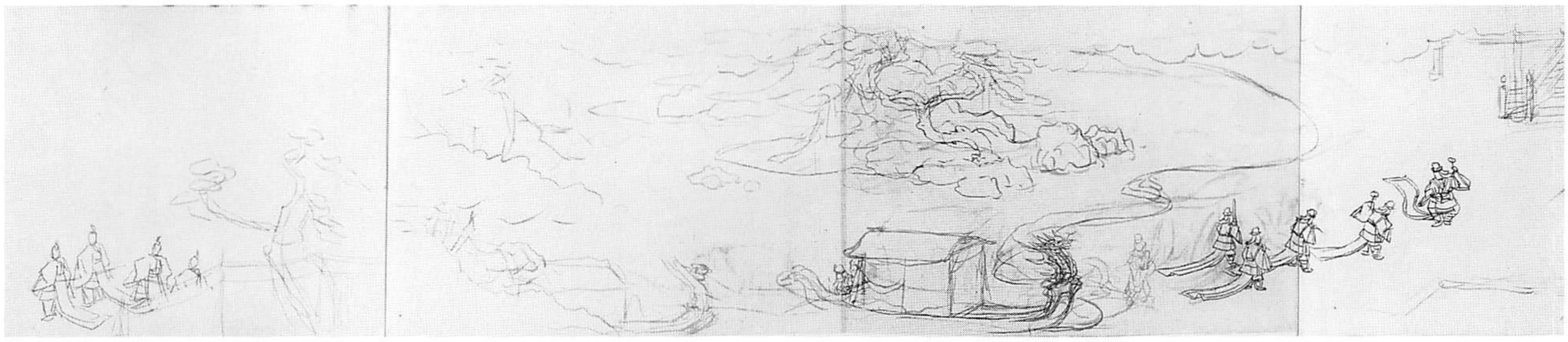
(絵九左人物)うすむら」たん」しゆ」
(絵十庭)さくら」
(絵十右人物)白」ふすましやうしかつら／すゝき／ていひき」
(絵十左上人物)白」たん」ろう／かさね」
白」白」こうはいかさね」うすむら」しゆ」
(絵十下女房)こうはいかさね」うすむら」
白」かさねもてい」白てい」こうはいかさね」白」しゆ」うす丹」むらかさね」六」
六かさね」しゆ」たん」白」白」むらさき」
白」たん」たん」う／むかさね」六」き」
こん／かさね」白」
(絵十一右人物)うすむ」白」ていにてかく」
白」
(絵十一屋台)すきしやうし／たけ」さくら」
こん」
(絵十一庭)さくら」秋はき」秋はき」
(絵十二右人物)しゆ」うす丹」こうはい」
白」たん」き」き」
(絵十二左人物)あさき」白」白」白」しと」
こん」しとのく」白」
(絵十三中)ミつ／こん」
(絵十四左船)六」六」白」むら」
(絵十五屋台)ミそ」かうし」かうし」かうし」かう
し」白」まるはしら」かうし」
(絵十五中人物)銀てい」こうはいかさね」
白」しゆ」うす丹」しゆ」こん／かさね」
たん」き」ゑんしかさね」しゆ」(こん)」
こうはいかさね」
(絵十六上人物)むらかさね」うすもへき」
こう」はい／かさね」うすむら」銀てい」
(絵十六庭)秋くさ色々」
(絵十六中人物)かむり」
(絵十七右人物)きぬ／うすむら」こうはい／かさね」白」ぎん／てい」ぎんてい」
き」たん」むらかさね」六」うすむら」こ
(絵十七庭)ミつ」
(絵十七屋台)白」うすこうはい」(白)」た
ん」(松)」ゆきたけ」さくら」もみし」花
さくら／しきの／てい」ていひき」
(絵十七左人物)銀てい」かさねもてい」ミ
な白」白」キ」こんかさね」しゆ」六」こ
うはいかさね」六」
(絵十八上人物)たん」
(絵十八庭)ゆき」ゆき」はうさうミなゆき」
(絵十八下人物)うすむら」あほけ」白」白」




寛延三年筆
栄花物語 依
説経節 苅萱道心 筆者

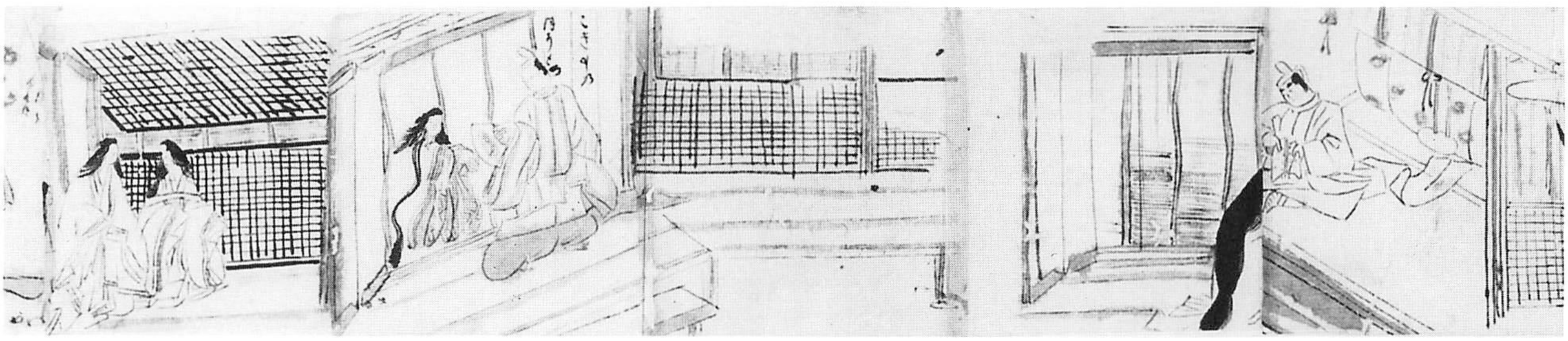






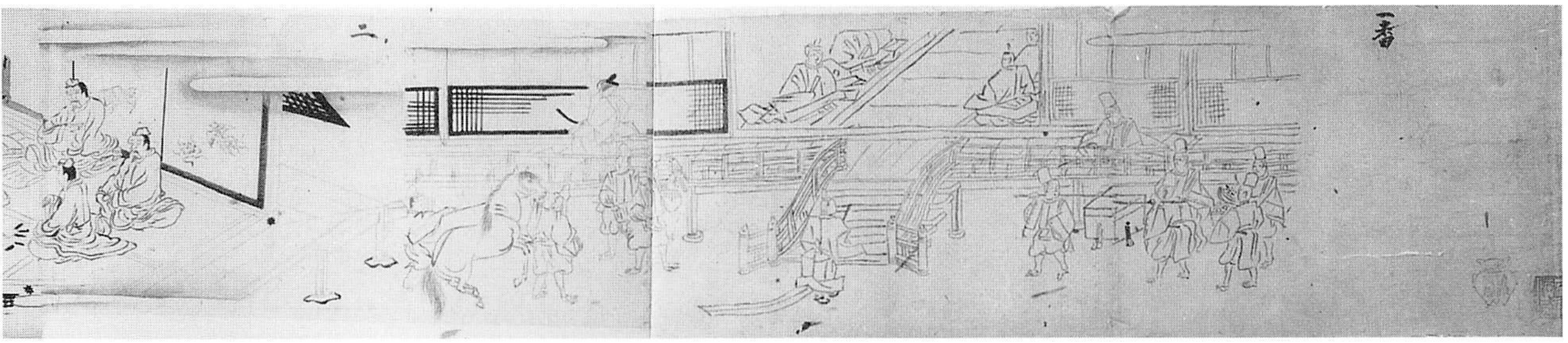
5 栄花物語絵巻　（二二九）
紙本墨画　一巻　二八六×三三八二
寛延三年（一七五〇）
土佐光芳
九紙継、焼筆あり

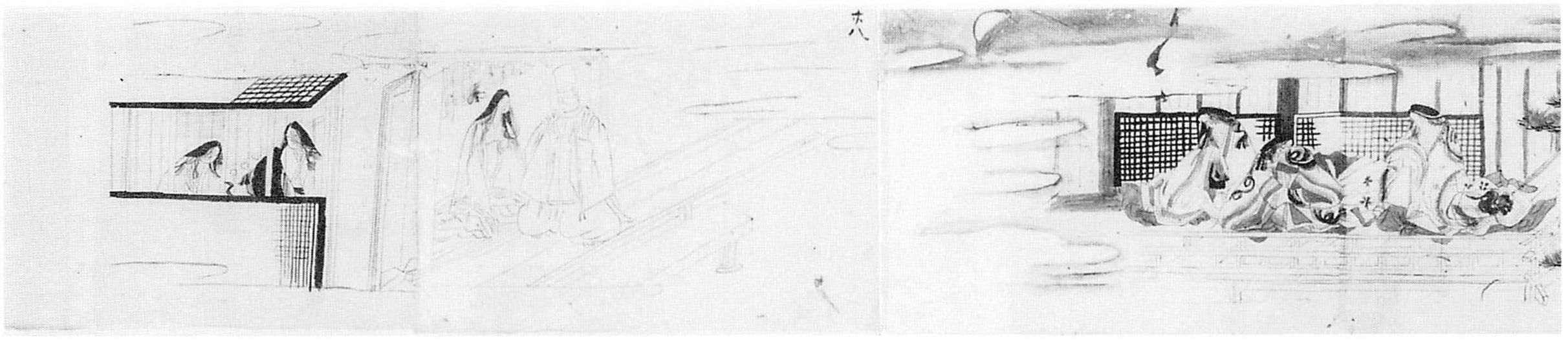
（第九紙墨書）寛延三午年正月／栄花物語
依／院御所御好草案調進」光芳」

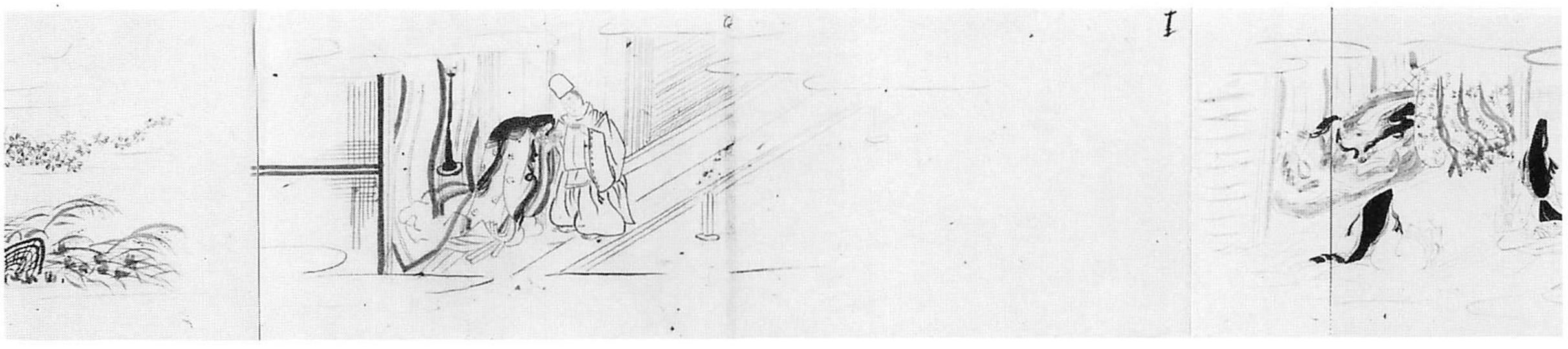


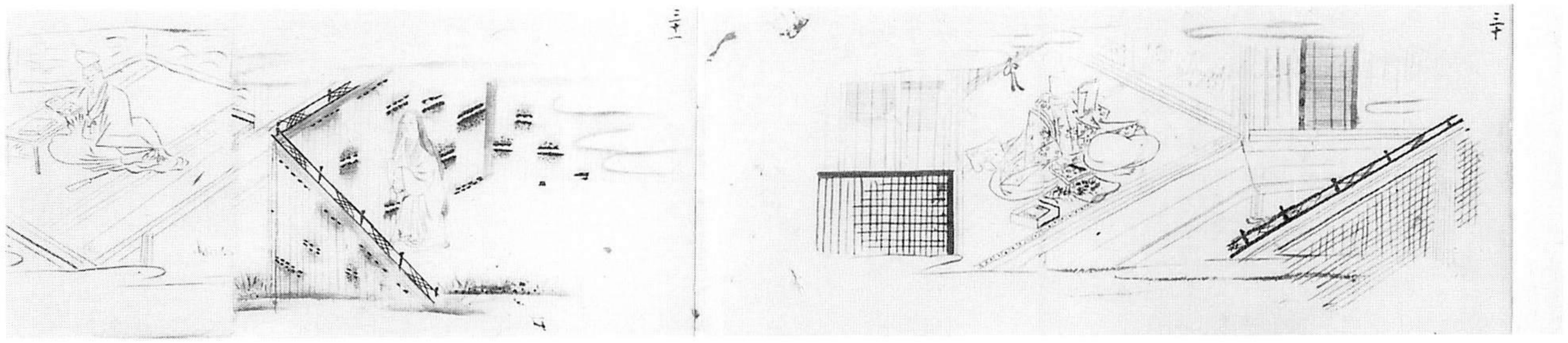
7 物語絵巻　（二七八）
紙本墨画　一巻　一一八×一三八三
十三紙継、旧目録に「栄花物語御賀写粉本」
とあり

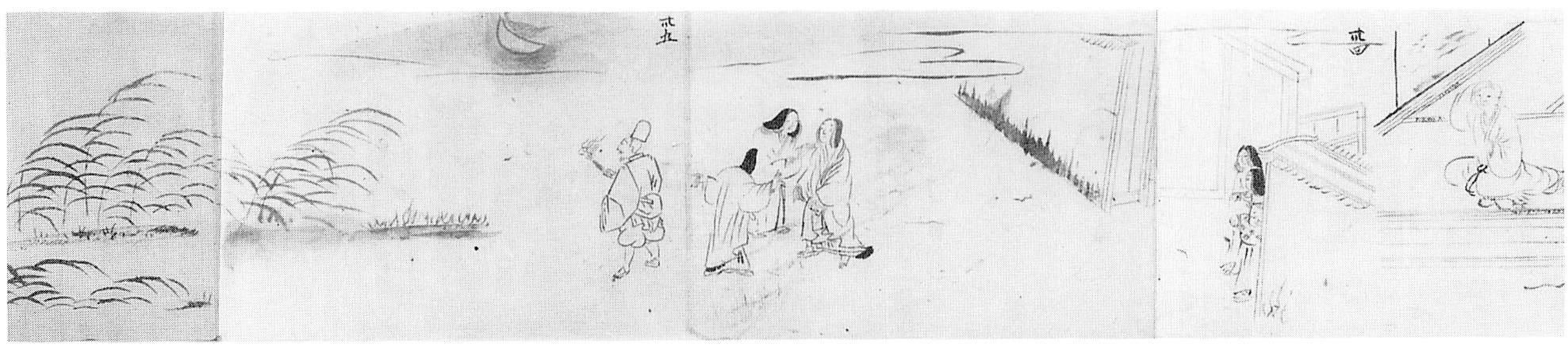
（第二紙墨書）ハへり」給ふ所」あかるく」
（第五紙墨書）おほろつきに／あらきゆゑ
ニ／みつけたき／けち／みつけたき」
（第九紙墨書）こき殿乃／ほうと」

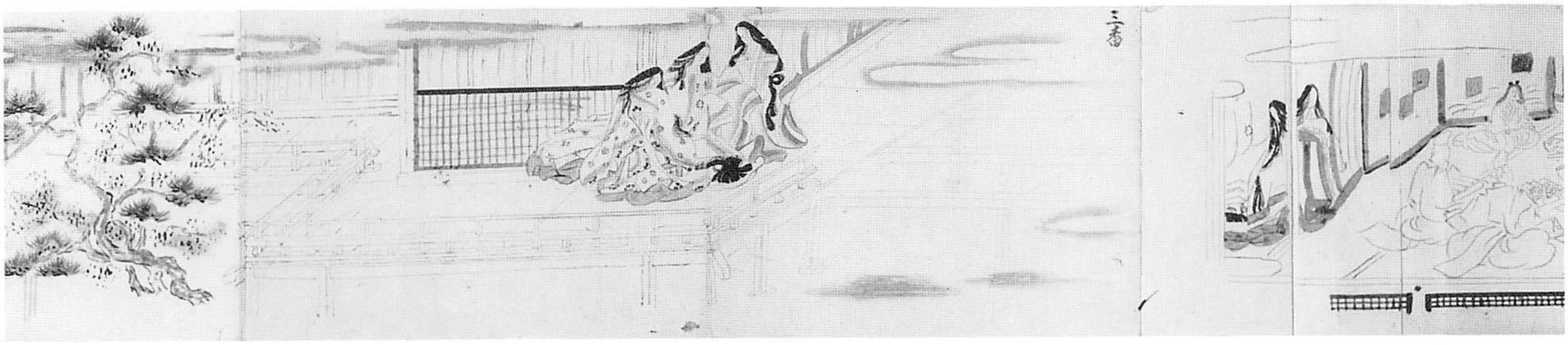


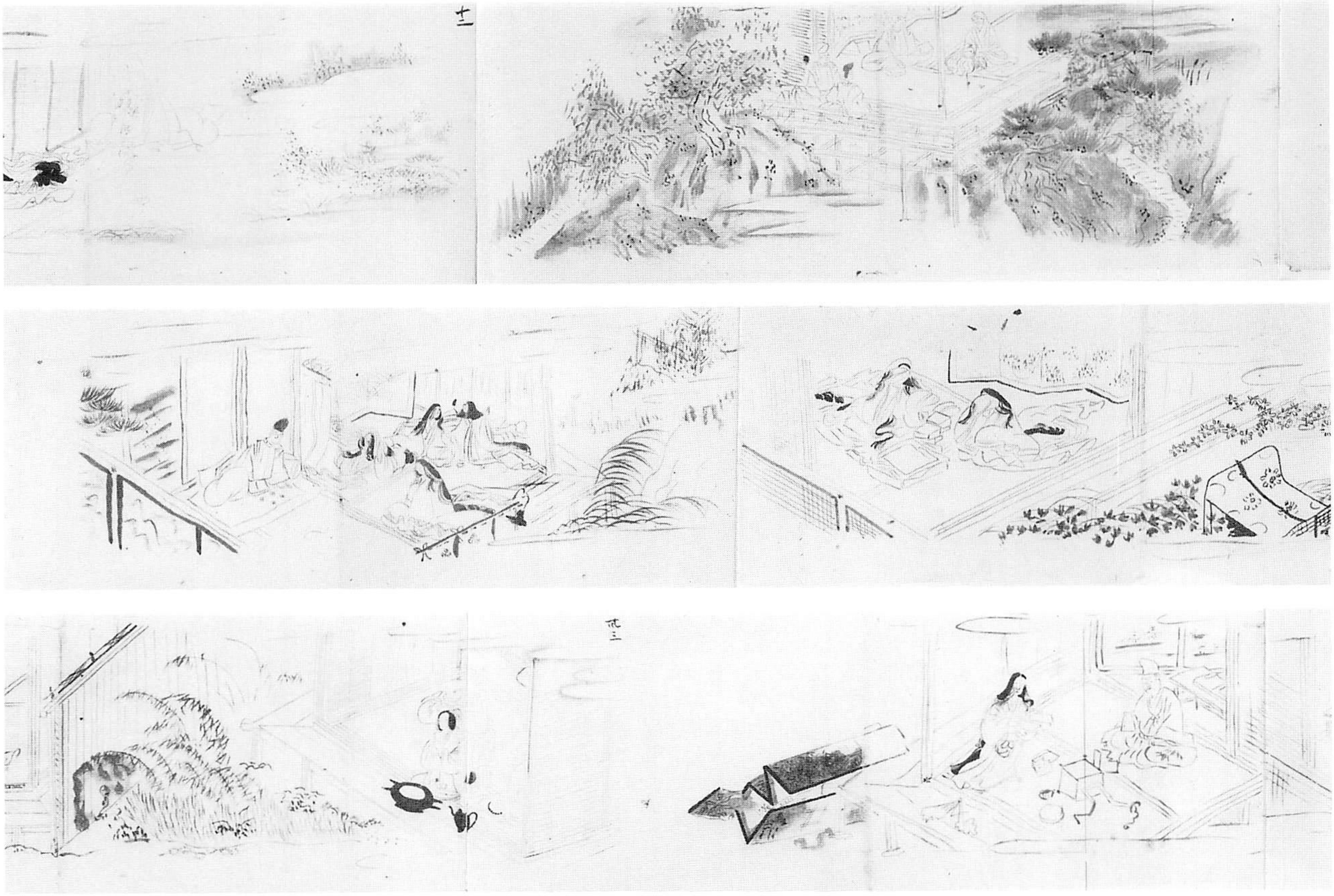












8物語絵巻　（別一四―一）

紙本墨画　一巻　一七〇×七二七七

（第一紙朱文鼎印）藤原／光武」

（第一紙朱文方印）欣魚／洞蔵」

（尾紙白文方印）欣魚／洞」

三十一紙継

（第一紙墨書）一番」

（第三紙墨書）二」

（第五紙墨書）三番」

（第九紙墨書）廿八」

（第十三紙墨書）十二」

（第十五紙墨書）十三」

（第二十一紙墨書）三十」

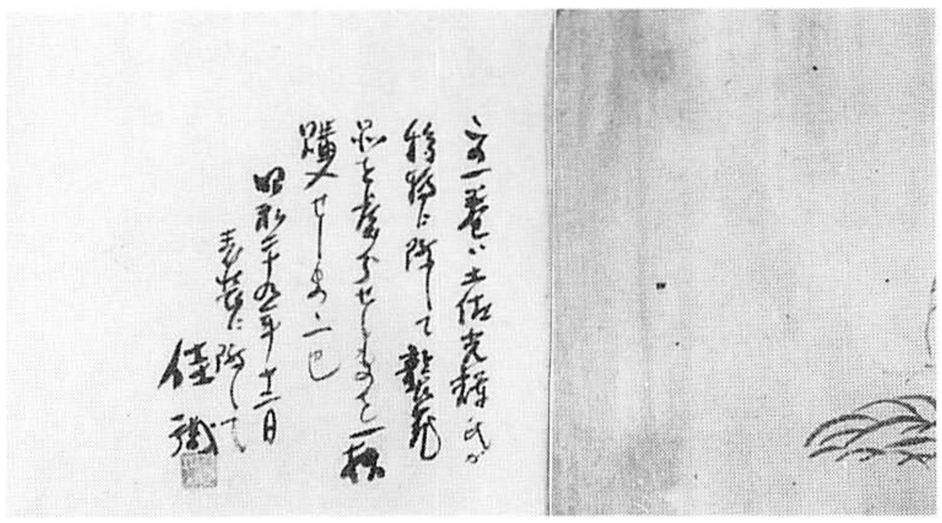
（第二十三紙墨書）三十一」

（第二十六紙墨書）三十三」

（第二十八紙墨書）卅四」

（第三十紙墨書）卅五」

（尾紙墨書）この一巻ハ土佐光輝氏が／移転に際して襲蔵／品を処分せしものを一括／購入せしもの、一也」昭和二十九年十二月／表装に際して／佳識」



9平家物語絵巻　（別一〇）

紙本墨画　一巻　二六一×一二二〇九

（第三十三紙左下朱文鼎印）藤原／光武」

（第三十三紙左下白文方印一部欠）欣／洞」

（尾紙下白文方印）欣魚／洞」欣魚／洞」

三三紙継、界線朱筆

（絵一墨書）久兵衛」大木／とも／たおれ／たるてい／かくへし」よく〳〵／（欠）を／（欠）へし」

（絵二墨書）ミす／やたい／けつこうに／かくへし」やね」

（絵三詞墨書）言葉之初繪　三」同九月廿三日平家の／よたう乃都にあるを／國々へつかハさるへきよし／鎌倉殿より公家へ申／されたりけれハ」言葉の末」右のかいなをハうてなか／よりうちをとし〳〵をひ／すてらるされハあくへつたう／とそ申ける」

（絵三墨書）なきなた／さや／さすへし」

（絵四詞墨書）言葉の初繪　四」主上■〈不読〉〈并〉三種の神器／都へ（欠）まつるへき／よし西國へ院宣を下／されたりけるに」言葉の末」大納言の哥／かへりこんことはかたに（欠）／目にもた（欠）／（欠）ミのうへに／たゝよひて怨憎會苦の／うらミを扁舟のうちにつミ／けふハ北國の雪の下にうつも／れてあいへつりく乃かなし／ミをこきやうのくもにかさねたり」

（絵四墨書）からさきのてい」此遠」平／大納言」人／あまた」此間／遠く」つり／ふね」まつ」楊」

（絵五詞墨書）言葉の初繪　五」さる程に九郎判官にハ／鎌倉殿より大名十人／つけられたりけれ共」言葉の末」大番衆にふれめくらして／其夜やかてよせんとす」

（絵五墨書）はうくわん」人／あまた」やたいけつこうにかくへし」弁慶」土佐／きしやう／かく／てい」時ハ／九月／卅日カ」

（絵六詞墨書）言葉の初繪　六」判官は磯乃禪師とい（欠）／むすめしつかといふ女を（欠）／あい／せられけり」言葉の末」判官是をきいてやかてう／たちたまふ」

（絵六墨書）ミす」判官」しつか」人あまた」

（絵七詞墨書）言葉之初繪　七」しつかきせはした物」此間／うすゝミニて／遠くかくへし」二人なから／かむろ」人あまた」まく」土さ」

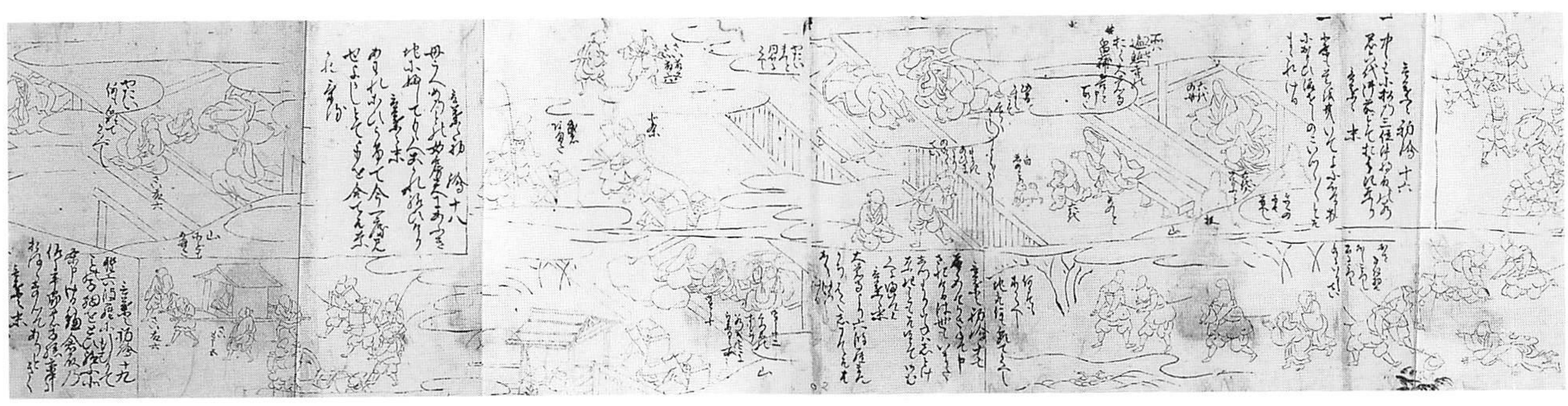
（絵七墨書）なかをとて／なけかけたてまつるたか／ひもハかりして太刀とて／出給へハ中門の前に鞍を／ひて引たてたり」言葉之末」さん〳〵にかけちらされて／たすかる物ハすくなふうた／るゝ物そおほかりける」

（絵七墨書）しつか」門ノてい」判官のかたにて／六七十きあるへし」人あまた」判官」よせて／四五十き／あるへし」とさ坊／夜打の／躰」

（絵八詞墨書）言葉の初繪　八」昌俊函にしてそこをは／のかれて鞍馬のおくに／にけこもりたりける」言葉之末」六条河原ひきいたいて／きてけりほめぬ人こそ／なかりけれ」

（絵八墨書）判官」やたい／けつこうに」正僧かちんのひたたれ／すちやうづきん」此間／とをく／かくへし」何にても／木共」

（絵九詞墨書）言葉之初繪　九」爰に足立乃



新三郎／といふ雑色ハきやつハ／下臈なれ共以外さ／かく〳〵しいやつて候」言葉之末」起請をかいてまい（欠）／られたりけれ共／なかハつしてついに／うたれ給ひけり」

（絵九墨書）よりとも」のりより／きしやう（欠）」つほの内てい」何にても／木共／かくへし」

（絵十詞墨書）言葉之初繪　十」一其後北条四郎時政／を大将として打手のほ／るとき／こえしかは」言葉之末」六条河原に引出してきて／けり」

（絵十墨書）菊池次郎／高直」人ヲさしのけて／心得て／かくへし」

（絵十一詞墨書）言葉之初繪十一」其後維義かい〳〵しう領／状す同十一月二日九郎大夫判／官院御所へまいて大蔵卿泰経朝臣をもて奏聞しけるハ」言葉之末」一三日の卯剋に京都にいさゝ／かのわつらひもなさす浪風も／たてすしてくたりにけり」

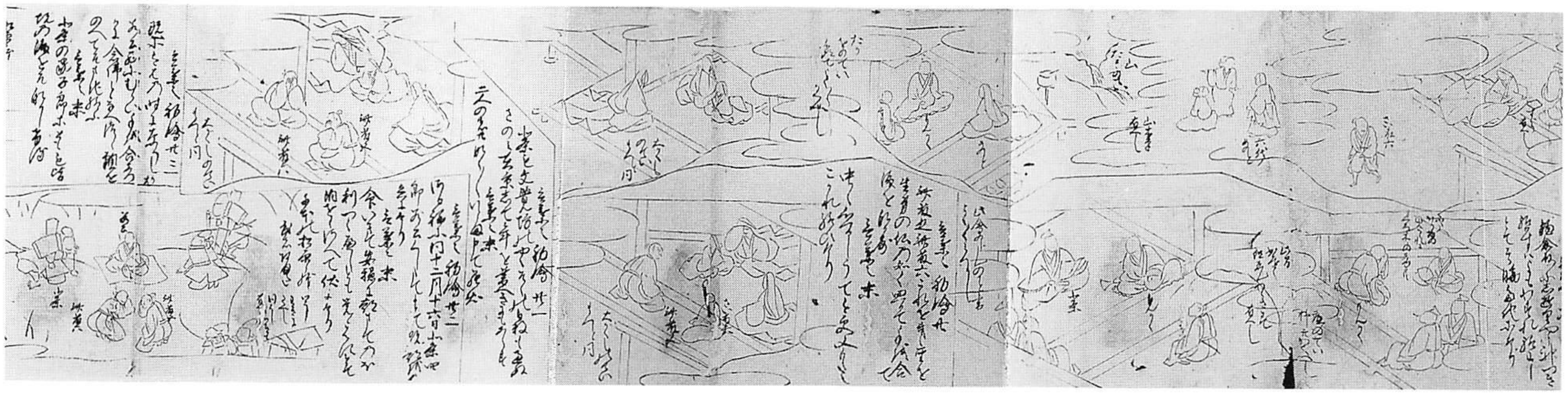
（絵十一墨書）庭之所木等有へし」屋たひけつこうに」時ハ十一月二日」よしつね」

（絵十二詞墨書）言葉之／初繪十二／摂津國／源氏太田太／郎頼基わか／門のまへをとほ／しなから矢ひとつ／いかけてあるへきかとて」言葉之末」一家子郎等おほくうたせ馬／乃腹いさせてひきしりそく」

（絵十二墨書）太田／太らう」津國／河原津／と言所也」し人／あまた」此間／遠く」判官」ちんせいへ／下／給ふ躰」五百／餘騎」

（絵十三詞墨書）言葉之初繪十三」判官頸共きりかけていくさ／神にまつり門てよしと悦て／大もつ乃浦より舟にのてくたられける」言葉之末」西の風吹きけることも平家の／怨霊乃ゆへとそ覚ける」

（絵十三墨書）したの／三ろせん／しやう／五」さい藤六」北条」武し／あまた」



（絵十七詞墨書）言葉之初繪十七」やゝあてかさねて申／されけるは世もいまた／しつまり候ハねハしとけ／なきこともそ候とて御む／かへにまいて候」言葉之末」大覚寺より六波羅まて／かちはたしにてそは／しりける」

（絵十七墨書）山」をとし十二」くろ木の／ずゞヲ／若きミに／被参給候所」をとし十」さいとう五」さい藤六」

（絵十八詞墨書）言葉之初繪十八」母うへめ乃と女房天にあふき／地にふしてもたへこかれ給ひけり」言葉之末」あわれこひうけて今一度見／せよかしとて手を合てそな／かれける」

（絵十八墨書）山／木ども／あまた」さい藤六」やたい／何も心得て／かくへし」すゞり／有へし」さい藤六」六代ノ／めのと」山木草／有へし」山／たきのてい」めのと」もんかく」そう」たか／をのてい／心得てよく〳〵／かくへし」大かくし／のてい／まへと同」

（絵十九詞墨書）言葉之初繪十九」聖六波羅に行むかて／ことの子細をとひ給ふ北条申されけるハ鎌倉殿乃／平家の子孫京中に／おほくしのんてありときく」言葉之末」鎌倉殿にちゆりやう神つき／給ハすハよもわすれ給はし／とて其暁たちにけり」

（絵十九墨書）ふたへ／おり物の／ひたゝれに／くろ木のしゆす」もんかく」庭のてい／柳共かくへし」此間／少遠く／但ゑんつゝきにて／有へし」もんかく」北条」此會のだんのこと書／よく〳〵ミへ申し」

（絵二十詞墨書）言葉之初繪廿」斎藤五斎藤六これをきゝ聖を／生身の仏乃如く思ひて手を合て／涙をなかす」言葉之末」中ゝ心くるしうて今更又もたへ／こかれ給ひけ

（絵二十墨書）さい藤六」斎藤五」大かくしのてい／まへと同」

（絵二十一詞墨書）言葉之初繪廿一」北条もかさねて申／されけるは世もいまた／しつまり候ハねハしとけ／なきこともそ候とて御む／かへにまいて候」言葉之末」大覚寺より六波羅まて／かちはたしにてそは／しりける」

（絵二十一墨書）山」をとし十二」くろ木の／ずゞヲ／若きミに／被参給候所」をとし十」さいとう五」さい藤六」

（絵二十二詞墨書）言葉之初繪廿二」さる程乃と女房天にあふき／地にふしてもたへこかれ給ひけり」言葉之末」あわれこひうけて今一度見／せよかしとて手を合てそな／かれける」

（絵二十二墨書）千本の松原ノ躰」武しあまた」御こし／わきに／かくへし」同こし／（欠）きも／有へし」斎藤五」斎藤六」若公」北条」

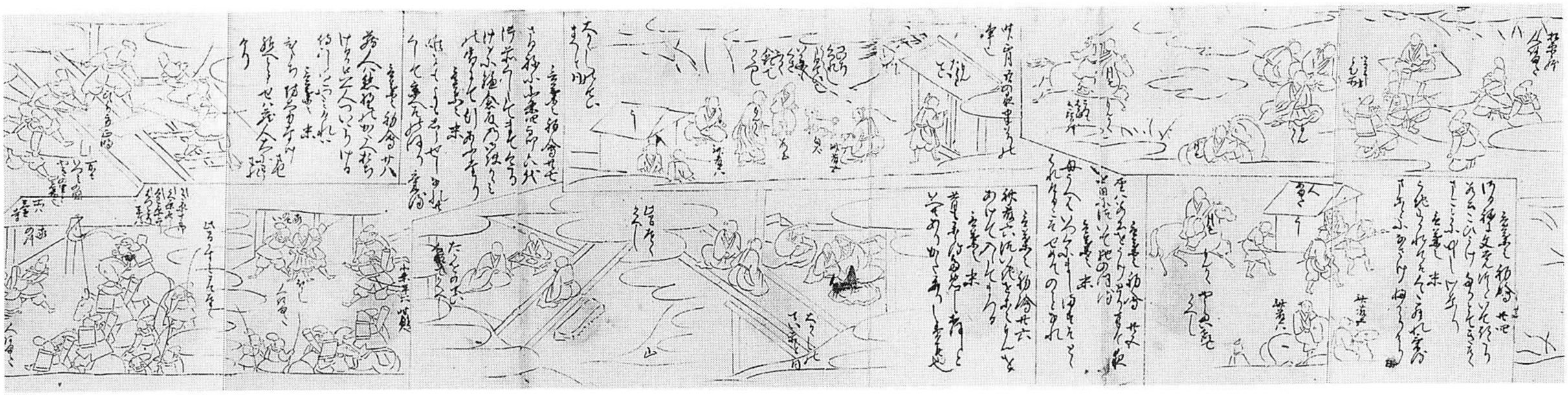
（絵二十三詞墨書）言葉之初繪廿三」既に今は乃時になりしかは／若公西にむかひ手を合しつ／かに念佛となへつゝ頸を／のへてそまち給ふ」言葉之末」北条の家子郎等とも皆／悦乃涙をそなかしける」

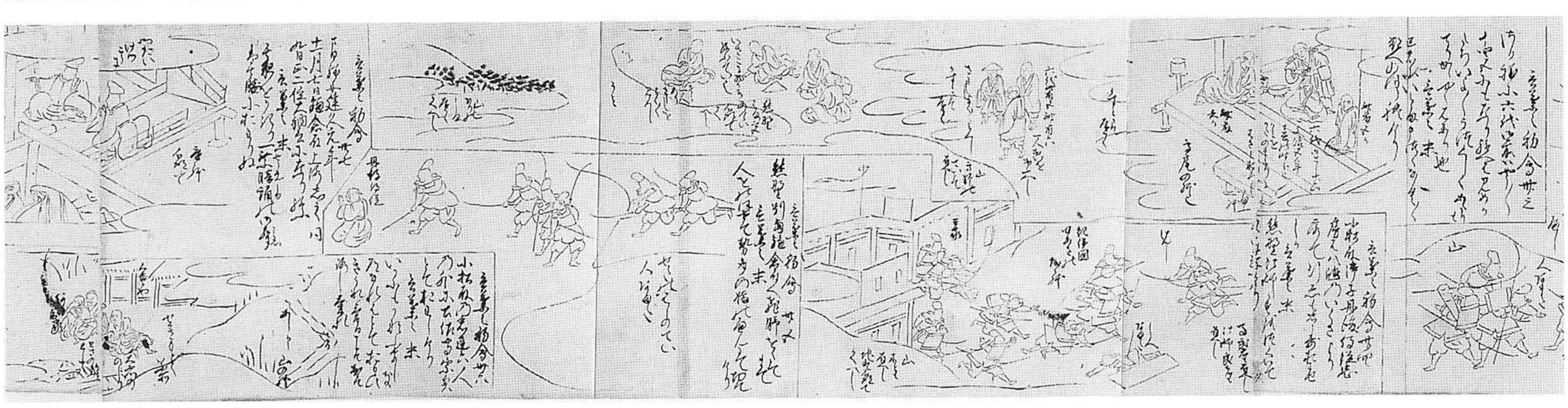
（絵二十三墨書）松原ノ躰／人あまた」御きよう書／よむ所」もんかく」月毛」月毛」

（絵二十四詞墨書）言葉之初繪廿四」さる程に文覚以といてきたり／若公こひうけたりとてきそく／まことにゆゝしけなり」言葉之末」うちわかれてそくたられける／まことになさけふかゝりけり」

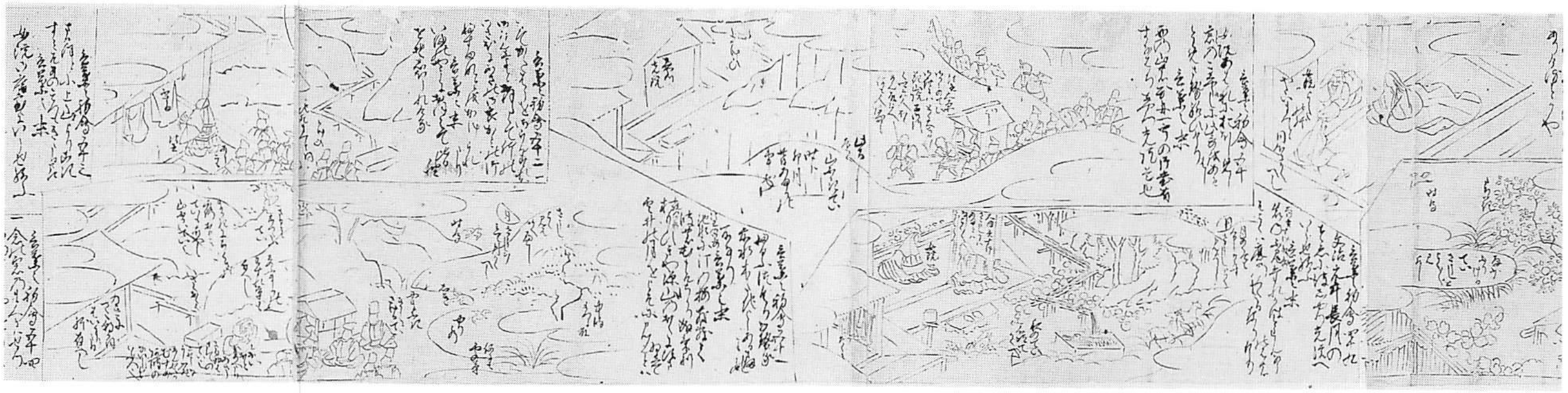
（絵二十四墨書）斎藤五」斎藤六」人／あまた」こし」月毛」もんかく」やうたい心得て／かくへし」

（絵二十五詞墨書）言葉之初會廿五」聖若公をうけとり奉て夜／を日について馳のほ





る」言葉之末」母うへはいつくにましますそと、／はれけるこそせめてのことなれ」
（絵二十五墨書）時ハ正月五日の夜半ハかりの／事也」もん／たゝく／てい」ついち／くつれ／たるていなり」いかにも／くさ／ふかく／心得て／かくへし」斎藤五」白犬」若公」もんかく」斎藤六」こし」大かくしのてい／まへと同」
（絵二十六詞墨書）言葉之初會廿六」斎藤六ついちをこえもんを／あけて入たてまつる」言葉之末」昔もかゝるためしおほしと／いへ共ありかたかりし事共也」
（絵二十六墨書）大かくしの／てい前と同」
此間遠く／かくへし」山」たかをのてい／心得てかくへし」
（絵二十七詞墨書）言葉之初會廿七」さる程に北条四郎六代／御前くしたてまてくたり／けるに鎌倉殿乃御使かゝミ／の宿にて行あふたり」言葉之末」誰にもよもしらせしなれ共／くして京へそのほりける」
（絵二十七墨書）北条平六時貞」家／のて／い」ほうし」人あまた」此間うすゝミにて遠く」かさ原十郎」うへ原九ろ」くわ原二ろ」はつとり／平六」所ハ／天王／寺」家／の躰」人あまた／卅きハかりと／あり」此間かすミにて遠く」地取何も／心得てかくへし」十郎／蔵人」此間かすミにて遠く」此まへの／人と同」
（絵二十八詞墨書）言葉之初會廿八」蔵人ハ熊野のかたへおち／けるか只一人ついたりける／侍あしをやミけれハ」言葉之末」ひたち坊太刀なけさせ／給へと申せハ蔵人大にわらわれけり」
（絵二十八墨書）ひたち房正明」所モ／いつミの國／やきの里と／言所也」此間遠く」
とし五十ハかり／かちんのひたゝれ／折ゑ



へは見めか／たちいよ〳〵うつくしくあたりもて／りかゝやくはかり也」言葉之末」亡者にいとま申つゝなく〳〵／都へのほられけり」

（絵三十三墨書）斎藤五か」六代御とし十六」文治五年／春の時分也」かミを／かたのまわりに／はさミおろしたまふ／躰」斎藤六か」高尾の躰也」かすミにて／遠く」六代斎藤五斎藤六／一人おいを／おふへし」さうしよく〳〵ミ候へし」山／高野の／ていにて／有へし」かすミにて／遠く」熊野／はま宮／のてい／心得て／かく／へし」いさこに物かき／給ふてい也」そう／一人／あり／さうしを／よく〳〵／見へし」うミ」

（絵三十四詞墨書）言葉之初會卅四」小松殿御子丹後侍従忠／房は八嶋乃いくさより／落て行ゑもしらすおわせ／しか」言葉之末」熊野法師かすをつくいて／うたれにけり」

（絵三十四墨書）馬武者と有へし」法師武者と／有へし」けんし」し人／あまた」紀伊國／ゆあさの／城躰」平家」山／木とも／有へし」地取心得て／かくへし」

（絵三十五詞墨書）言葉之初會卅五」熊野別當鎌倉殿へ飛脚をたてまて」言葉之末」人をのほせて勢多の橋のへんにて切てけり」

（絵三十五墨書）せたのはしのてい」人あまた」丹後侍従」

（絵三十六詞墨書）言葉之初會卅六」小松殿の君達六人／乃外に土佐守宗実／とておはしけり」言葉之末」いかにもかなふましき／道なれはとておもひ／きられけるこそおそ／ろしけれ」

（絵三十六墨書）さか」あしから山の躰」せきもと、／いふ所」くさや」大ふつの／ひじり」とさのかミ／とし十六」何も／出家」

（絵三十七詞墨書）言葉之初會卅七」さる程に建久元年／十一月七日鎌倉殿上洛して同／九日正二位大納言になり給ふ」言葉之末」其夜をかきり一乗案誦の御聲／は其暁におわりぬ」

（絵三十七墨書）庭躰／心得て」やたい／けつ／こう／に」法王／ほうきょ／おとし／六十六」けんきう／三年／三月十三日」返人／あまた／おゝく／色ゝかく／へし」

（絵三十八詞墨書）言葉之初會卅八」同六年三月十三日大仏／供養有へしとて二月／中に鎌倉殿又上洛／あり」言葉之末」都へいらせ給ひて六条河／原にてきられにけり」

（絵三十八墨書）人あまた」梶原」平家のさふらい／さつまのなか／つかさいへすけと／言物也」ひけをはそりてかミハ／そらぬおとこ也」人あまた」よりとも」木とも／心得て／かく／へし」かわら」しゆと／ニて」

（絵三十九詞墨書）言葉之初會卅九」平家の子息ハ去る文治元／年乃冬の比ひとつこ二つ／子をのこさす」言葉之末」馬人おほくいころされて／面を向ふへきやうもなし」

（絵三十九墨書）時ハけんきう七年／十月七日の事也」よせて／けんし／（欠）藤兵へもと／清かこに新兵へ／もとつなと言者也」

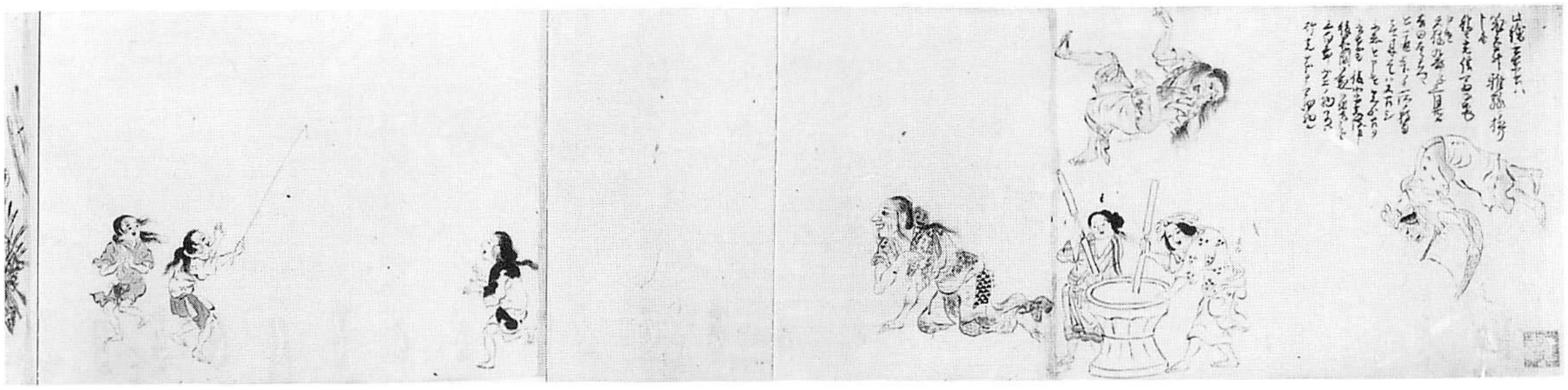
（絵四十詞墨書）言葉之初會卅九」平家の人数百四／五十あり」ほり」さかもき」ほり」城の中にも／卅人ハかり有四方ニ竹ヲ／こへたるてい竹の中／よりゆミいる躰也かたぬきてぐそくきぬ者も有るへし」

（絵四十墨書）言葉之初會卅七」平家新中納言の／すへのこにいかの大夫と／もたたと言人城の中にあり所ハほうしや／の一橋といふ所也」

（絵四十詞墨書）言葉之初會四十」さるほとに一のはしにいちよくの者ありときゝてつたへ」言葉之末」頸ともとて太刀長刀のさきにつらぬき二位入道殿へ／はせまいる」

（絵四十墨書）けんし」人あまた／一二千人とあり」やくるてい／城ノ躰まへと同心也」
（絵四十一詞墨書）言葉之初會四十一」一条の大路へ車やりいたして／頸ともしつけんせらる」言葉之末」伊賀大夫の頸とも人してけれ」
（絵四十一墨書）くび」人あまた」くび」此間すこし／遠く」いかの大夫の／はゝ」やたい／心得て／かくへし」
（絵四十二詞墨書）言葉之初會四十二」平家の侍えつちうの二ろ兵衛／もりつくハ但馬國へ落行て」言葉之末」世のあやうきことをかなしんて／こゝろある人々ハ歎あへり」
（絵四十二墨書）平家さふらい／ゑつちうの／二ろ兵へ／もりつく／ふろ／にて／からめ／取てい」人廿卅　人ハかりとことかきに有」但馬の國にての事也」此間／とをく」くわんとうのてい」もりつく」よりとも」此あいた／とをく」うミ」ゆいのはまのてい」もりつく／しやうい所也」人あまた」
（絵四十三詞墨書）言葉之初會四十三」ここにもんかくもとより／おそろしきひしりにて」言葉之末」もんかくかはうれいあれて／つねハ御物かたり／申けるとそ／聞えし」
（絵四十三墨書）人あまた」もんかく／おきの國へなかされ給ふてい／とし八十あまり」
（絵四十四詞墨書）言葉之初會四十四」さる程に六代御前ハ三位の／せんしとてたかをにおこなひ／すましてをわしけるを」言葉之末」平家の子孫ハなかくたえにけり」
（絵四十四墨書）六代／とし卅／そうにすかた也」するかの國のちう人／おかへのこんのかミやすつなに／仰てきらせられ候也」
（絵四十五詞墨書）言葉之初會四十五」平家かんちゃうのまき」けん礼門院ハひかし山乃ふもと／吉田のへんなる所にそ言のせ／給ひける」言葉之末」涙東山一庭の月におつかなし／ともいふはかりなし」
（絵四十五墨書）すミあれたる／ばうの躰」けんれい／もんゐん」しのふ」しのふ」くず」まつ」庭に／くさふかき／ていにて／くし」月」岩」岩」いけ」
（絵四十六詞墨書）言葉之初會四十六」かくて女院ハ文治元年／五月一日御くしおろさせ／給けり」言葉之末」ちやうらくしの仏前に／かけられけるとそき／こえし」
（絵四十六墨書）やたい／あれたる躰」時ハ五月一日」せんてい／御ひたゝれ」長らくし／のあせう／ばうの／上人印／せいと言／人なり」女院御ぐしおろさせ／給いたる所」吉田之躰／前と同」
（絵四十七詞墨書）言葉之初繪四十七」女院ハ十五にて女御の宣旨を／くたされ十六にてこうひ乃くらゐに／そなわり」言葉之末」女院の御うた」時鳥花たちはな乃香をとめて／なくハむかしの人やこひしき」七世の孫にあひけんもかくやと覚て／あわれなり」
（絵四十七墨書）女院御とし廿九」吉田／の躰」御すゝりの／ふたに哥／あそはし候てい」たち花」時鳥」雨少／ふりける／てい／さうしをよく〳〵／見候へし」
（絵四十八詞墨書）言葉之初會四十八」さる程に七月九日の／大地しんについちもく／れあれたる御所もかた／ふきやふれて」言葉之末」御こしなとはたかふさ／乃卿の北方御沙汰／ありけるとかや」
（絵四十八墨書）女院よした／の躰／やたい

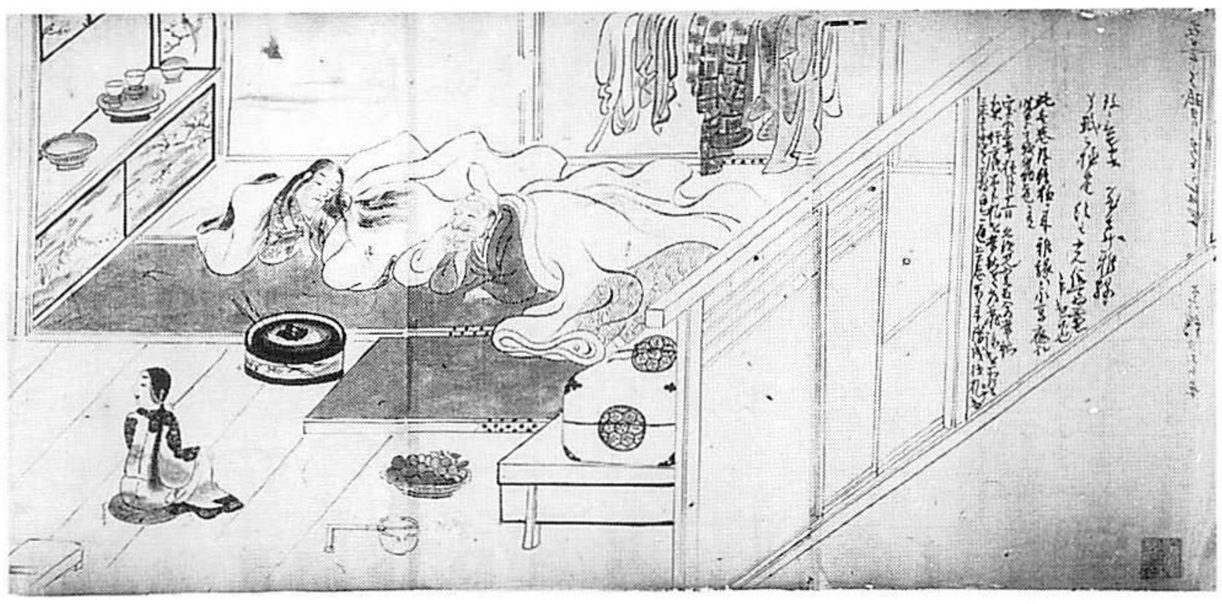
まへと同心にかくへし」
(絵四十九詞墨書)言葉之初會四十九」文治元年長月の／するに彼しやつ光院へ／いらせ給ふ」言葉之末」大納言すけ殿哥」岩ねふみたれかはとわんならのはの／そよくハ鹿乃わたるなりけり」
(絵四十九墨書)月」月なくても／くるしからす／さうしよく〳〵／見へし」夜のてい／心得て／かくへし」大納言すけ／さうしにハ／あまとハなしよく〳〵／さうしミへし」女院」たゝミ」
(絵五十詞墨書)言葉之初會五十」女院あはれにおほしめし／窓乃こしやうしに此哥をあそ／はしとゝめさせ給ひけり」言葉之末」西乃山の本に一宇の御堂有／すなはちしやつ光院是也」
(絵五十墨書)御こし」法皇大原／御かうのてい／御供にハとく大寺／花山院土御門／く卿六人ほく／めん殿上人／何も人あまた」此間／遠く」山ふかきてい」時ハ／卯月／廿日あまりの／事也」かけひ」しやつ／光院」
(絵五十一詞墨書)言葉之初會五十一」ふるふつくりなせる／前水木たちよしあるさまの／所なり」言葉之末」法王の御哥」池水に汀の桜散敷て／波の花こそさかり成けり」女院の御哥」おもひきや深山乃おくにすまゐして／雲井の月をよそに見んとハ」
(絵五十一墨書)さうし／よく見て／かく／へし」月」さうしヲ／ミて月かく／へし」時鳥」中嶋／まつに藤」何も／かやの草」志き」やり／水」やまふき」きしに／さけるてい」さるとも／木つたふ／てい」しのふましりの／わすれ草も／有へし」まかきにちくさの／露おもき／ていも有へし」山ふかいてい也」いまたおゝく」おい／おと／ろへたる／あま／きる物も／さてのてい也」こせうな／こん入道／しんせいか／むすめ／阿波の／ないしと／いふ人也」のきに／つた朝かほ／はいかゝりたる／躰有へし」
(絵五十二詞墨書)言葉之初會五十二」さてかたはらを御らんすれハ／御しんしよとおほしくて竹の／御さほにあさの御衣かミの御／ふすまなとをかけられたり」言葉之末」いまのやうにおほえて皆袖／をそしほられける」
(絵五十二墨書)かけひ」地取まへと同」あらこも」法王」ふすま」
(絵五十三詞墨書)言葉之初會五十三」さるほとに上山よりこき／すミそめのころもきたる尼」言葉之末」女院御庵室にいらせ拾ふ」
(絵五十三墨書)つま木にわらひもちたるハとりかいの／ちうなこんこれさねのむすめ／五てう大納言くにつなの卿のやうし／せんていの御めのと大納言のすけ」花かたミひちにかけいはつゝし／とりくしてもたせ給ふハ女院」ないしのあま」まへと同心にて／(欠)てかくへし」こも」
(絵五十四詞墨書)言葉之初會五十四」一念の窓乃まへにハせつ／しゆ乃くわうミやうをこし」言葉之末」女房達も皆袖をそぬらし／ける」
(絵五十四墨書)まへのてい也／心得てかくへし」法王」女院」
(絵五十五詞墨書)言葉之初繪五十五」さるほとにしやつくわう院のかねのこゑけふも暮ぬとうち／しられ」言葉之末」女院の御うた」此比ハいつならひてか我心大宮人乃こひしかるらん」いにしへも夢になりにし事なれハしはのあミ戸もひさしから／し」な」とく大し殿うた」いにしへハ月にたとへし君なれや其光なき深山への里」女院」いささらハ涙くらへん時鳥われもうき世に音をのミそ／なく」平家物語巻第十二」
(絵五十五墨書)しうん／花ふるてい」やたい／まへと同心／すこしもちかふへからす」女院／かくれさせ／給ふてい」仏の御手二／五しきの／いとヲ／かけられたり／けるを女院の／御手にひかへ／させ給ふてい也」御こし／にて／有へし」法王／くわん／きよのてい／かすミにて／へたてやたい／よりもひき／のけ心へて／かくへし」
時ハけんきう二年二月ちうしゆん也」
(尾紙墨書)此絵巻下絵は土佐光輝氏が画業を廃して／移転に際して襲蔵品を売却したるを／一括し購入したるもの一也」昭和二十六年五月下浣／佳識」



11福富草紙　（二六八―一）
紙本墨画淡彩　一巻　二四二×二〇三
元禄九年（一六九六）
（第一紙右下朱文方印）先祖守／土佐後人／世号家」
六紙継

（第一紙墨書）此繪言葉書ハ／飛鳥井雅縁ニ極り／申畫／繪モ光信可為正筆／申遣／元禄九年子三月廿日／吉田太郎右衛門／後人／一返上下ノモ一所持連／とて来是又古シ／不知と申遣先より古ク／言葉モ後崇光院と申／後花園御観御筆墨／三百年少上ノ物若ハ／行光ナド申可極物也」

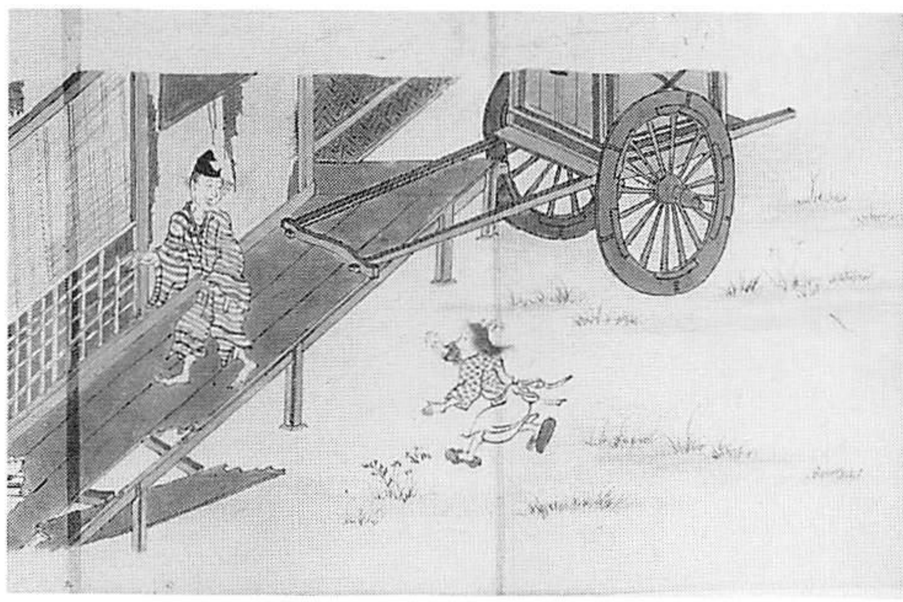
［画中墨書］
（第一紙右女）ワウト」白」
（第一紙上女）ワウトグ」
（第一紙下女）文白」白」くろ」白」白」白」白」クロ」白」白」白」白」
（第二紙右女）アサキグ」コン」キヂ」白」



12福富草紙　（二六八―二）
紙本墨画淡彩　一巻　三四〇×七〇九
宝永三年（一七〇三）
（第一紙右下朱文方印）先祖守／土佐後人／世号家」
三紙継

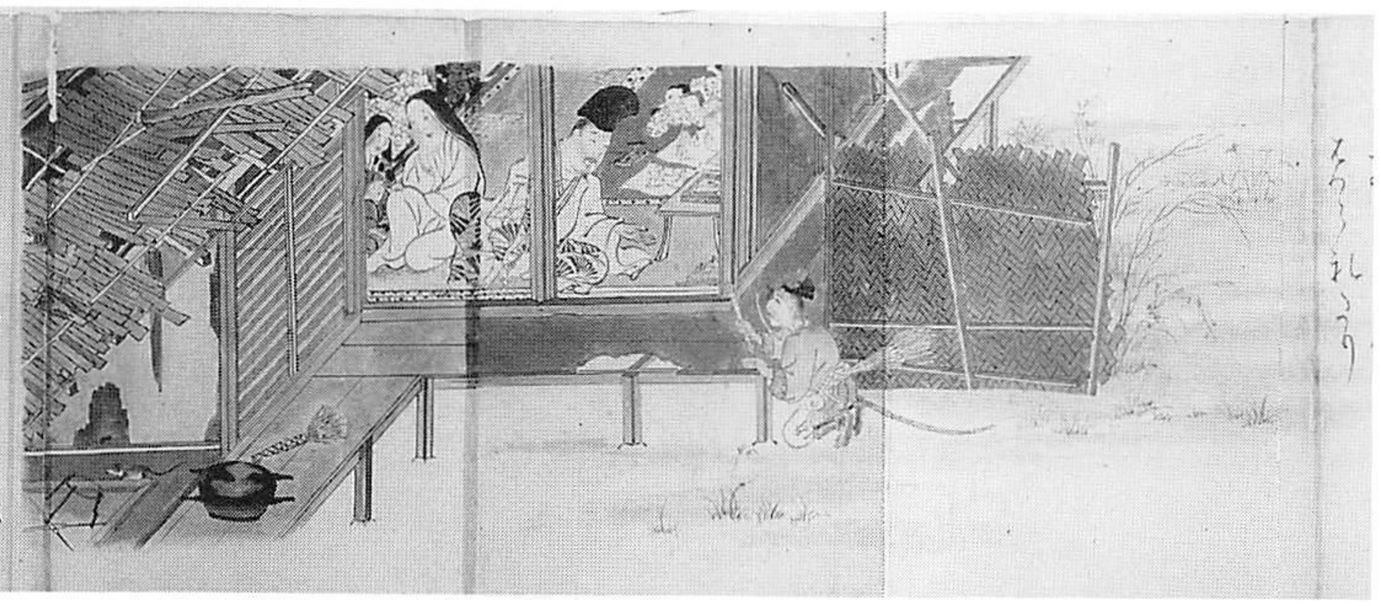
（第一紙右裏墨書）古筆了珉ヨリ見せラレ候写」是ハ繪ヨホト吉」
（第一紙右墨書）後に言葉書　飛鳥井雅縁ニ／了珉被極筆絵モ光信可為正筆と申遣候也」此壱巻後ニ絵極ニ来雅縁ハ永享應永／時分ト了珉付状上也ニ有」宝永三年極月十一日久須見右三殿入道常祐／取次　行廣筆ト札遣常祐老へ常ノ書状添遣所望ニテ／三木玄忠老所持ノ由今一通上下巻一所ニ来隆成極札遣」

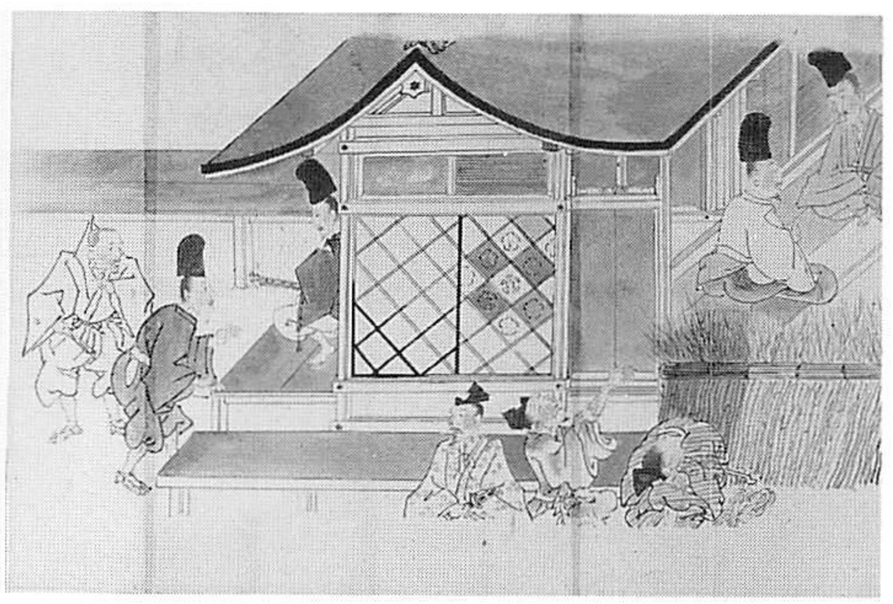
［画中色指示］
（男）おウト」白」
（女）銀てい」
（娘）是ハ六せウ」



繪師草紙

壱巻





10絵師草紙　（二六五―一）

紙本淡彩　一巻　三七五×七七四七）

（第一紙白文方印）光武／之印」

（第二紙白文方印）光武／之印」

三一紙継

［本文別録］

（第一紙右裏墨書）繪師草紙／壱巻」光武蔵」

（第二紙右上墨書）一」

（第五紙右上墨書）二」

（第七紙右下墨書）二」

（第十二紙右上墨書）三」

（第十四紙右上墨書）四」

（第十八紙右上墨書）二」

（第二十六紙右上墨書）六」

（第二十六紙右下墨書）四」

［画中色指示］

（第七紙右上女）白」

（第七紙下子供）白」地白」

（第八紙下男）地ヲウト／ク」白」

（第九紙右男）白」

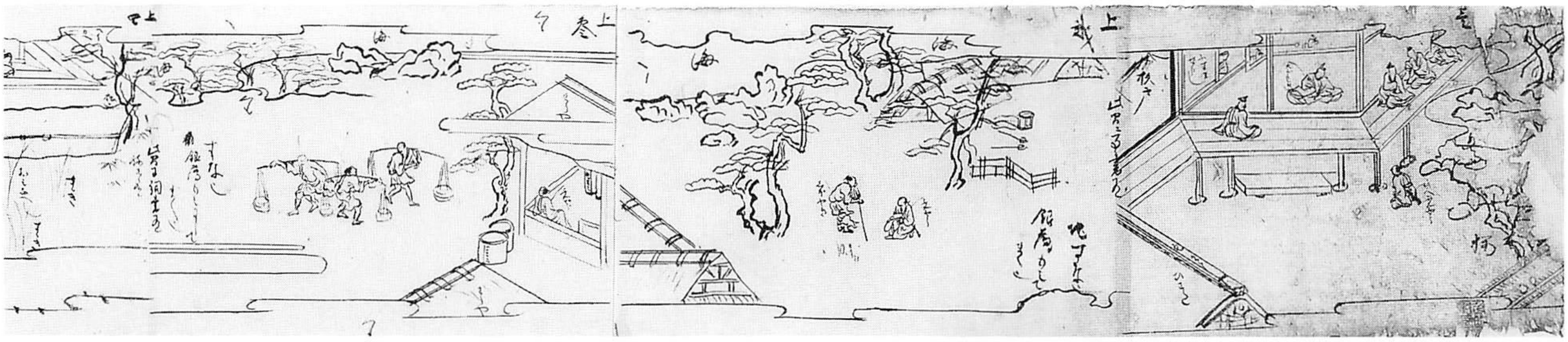
（第九紙上壁）ヲトク」

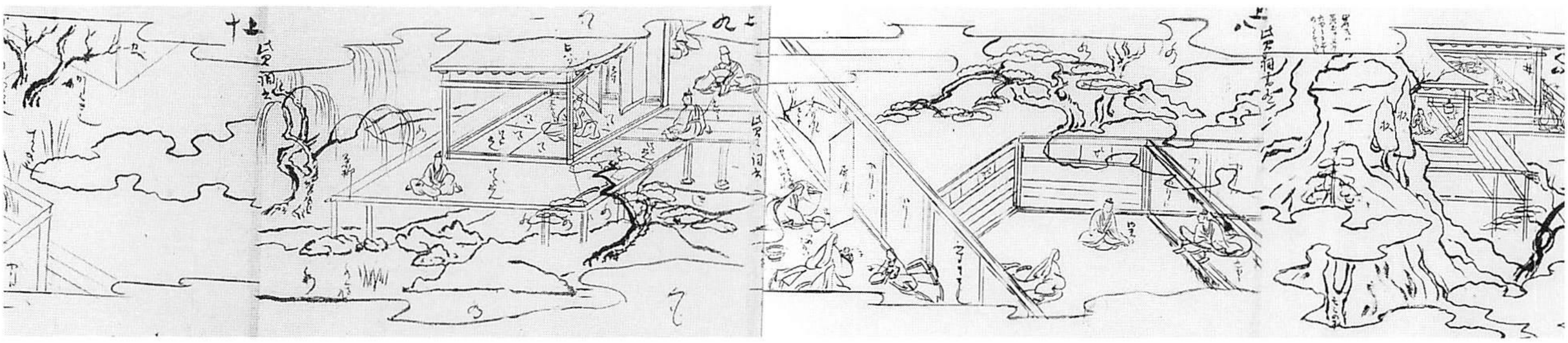
（第九紙上女）白」

（第九紙器物）白」白」

（第十紙下子供）白」

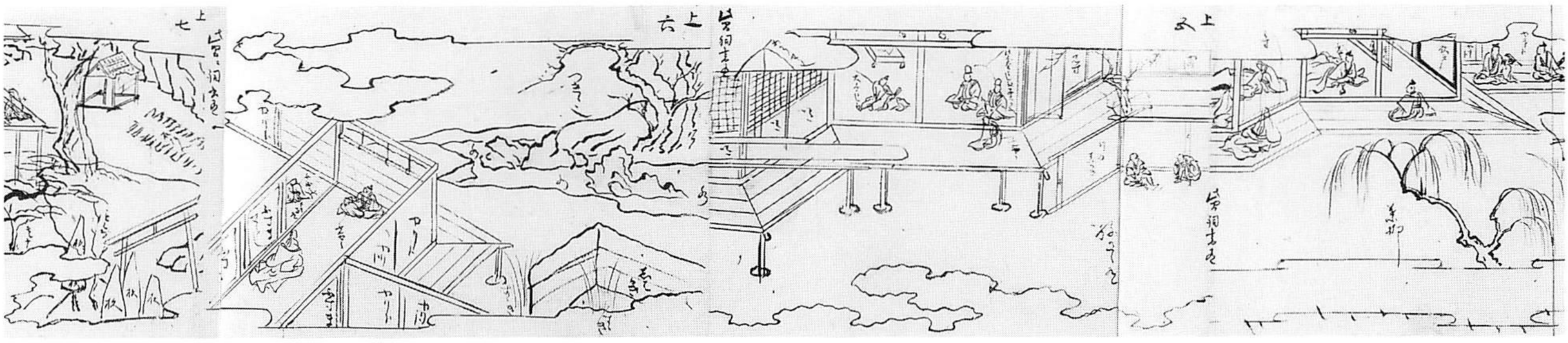
（第二十八紙右男）白」

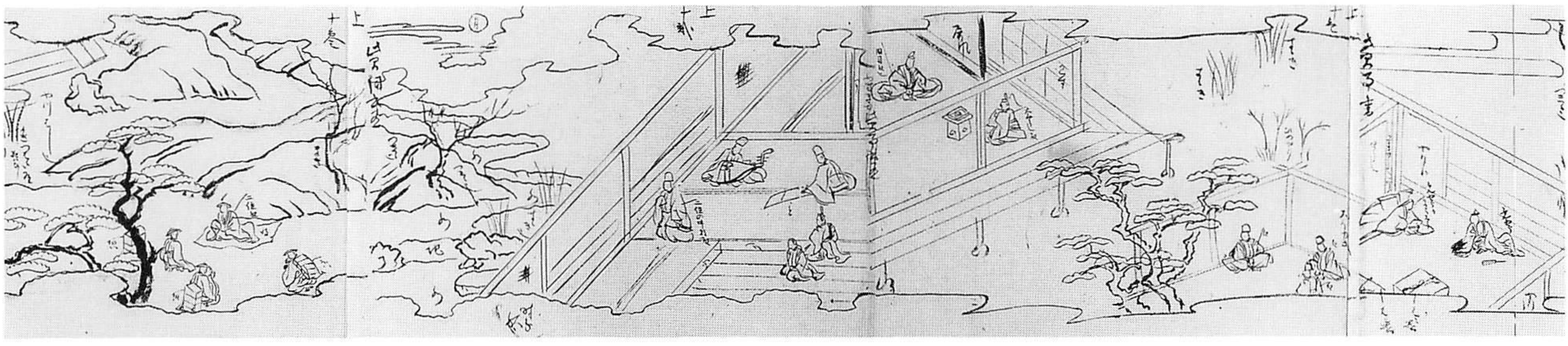




13文正草子絵巻　（別九）
紙本墨画　一巻　二六三×一〇九一七
寛永十四年（一六三七）
土佐光起
（第一紙右下朱文方印）欣魚／洞藏」
（尾紙朱文方印）珠／庵」珠／庵」
二八紙継

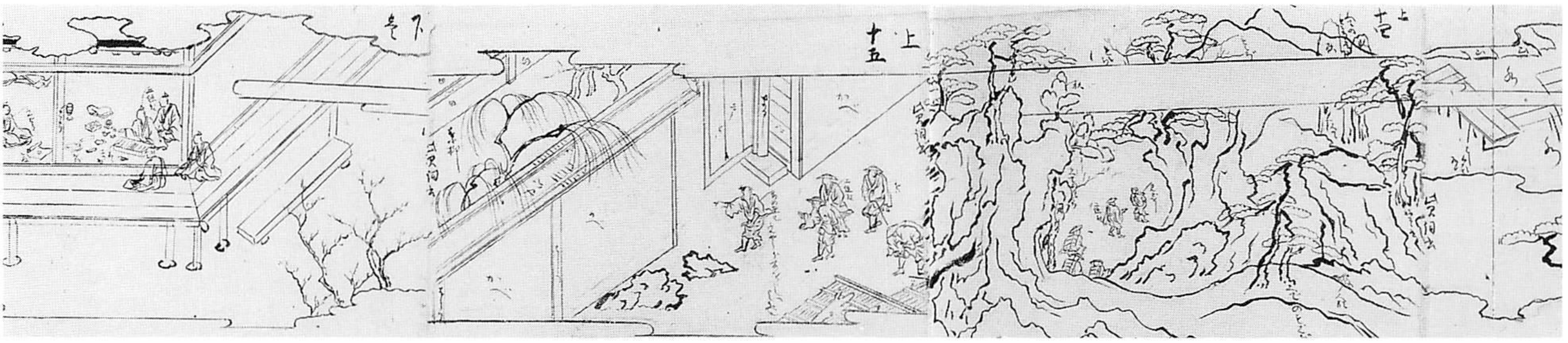
（第一紙墨書）壱」桜」此人ふんせう」屏風」屏風」大ぐうし殿也」ふすま／せうし」杉戸」瓦」かわら」ひわた」此間ニ事書有」
（第二紙墨書）上」貳」地すなこ／銀薄もミて／まく也」海」ふんせう」しほやき」海」
（第三紙墨書）上」参」くも」わらや」ふんせう」うミ」海」わらや」くも」くも」海」すな也」銀薄もミにして／まく也」此間に詞書有」
（第四紙墨書）上」四」へイ／カベ」松」ねさゝ有」すゝき」おみなへし」すゝき」ヤリト」ヤリ／ト」杉戸」屏風」屏風」ふんせう」葉柳」ミす」此間詞書有」
（第五紙墨書）上」五」ヤリ／ト」ヤリ／ト」木」モミチ」竹のすいかき」木」ねさゝ有」みす」此人大くうし殿子供か」ふんせう」ごはん」大くうし殿」あかりせうし」いた」いた」此間詞書有」
（第六紙墨書）上」六」つきゝ也」水」水」水」しは／かき」すゝき」すゝき」ヤリト」ヤリ／ト」ヤリト」ヤリト」ふすま」ふんせう」女涙ノ処」カサ／ね有」ふすま／せうし」ふすま」此間ニ詞書有」
（第七紙墨書）上」七」石たん」杉」杉」もミぢ」杉」杉」モミチ」女」女」女」ふんせう」女」かなとふ／ろ」供か」杉」杉」モミの木」岩共ハ／黄土ヲヌリ／六せうコンせう／のかすり也」此間詞書有」
（第八紙墨書）上」八」水」水」水」ヤリト」ヤリト」ミす」ふんせう」門者か」みす」ふすませうし」ヤリト」ヤリト」屏風」屏風」モミチ」子」子」つのたらい」はち」ふんせうかにうはう／子ヲウムタル処」此間に詞書」
（第九紙墨書）上」九」ふんせう」くも」ヒハダ」みす」いた」大くうし殿」いた」いた」けたゑん」けたゑん」けたゑん」けたゑん」きし」水」水」水」くも」水」水」葉柳」水くさ有」水」此間詞書」
（第十紙墨書）上」十」カベ」かしはき也」つきゝ也」すゝき也」ヤリト」ヤリト」ふんせう」ふんせう」うミ」海」わらや」くも」くも」海」すませうしへり」せうし」はこ墨」はこ墨」此間事書」
（第十一紙墨書）上」十壱」すゝき」すゝき」ひめゆり」スイカキ」白」白」白」みす」大くうし殿」屏風」國司殿也」此間事書有」
（第十二紙墨書）ふすませうし」こと」二位中将殿」上」十貳」時分／秋也」水」すゝき」水」つきゝ也」水」地」水」つきゝ也」月」此間詞書有」
（第十三紙墨書）上」十参」まき」二位殿」幅」おい」おい」おい」やつはし」かきつはた有／花なし」山」山」水」はしくひ／木」モミチ」竹のすいかき」木」ねさゝ有」此間詞書」
（第十四紙墨書）上」十四」杉」かへてのもミち有」杉」かへて」ねさゝ有」人形」かへでのもみぢ」もミぢ」もミち」杉」みどをし」二位殿」かへてのもミち」此間詞書」
（第十五紙墨書）上」十五」ヲい」つゑ」せう」女」かなとふ／ろ」供か」杉」杉」モミの木」岩共ハ／黄土ヲヌリ／六せうコンせう／のかすり也」此間詞書有」

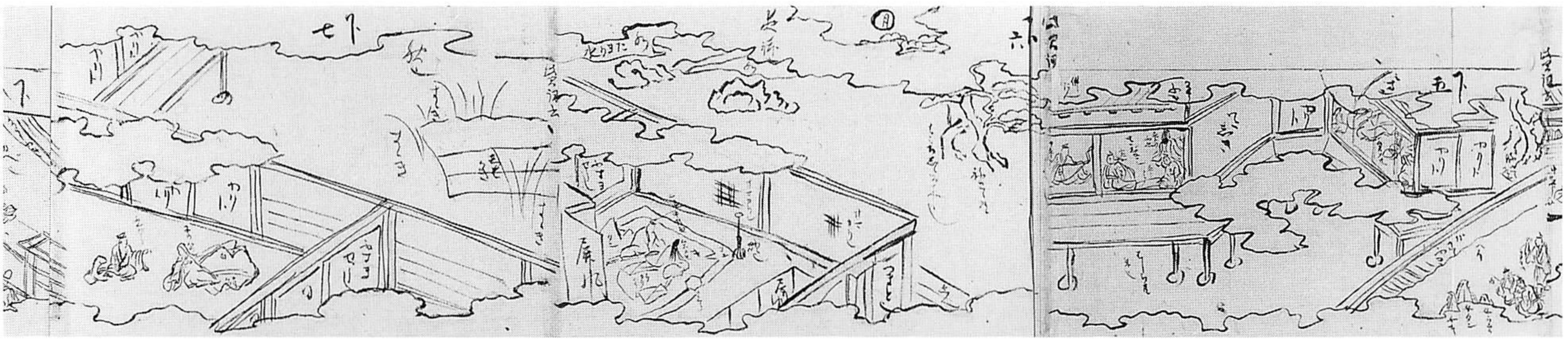


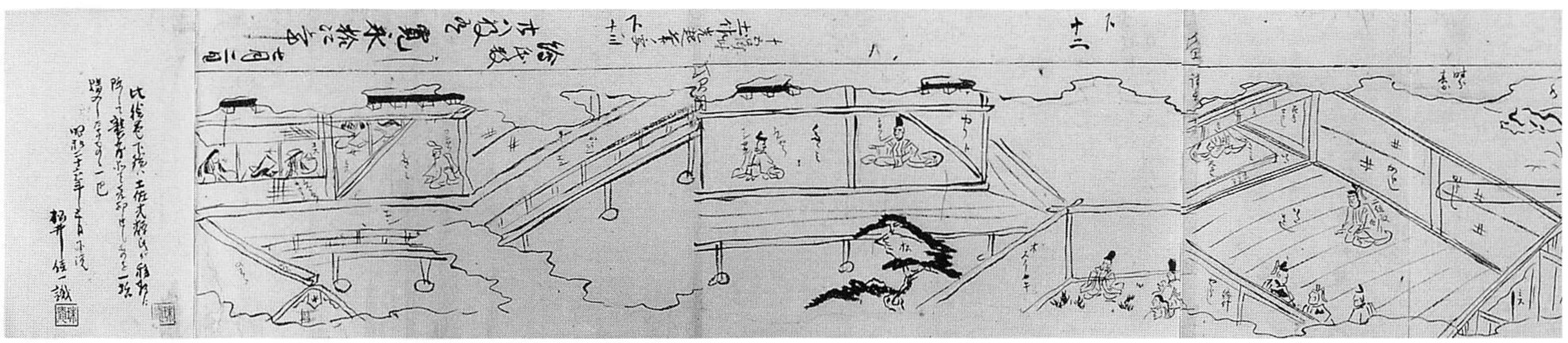


ハシラ」葉柳」此間詞書」
(第十六紙墨書)下」壱」二位殿」色、／まき物」硯箱」おび」カウロウ」きぬ」ふんせう」カサね有」カサね有」ヤリト」此間詞書」
(第十七紙墨書)下」貳」ヤリト」くも」ヤリト」ふんせうか／内者共」ふすま／せうし」二位殿」皆取おろして／くう所也」此間詞書」
(第十八紙墨書)下」参」時分秋」木ノスイ／カキ」すゝき」おミなへし」すゝき」ヤリ／ト」ヤリ／ト」ヤリ／ト」ヤリ／ト」イモウト」屏風」ふんせうか／ムスメ」アネ」イモウト」カミ」硯箱也」此間詞書」
(第十九紙墨書)下」四」スイカキ」ねさゝ有」まるし」しゃう／こと」ふゑ」しやうのふゑ」まるし」佛たん／此間／いたしき」白」びわ」白」此間／いたじぎ」中しやう丹」かわら／ふき」此間詞書」
(第二十紙墨書)下」五」ヤリト」ヤリト」ミす也」ムスメ共」ヤリト」ねさゝ有」へイ」かわら／ふき」いたじき」かわら／ふき」佛たん」しやうのふゑ」しやうノこと」いたじき也」ふゑ」中しやう」此間詞(欠)」
(第二十一紙墨書)下」六」ねさゝ有」もミちしたる木也」月」夜の躰」水」水」たまり水」ゑん」つまと也」サマかうし」屏風」サマカウシ」燈也」二位中将殿」ムスメ也」まくら」屏風」ふすま／せうし」此間詞書」
(第二十二紙墨書)すゝき」しは／かき」秋也」すゝき」すゝき」下」七」ふすま／せうし」同」同」ヤリト」ヤリト」ヤリト」ヤリト」ねウハウ」ふんせう」
(第二十三紙墨書)下」八」かわらふき」カべ也」ふんせう」大くうし殿」ねさゝ有」ねさゝ有」かわら／ふき」こと」ひわ」佛」白」白」

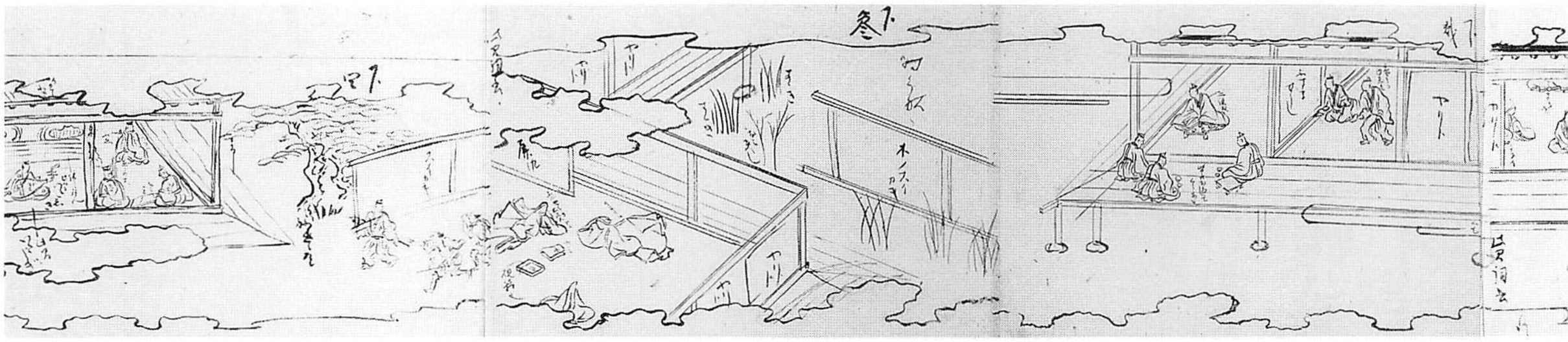
［画中色指示］
(第四紙屋台)白」
(第五紙屋台)白」白」
(第十五紙屋台)白」白」白」
(第十六紙反物)白」
(第十八紙紙)白」
(第十九紙右人物)アサキ」ワウト」キ」キ」
(第十九紙左人物)ウムラ」ハウハ」モヘキ」

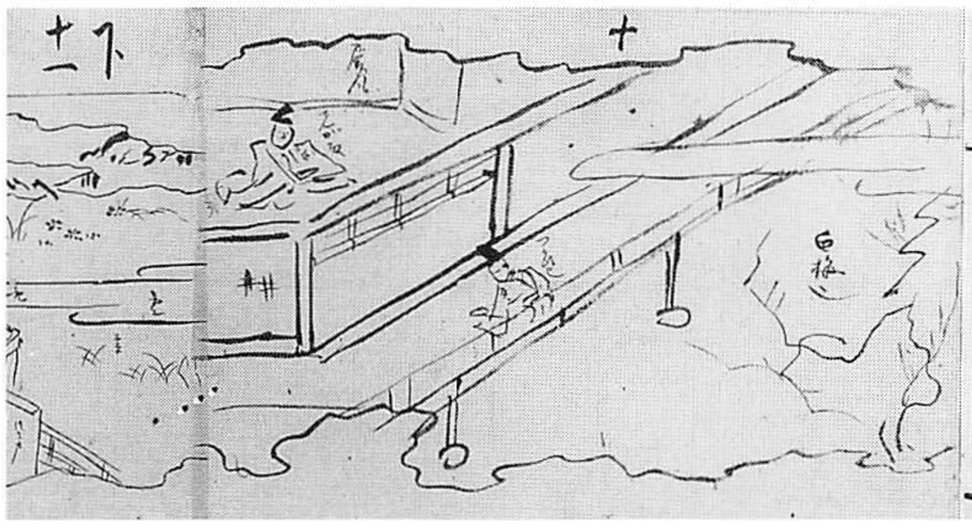


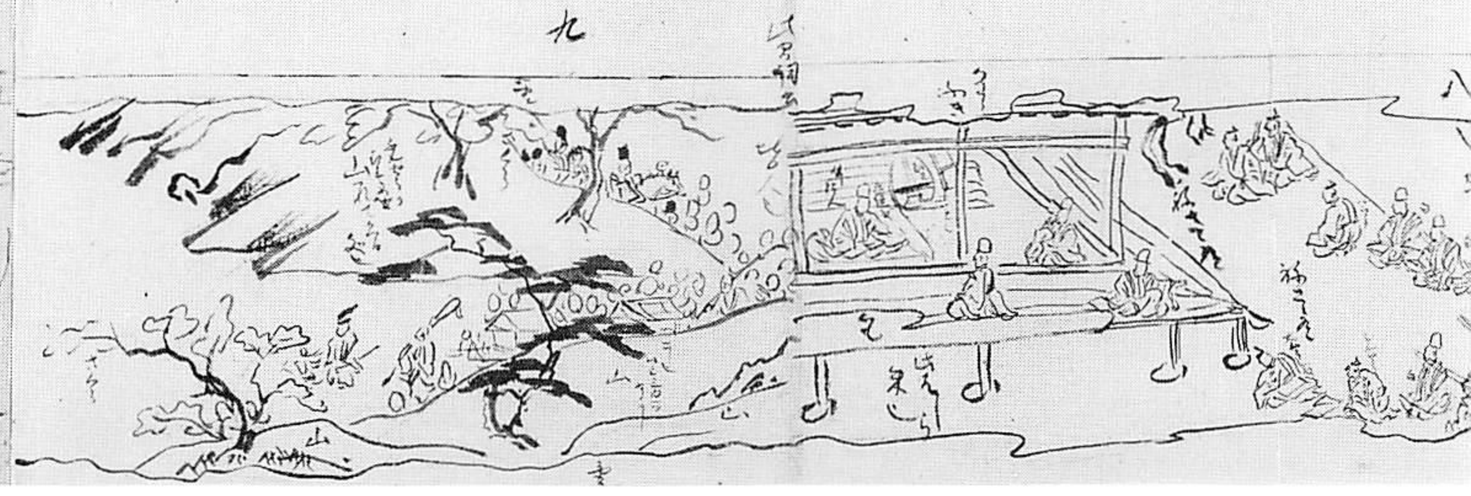


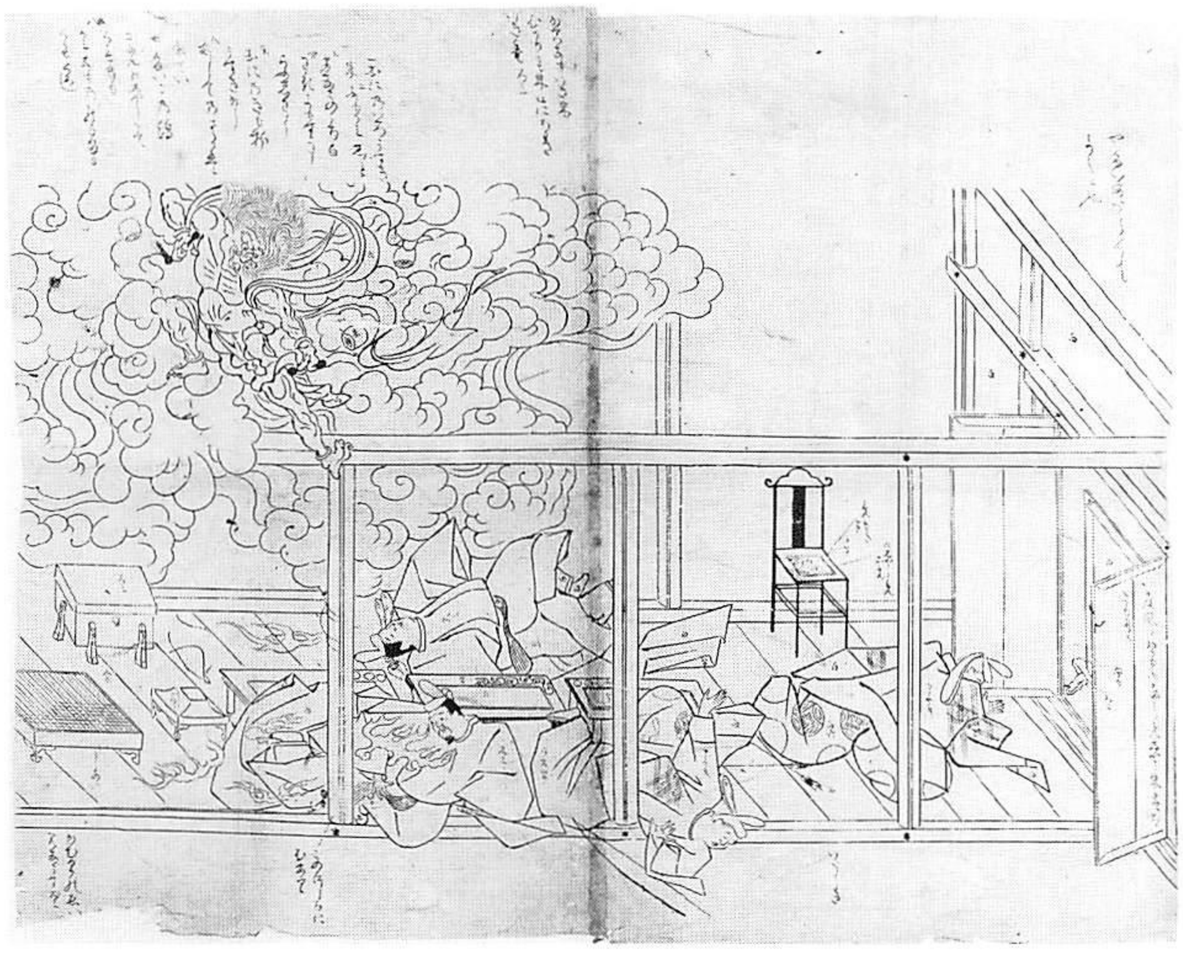


（第十九紙柱）朱」
（第二十紙右下人物）ウアサキ」ハウハ」白」
女ウムラ」女タン」女キ」
（第二十紙左人物）ハウハ」タン」
（第二十紙左屋台）はしら共／朱也」
（第二十一紙夜具）コン」ウカウハイ」タン」
（第二十二紙人物）コン」白」カサね／ムラ」
ウアサキ」
（第二十三紙右人物）白」白」白」白」ハウ
ト」シト」モヘキ」
（第二十三紙屋台）此はしら／朱なり」
（第二十五紙中人物）タン」
（第二十五紙左人物）白」ムラ」
（第二十六紙中人物）白」ムラ」
（第二十六紙左人物）山はと／色」朱」
（第二十七紙右下人物）コン」白」
（第二十七紙中人物）タン」アサ」


冬ノ


十一ノ
十ノ


九ノ

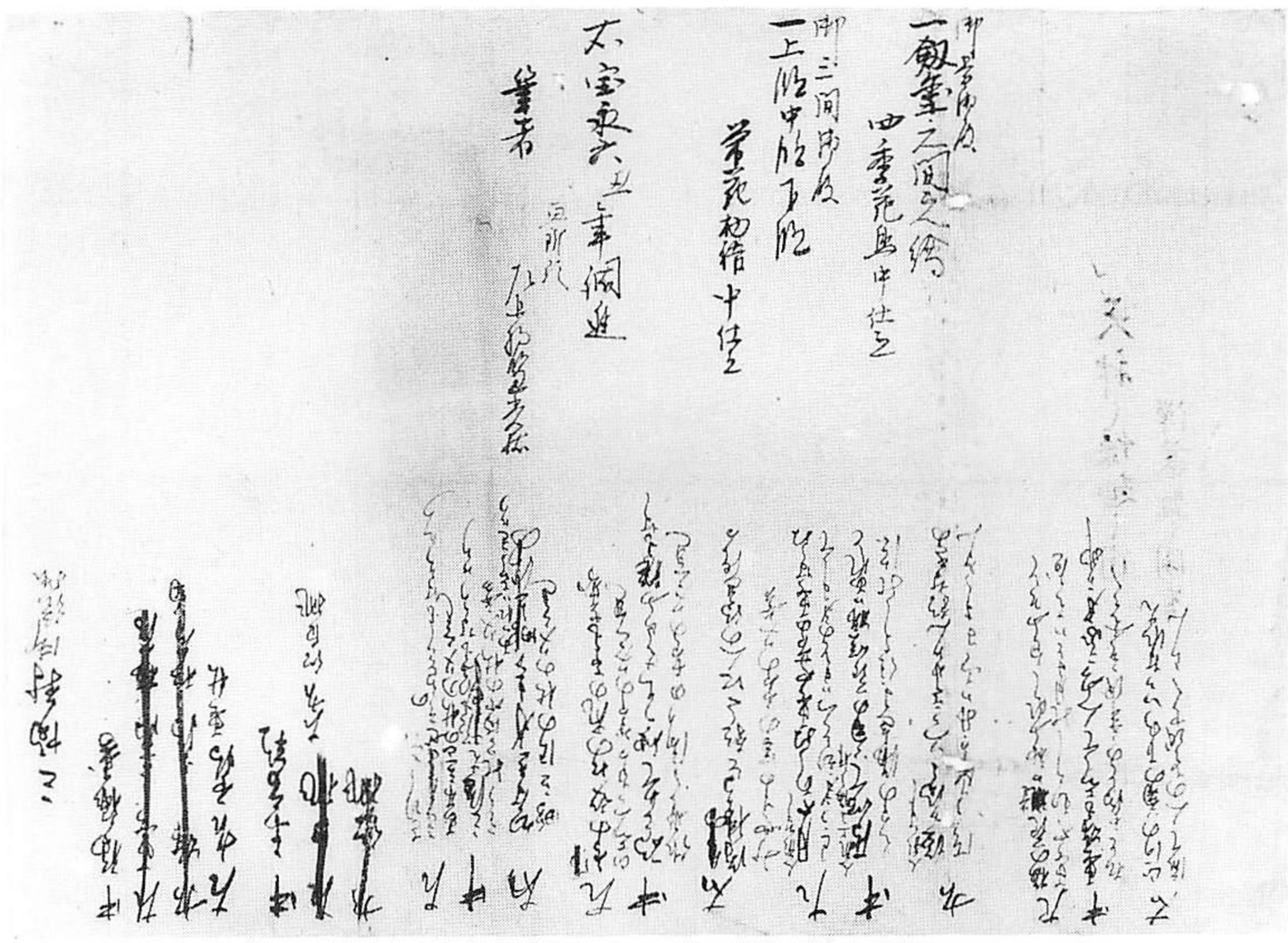


14北野天神縁起絵　（一九三―五）
紙本墨画　一枚　四〇〇×五一二

（右上墨書）やたいあたらしくて／かく候也」
（右下墨書）屏風ノへり六しやうこんしやう朱にてち／きりあり」いたしき」
（左上墨書）かみなりいき朱／むくりこと朱口に」いきはスミ」一　おに乃いろうすき／二／朱ふりつゝミしと／三　まなこのうち白／四　わきよりすこし／らふしわう／五　おに乃きり物／うすきかう／六　あして乃ささきは／金てい／七　たいこ乃繪／こふん六しやうにて／くもあり／八　かミなり乃のりたる／くもくろし」
（左下墨書）このはしらに／ひあり」かむりのゑい／みなうすスミ」

［画中色指示］
（右屋台）白」白」
（屏風）白」白」へり」スミ」
（椅子）もんもこき／ムラ」ウムラ」六しやうもん／こふん」
（人物）白」アサキ」白」白六」白」
（人物）白」アサキ」ウスムラ」
（人物）白」ムラ」白」白」コン」白」スミ」
（人物）スミ」朱」白」コン」白」白」ムラ」
（調度）六」ムラ」ムラ」六」わう／とのく」スミ」金」わうとのく」

(表)



(裏)

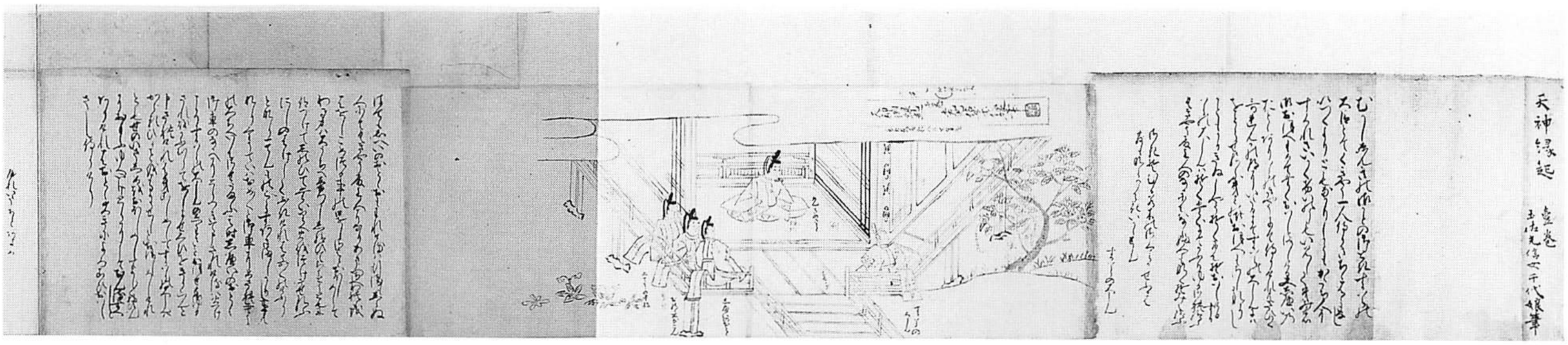
15北野天神縁起絵包紙　（一九三―一二）

紙本墨書　一枚　三三五×四六四

（表左墨書表書）天神之縁起之内」彈碁盤之圖有」

（裏墨書上段墨書）御常御殿／一劔璽之間之繪／四季花鳥中仕立」御三間御殿／一上段中段下段／栄花物語中仕立」右宝永六丑年調進／筆者／画所預左近将監光祐」

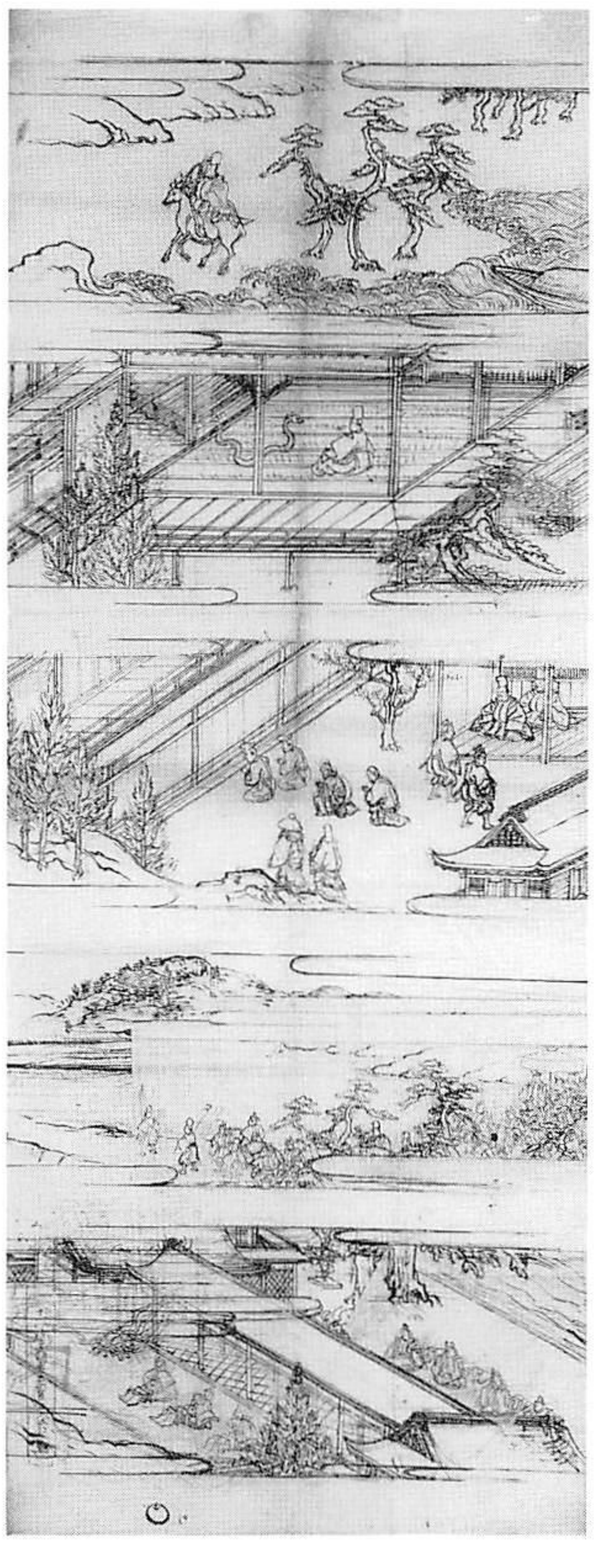
（裏墨書下段墨書）三幅對御絵繕」中福禄寿／左春　鶴〈ミセケチ〉　梅鶴／右秋　鶴〈ミセケチ〉　松鶴菊／左右鶴春秋」中東方朔／左白桃〈ミセケチ〉／左右紅白桃／右紅桃〈ミセケチ〉」左／さひしさハ／ミわたせそ〈ミセケチ〉の色としもなかりけり／まき立山の秋の夕くれ／中　ミ渡は／そノ色年〈ミセケチ〉／花も紅葉もなかりけり／うらのとまやの秋夕暮／右心なき身にも／鳴立沢の〈ミセケチ〉／あわれハしられけり／鳴立沢の秋の夕くれ」左／■〈不読〉／鳥の聲松の嵐の音もせす／山しつかなる雪の夕くれ／中　駒とめて袖うちはらふ陰もなく／佐野の渡りの雪の夕くれ／右／鳥の〈ミセケチ〉／降りそむる今朝たに人の待れつる／みやまの里の雪の夕暮」左／人形なし／月やあらぬ春や昔の春ならぬ／わか身ひとつハもとの身にして」中／人形上に梅の躰／雁鳴て菊の花咲秋ハあれと／はるの海邊に住よしの濱／右／人形なし／塩かまにいつかきにけん朝なきの／つりする舟はこゝによらなん」左／梅の花　誰〈スミケシ〉　〈た〉か袖ふれし匂ふそと／春やむかしの月にとハはや／中／春秋もしらて人ふる我身かな／松と鶴との年をかそむて／右／山河の菊の下水いかなれは／流て人の老をせくらん」



16天神縁起絵　一巻　三二三×二三二二　（二八〇）
紙本墨画淡彩
元禄十一年（一六九八）
七紙継、第六・七紙に継紙あり

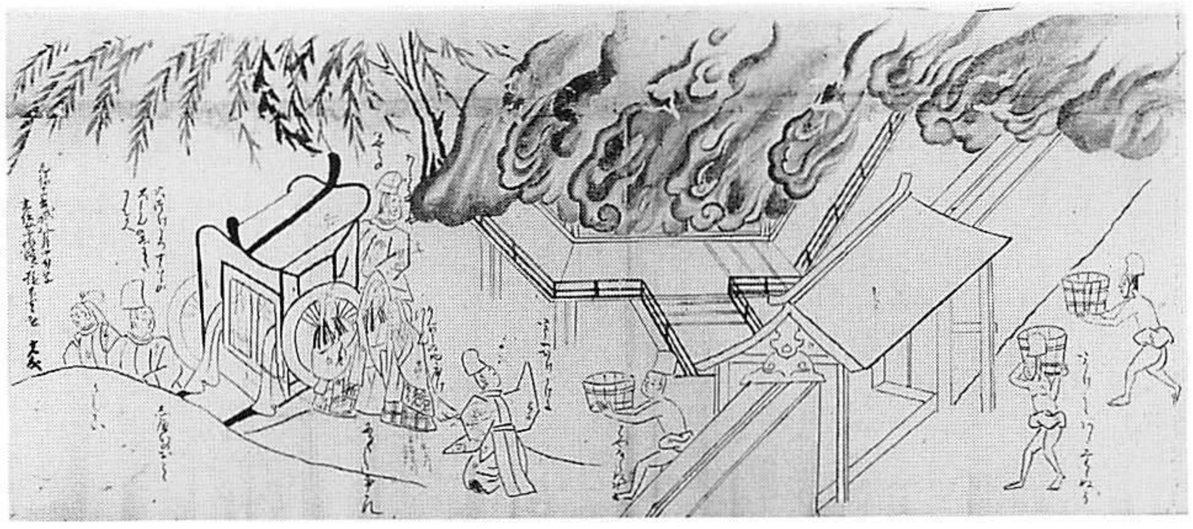
［本文別録］
（第一紙裏右墨書）天神縁起　壹巻／土佐光信女千代娘筆」
（第三紙墨書）戊寅八　押切帳ニカタワレ有」天神御縁起／壹巻／土佐光信女千代娘筆」（描印）土佐／光成」三宅新太郎殿頼八月廿七日遣」すかハらの／大しん」ゑんきの御かと」
（第四紙墨書）しへいのおとゝ」おのゝ大なこん」二てうの中将」
（第六紙墨書）やれいまちとあよめ」いそけともあしかたゝぬそ」
（第七紙墨書）はやならぬそ」いま一おけかけよ」あらあさましや」く卿との」なんほうの物かやけ／つらん」にか〳〵しき事かな」火つけてうすかハらの／大しんのしわさ／にして候へ」しへいのおとゝ」うしかい」元禄十一年戊寅八月中旬写／光信女千代娘ニ極廿七日遣　光成」

［画中色指示］
（第三紙花）ハナコフン／ヌリ付／内ハナ」
葉」朱サルカラ也」
（第三紙屋台）朱」クサ」朱」金」ちゃ色ノグ」
（第三紙上人物）白」朱／文銀」
（第三紙下人物）クロ」文スミク／チヨウ」
クロ上ニ同」
（第四紙右人物）青チャ」文」朱文銀か」藤処」



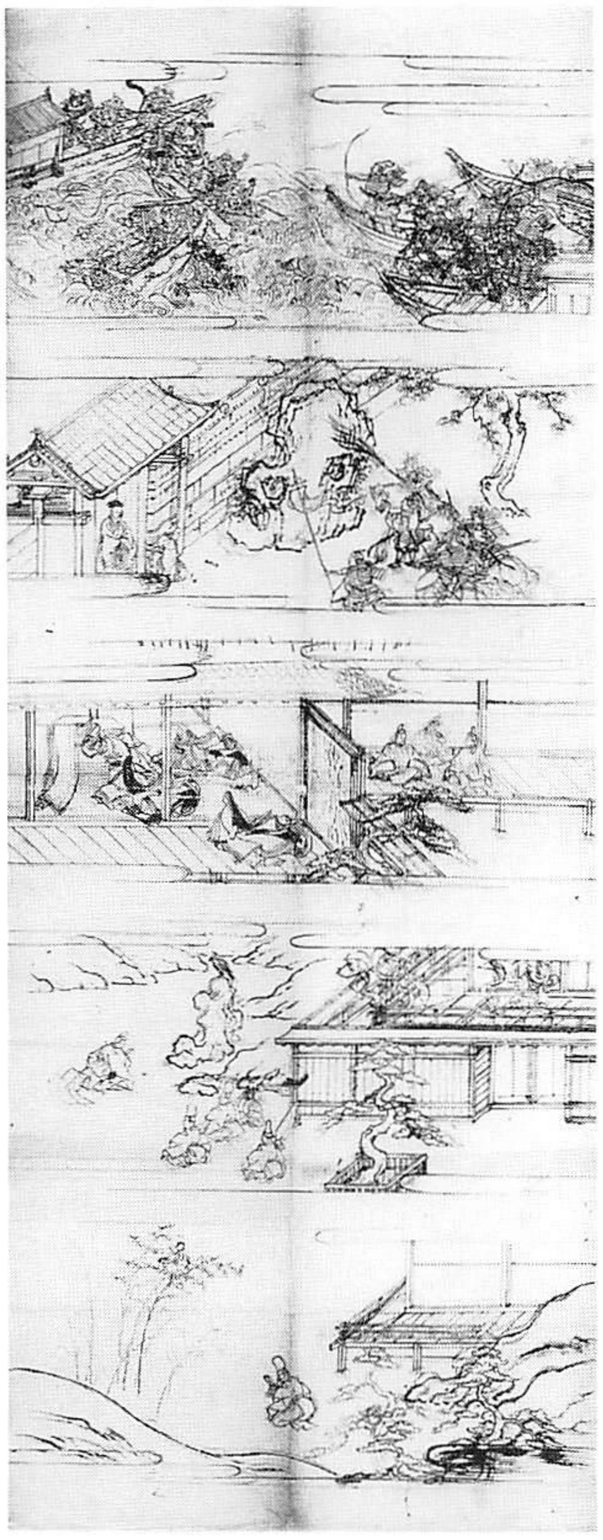
17八幡大菩薩縁起図　（八一）
紙本墨画　一枚　一八三三×七一九七
貼紙多数あり、朱筆あり

（左下落款写墨書）画所預土佐左近将監藤原光■（不読）写」

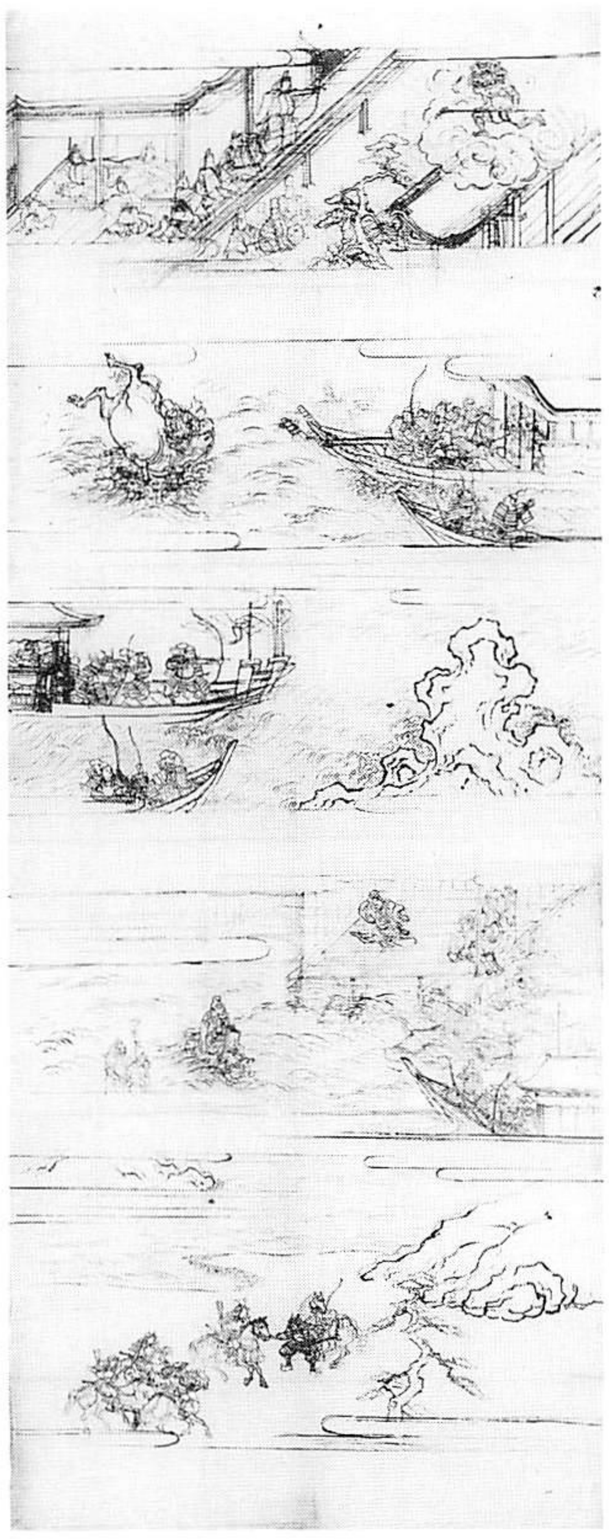


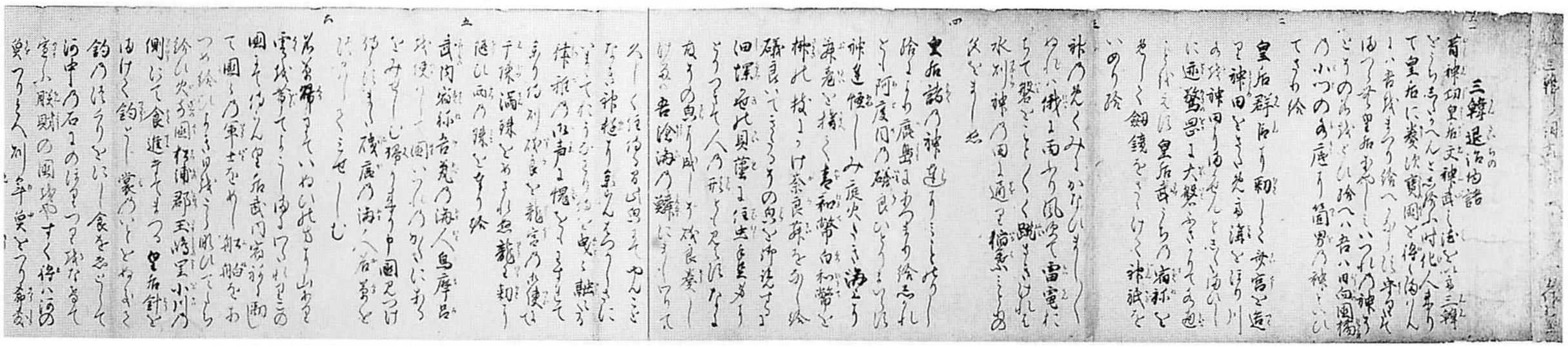
（第六紙右人物）藤処」朱」朱」白」
（第六紙門）朱スミ」白」
（第六紙左人物）白」
（第七紙右人物）藤イロ」朱」白」朱ク／文金」カミ」朱ニテ引」間クサニテ引／コマカニ」白」チヤ」朱」
（第七紙車）シト」クロ」
（第七紙左人物）チヤ」朱」朱」白」

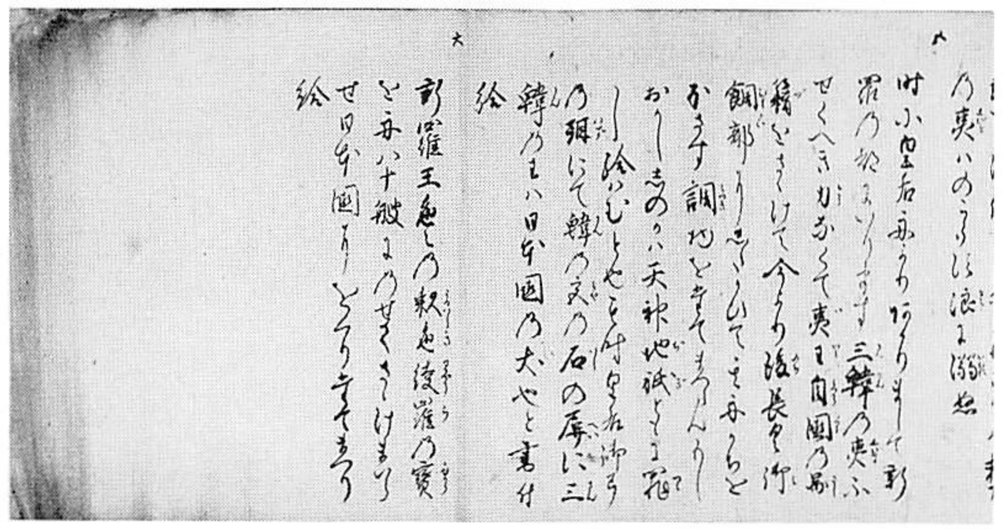
18 八幡大菩薩縁起図　（八二）
紙本墨画　一枚　一八二四×七三二
貼紙多数あり、朱筆あり



19 八幡大菩薩縁起図　（八三）
紙本墨画　一枚　一八二八×七二五
貼紙多数あり、朱筆あり



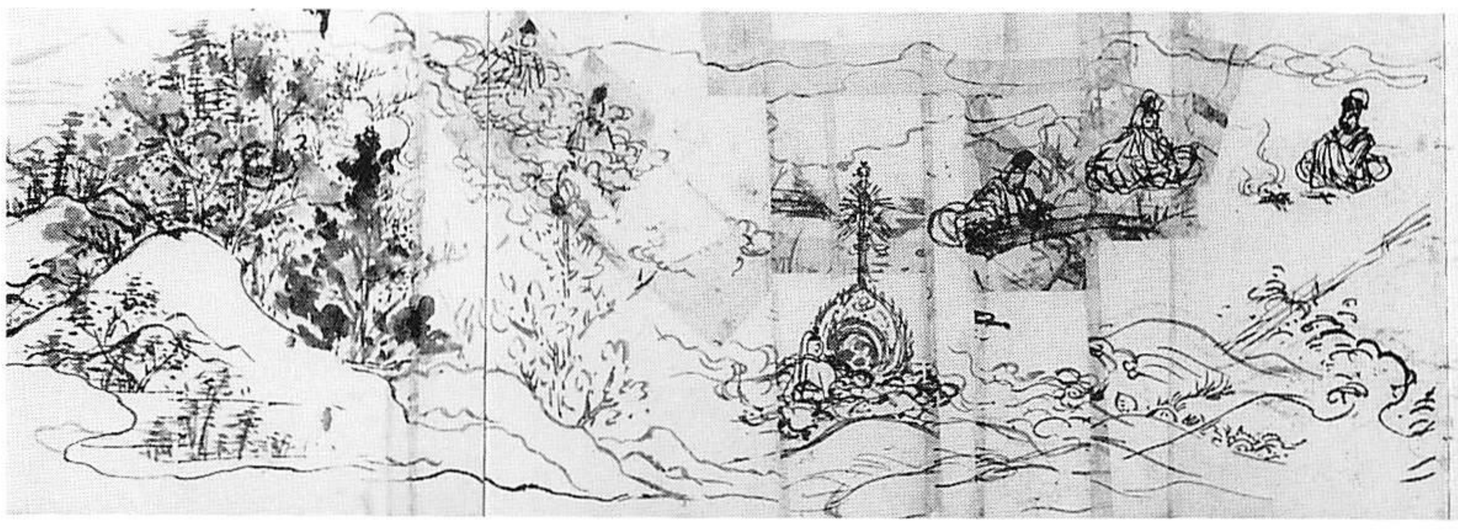


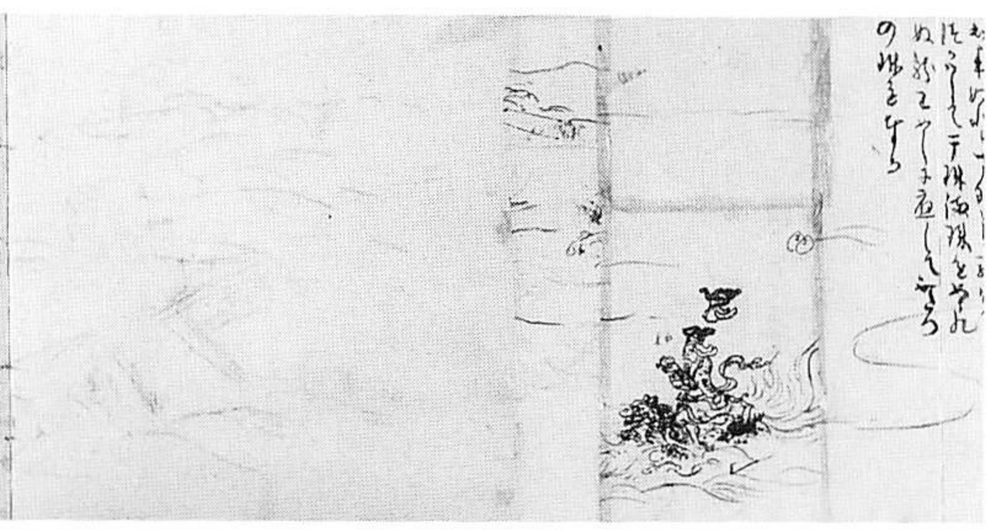


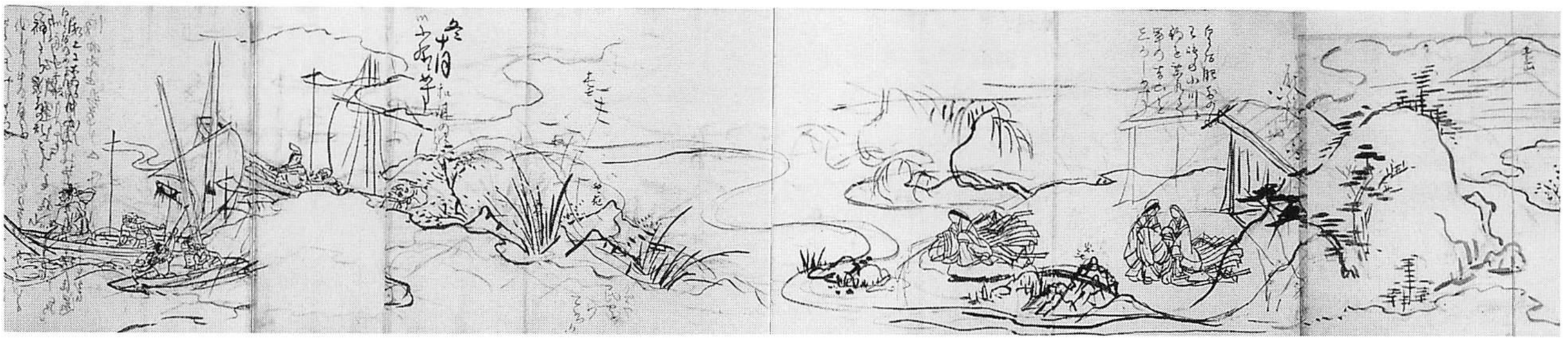
20三韓退治物語絵巻　（二五二―三）
紙本墨書　一巻　三〇二×三三九九
八紙継

［本文別録］

（第一紙裏右墨書）三韓ノ詞書」土佐将監」







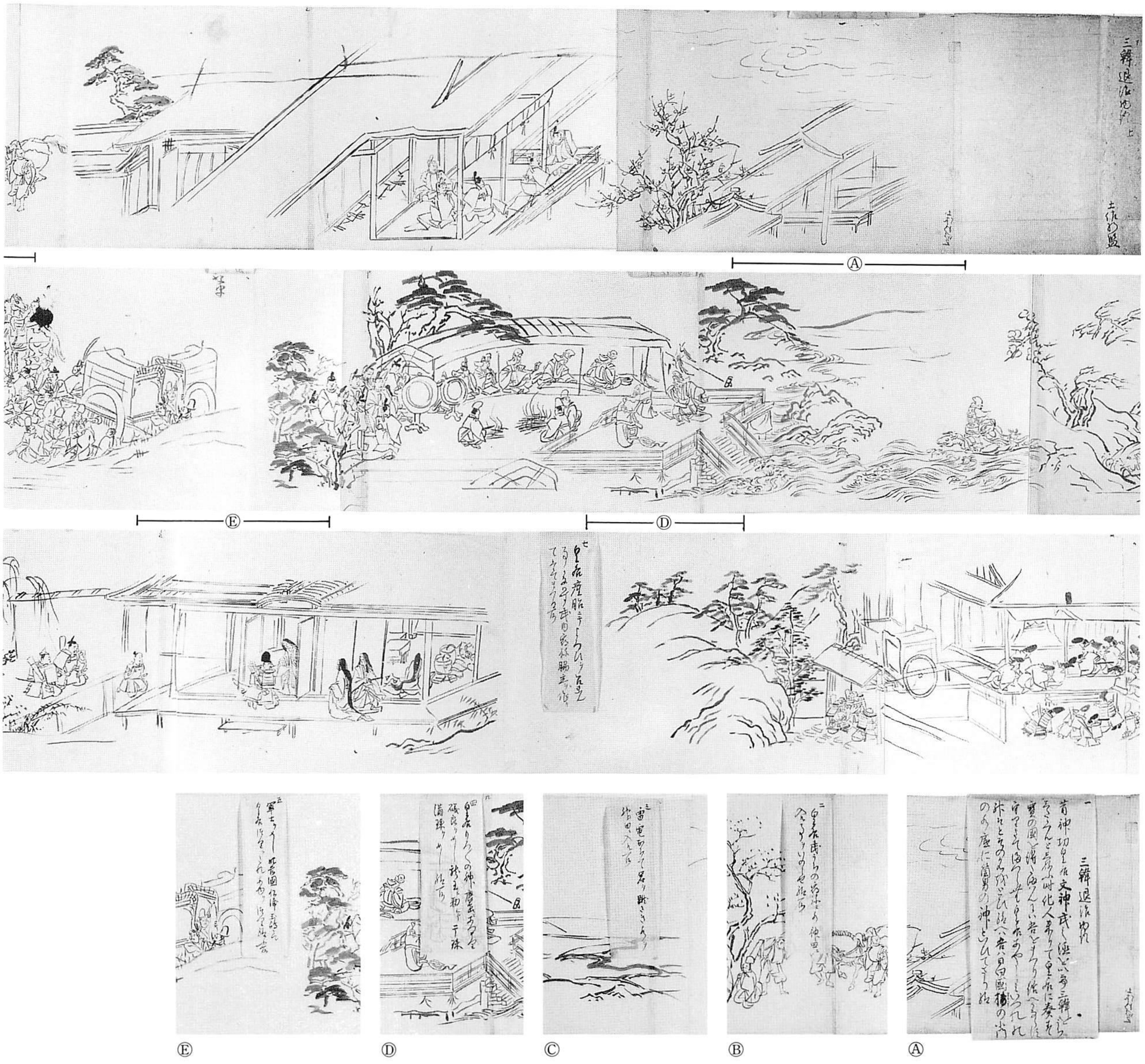
21三韓退治物語絵巻　（二五二―四）
紙本墨画　一巻　二八七×五八八五
二七紙継、貼紙多数あり、紙継不整、裏にも詞書あり

（第一紙裏右墨書）三韓退治上」
（第一紙墨書）神功皇后三韓退治」神のきりたちて／五色の雲／うかぶもては」昔神功皇后文神武之徳を備へて三韓を／退治し亦く／本朝を鎮し／寶祚を萬世に」
（第二紙墨書）やすんせんと思し給に／日向国橘の筒男の神／奏してさり給へハ／皇后武内の臣ニ勅／して宝劔神鏡／ををさゝけて／神田を／寄せて皇■〈不読〉〈運〉を／神にいのり給」この／雲々／とく也」筒男の明神」
杉」
（第三紙墨書）〈ミセケチ〉〈ミセケチ〉冬」落雪」黒雲を書／たをあかし色／ニ書」いわをひくる田へ／水のとほる躰」御いのり神にかなひ／申〈ミセケチ〉神田し〈スミケシ〉て忽に／かれ田の稲葉／たちまち／俄〈ミセケチ〉にミとりの色をましぬ」〈ミセケチ〉〈ミセケチ〉かれた／にて」〈ミセケチ〉〈ミセケチ〉雁」〈ミセケチ〉〈ミセケチ〉雁」八百萬の神鹿島にあつまりて／庭火たき海上に舞臺を／かまへて青幣白幣を榊の／枝に付て奈良舞を成し／給阿度目の磯良の神も／出来ぬれハすなハち龍宮へ／つかハして干珠満珠をめされ／ぬ龍王めしに應してふたつ／の珠を奉る」
（第十五紙墨書）皇后もろ国の／軍兵を召する／めしに應して／あつまる」
（第十六紙墨書）上テ」武内宿祢／事を奏し奉り」
（第二十紙墨書）遠山」
（第二十一紙墨書）皇后肥前国／玉嶋の小川に／釣を垂れて／軍の吉凶を／しろしめす」

（第二十二紙墨書）岩も」木も」卯ノ花」雲斗」クズヤ／民家／少／つゝ書く」
（第二十三紙墨書）冬十月／和彌の津／御ふねニめす」
（第二十五紙墨書）船上に大なる牛出て／皇后のめされける／御舟を覆さんとす／神たち老翁の形と化牛の角とも／とらへておしまろふ／給してそれより／所を牛まろむと言て／牛まとと名付け給へる／ろはすと申てうしまどゝいへり／追風俄ニふきてほとなく／新羅に着給」
（第二十七紙裏墨書）下巻内初」すてにして
追風大に〈おゝいに〉ふきて／ほとなく新羅の国ニ着岸／し給ぬ」すてにして追風おゝ
初て〉はしまりて」時の聲おひたゝしく／
また■■■／■■■■■」雌雄いまたなかは／するニ」皇后水〈ミつから〉干珠を海になけ入給へり／潮たちまち干かたとなる
■■■〈りぬ〉／新羅の夷舟よりおりて〈て〉
かひニ断わり」日本新羅の舟軍へいくさ■
日本の舟に近付にけり／砌に…／其時皇后
満珠を／海に抛給へハ潮たちまちミなきり
／武氏／夷ハのこらす浪におほ■■■／
におほれ死に／込給ね」○皇后御舟よりあ
かりまして新羅の／都ニ入たまふへ〈へハ〉三
韓の夷ふせくへき力／■ふして百濟王ミ
つから国の圖をさゝけて／来て御餝部にし
たかひ奉るへき／旨を奏す」其時ニ皇后ハ
〈石壁にのそミて〉弓弭にて三韓の王は／今
より日本の犬なるへしと書あそ／はし」日
本国にかへり給ハんとす」△皇■〈后ます心
に御障〉■ひらんに〈諸臣〉還城楽を奏す／

（表）

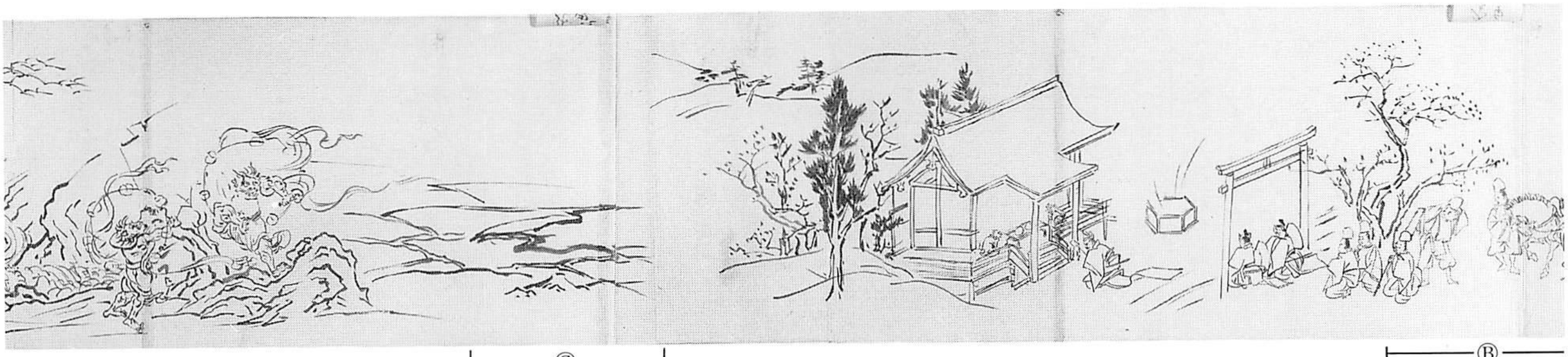
（裏）



一 三韓退治ノ巻

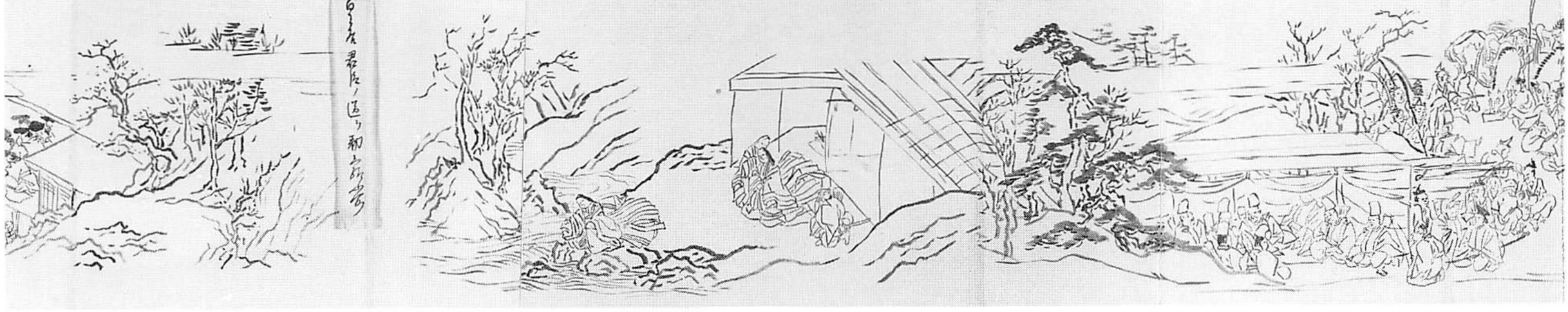
昔神功皇后文神武し給ふ事三韓ゟ
ゟこうんと云ふ神化人来りて皇后に奏そ
宝の国と聞き給へハ〈ひ今は〉問さに(ミセケチ)本朝ニ／かへり
守ゟそ国つ神あや〳〵しうれ
ゟたまい ■■(不読)おもけなる諸臣還／城楽を奏
のみ座に高男の神とうしてさうら
す△」御舟をよそほひ」

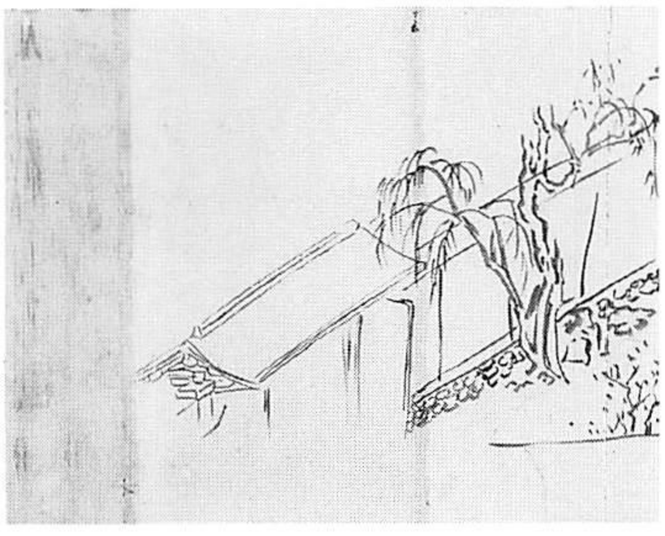
［画中色指示］
（第四紙玉）白」朱」
（第二十六紙人物）白髪翁／シヤウヘ／牛ク
ロ」



Ⓒ

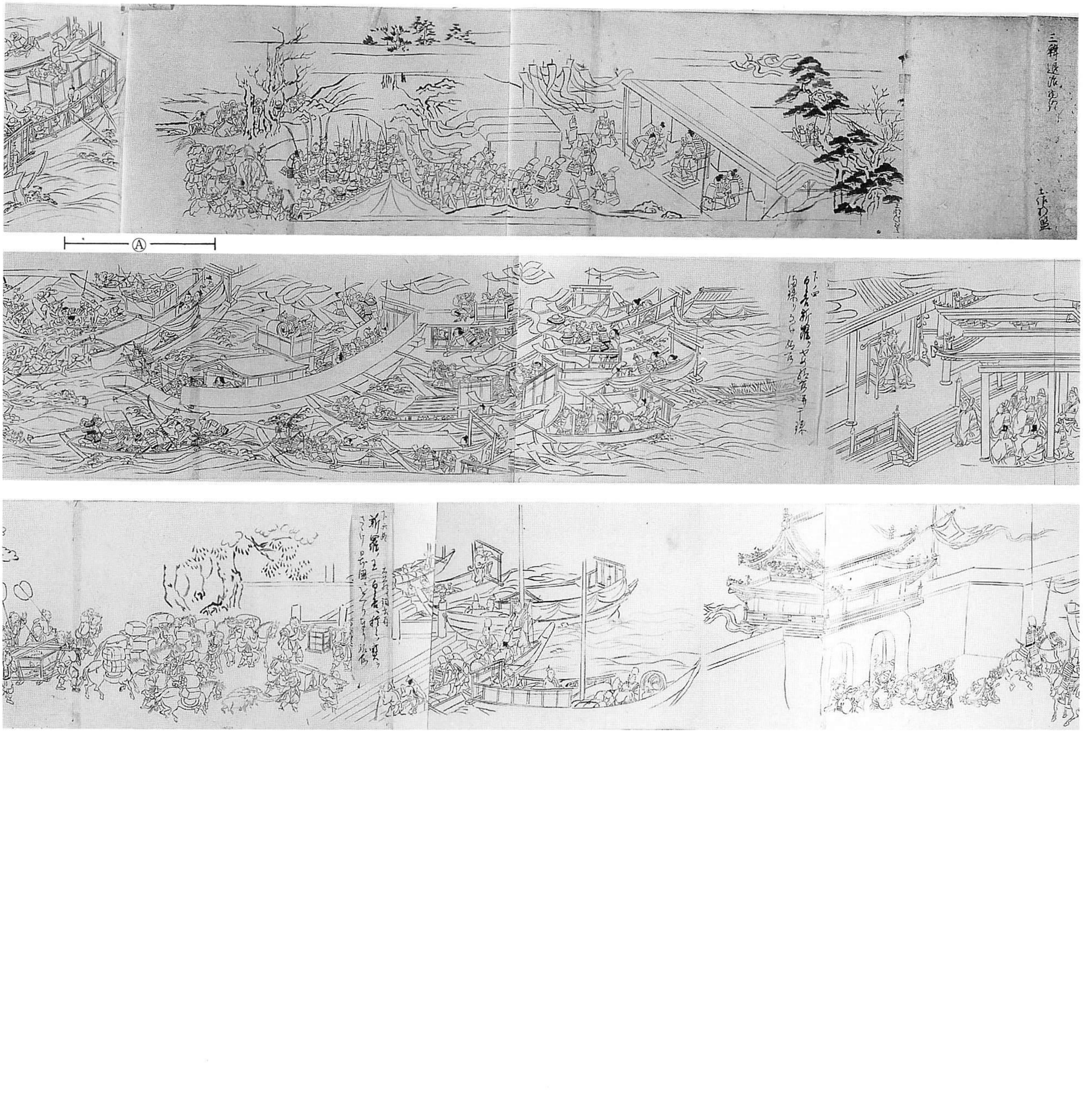
Ⓑ

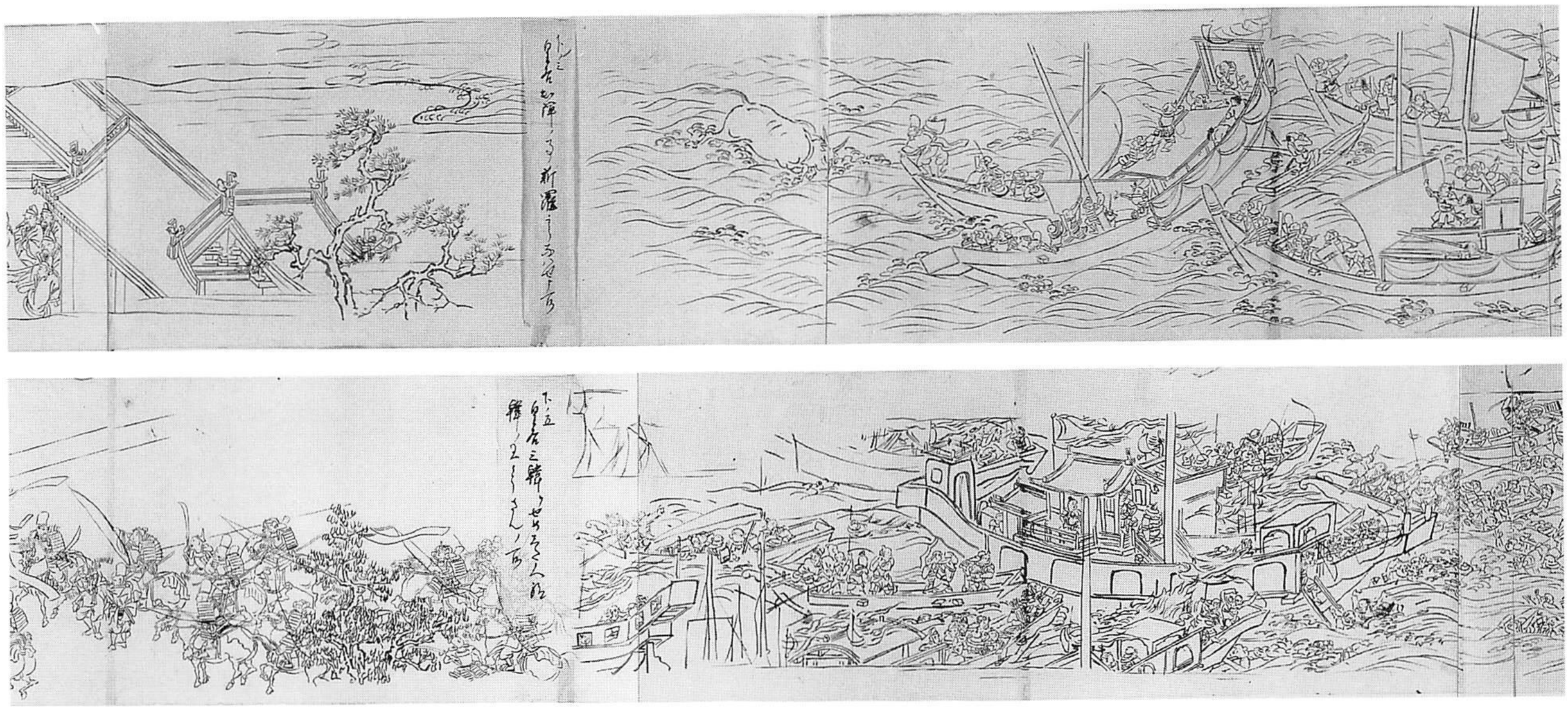




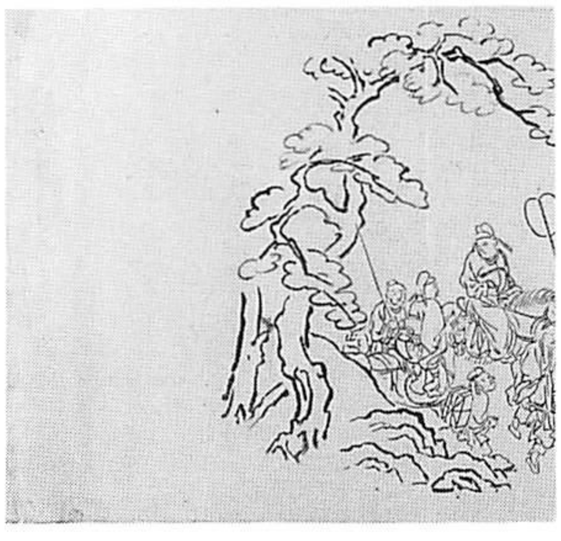
22三韓退治物語絵巻　（二五二―一）
紙本墨画　一巻　二七二×六二九八
（第一紙第二紙継目上白文下朱文長方印）土佐／光輝」
二三紙継。貼紙あり（縦最大二八二㎜）

（第一紙裏右墨書）三韓退治物語　上」土佐将監」
（第二紙裏右墨書）土佐将監」
（第一貼紙墨書）一　三韓退治物語」昔神功皇后文神武之徳を以て三韓をうち／したかへんとし給ふ時化人来りて皇后に奏す／寶の國を得たまハんにハ吾をまつり給へかならす／守りたてまつらむ皇后あやしミいつれの／神にとその名をとひ給へハ吾ハ日向國橘の小門／の水底に筒男乃神といひてさり給」
（第二貼紙墨書）二」皇后武うち乃宿祢ニ水神田ニ／入ル事ヲいのらせ給所」
（第三貼紙墨書）三」雷電おちて岩を蹴さき水ヲ／神田ニ入ル所」
（第四貼紙墨書）四」皇后もろ〳〵の神鹿島ニあつまり／磯良ヲめし龍王ニ勅シテ干珠／満珠ヲめし給所」
（第五貼紙墨書）五」軍士ヲめし肥前國松浦玉嶋ニテ／つりをたれあゆをつり給所」
（第六貼紙墨書）六」皇后君臣ノ道ヲ勅し給ふ所」
（第七貼紙墨書）七」皇后産胎ニテよろひヲ召れん／事かなハす武内宿祢脇立ヲ作リ／てたてまつる所」





Ⓐ



23三韓退治物語絵巻　（二五二―二）

紙本墨画　一巻　二七二×六八五四

（第一紙第二紙継目上白文下朱文長方印）土佐／光輝」

二十紙継、貼紙あり

（第一紙裏右墨書）三韓退治物語下」土佐将監」

（第二紙裏右墨書）土佐将監」

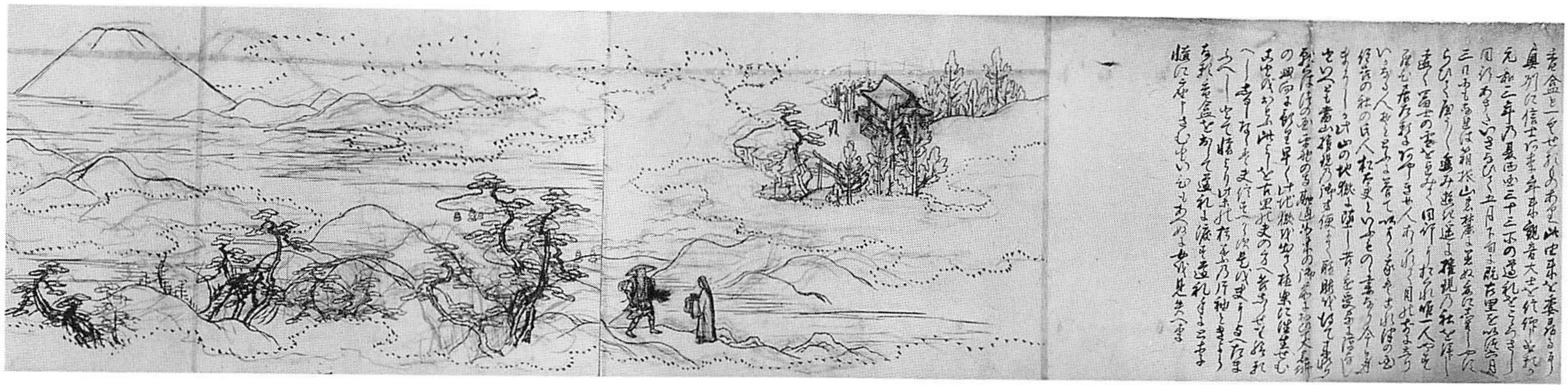
（第一貼紙墨書）下ノ二」肥前國ニテ海上ニ牛出テ御舩ヲ／くつかへさんとせしニ神あらはれ／まろはし給牛まとの所」

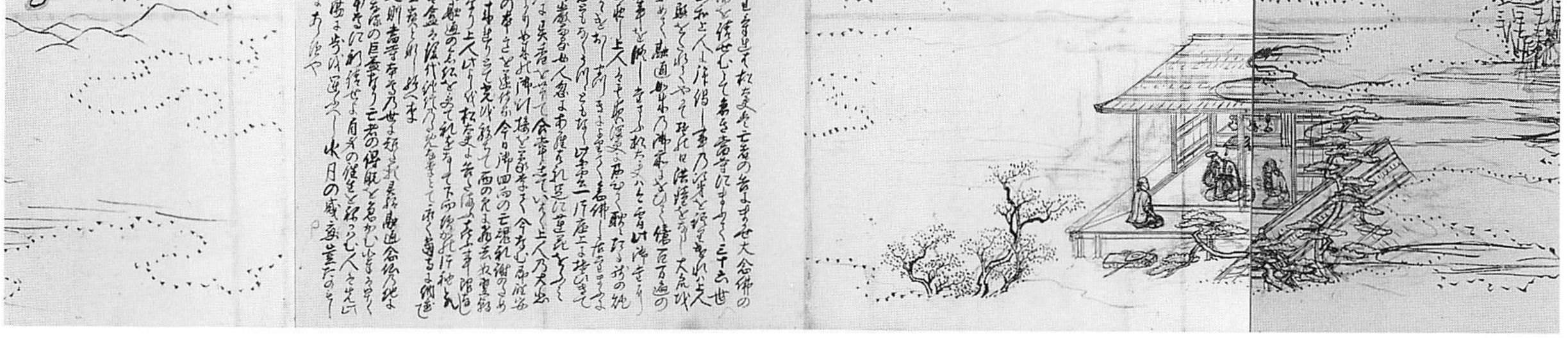
（第二貼紙墨書）下ノ三」皇后出軍ノ事新羅うらなハせ申所」

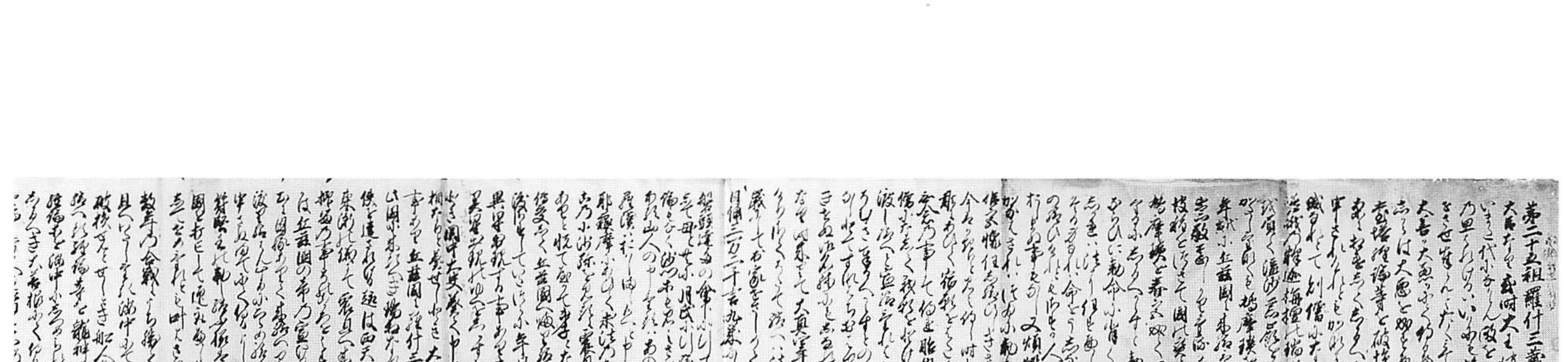
（第三貼紙墨書）下ノ四」皇后新羅ヲせめ給所并干珠／満珠ヲなけ給う所」

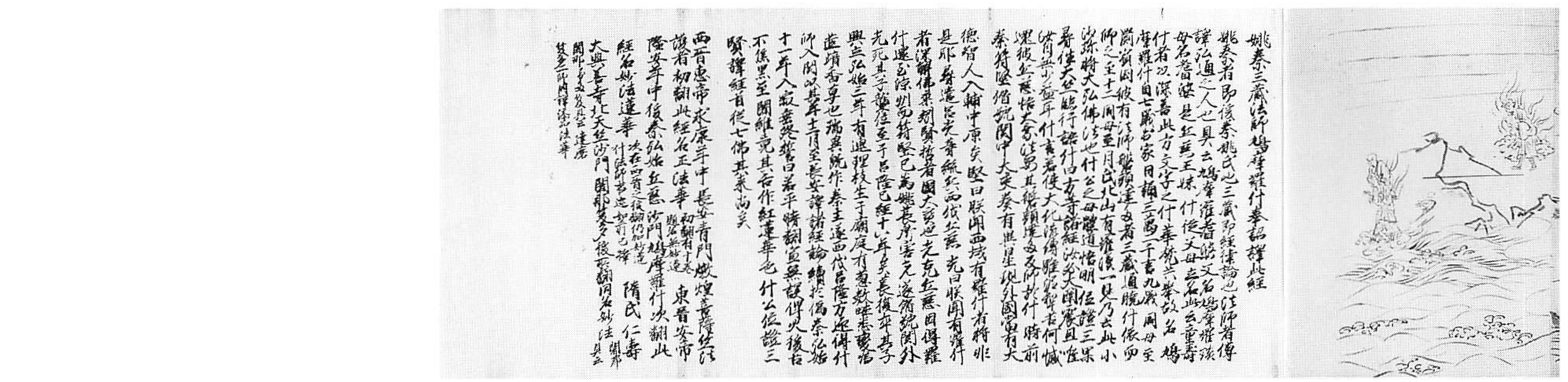
（第四貼紙墨書）下ノ五」皇后三韓ヲせめしたかへ給／韓ノ王かうさんノ所」

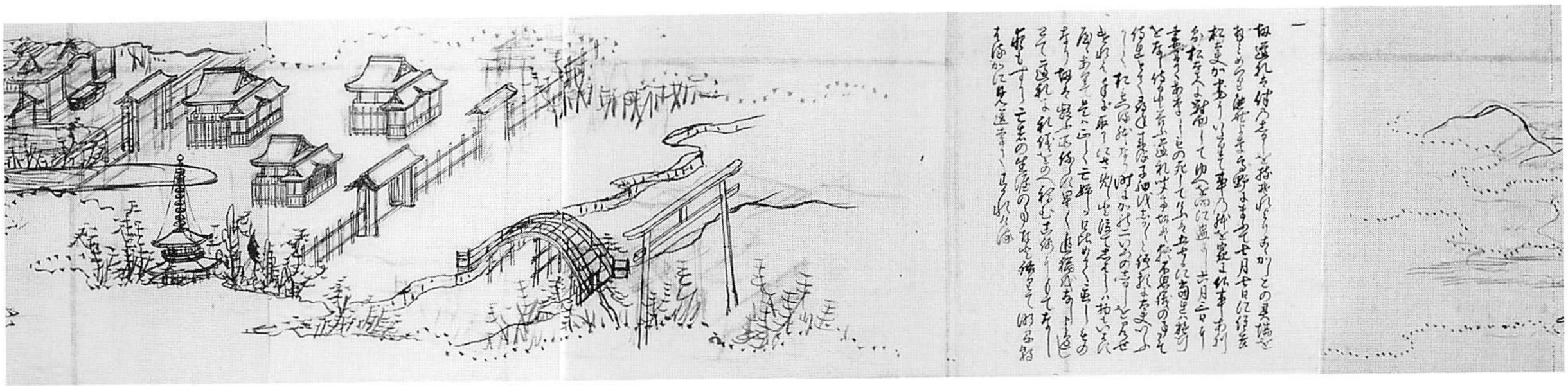
（第五貼紙墨書）下六終　右いつれも詞書有」新羅ノ皇后へ種々ノ寶ヲ／さゝけ日本國ニをくり奉り給所」



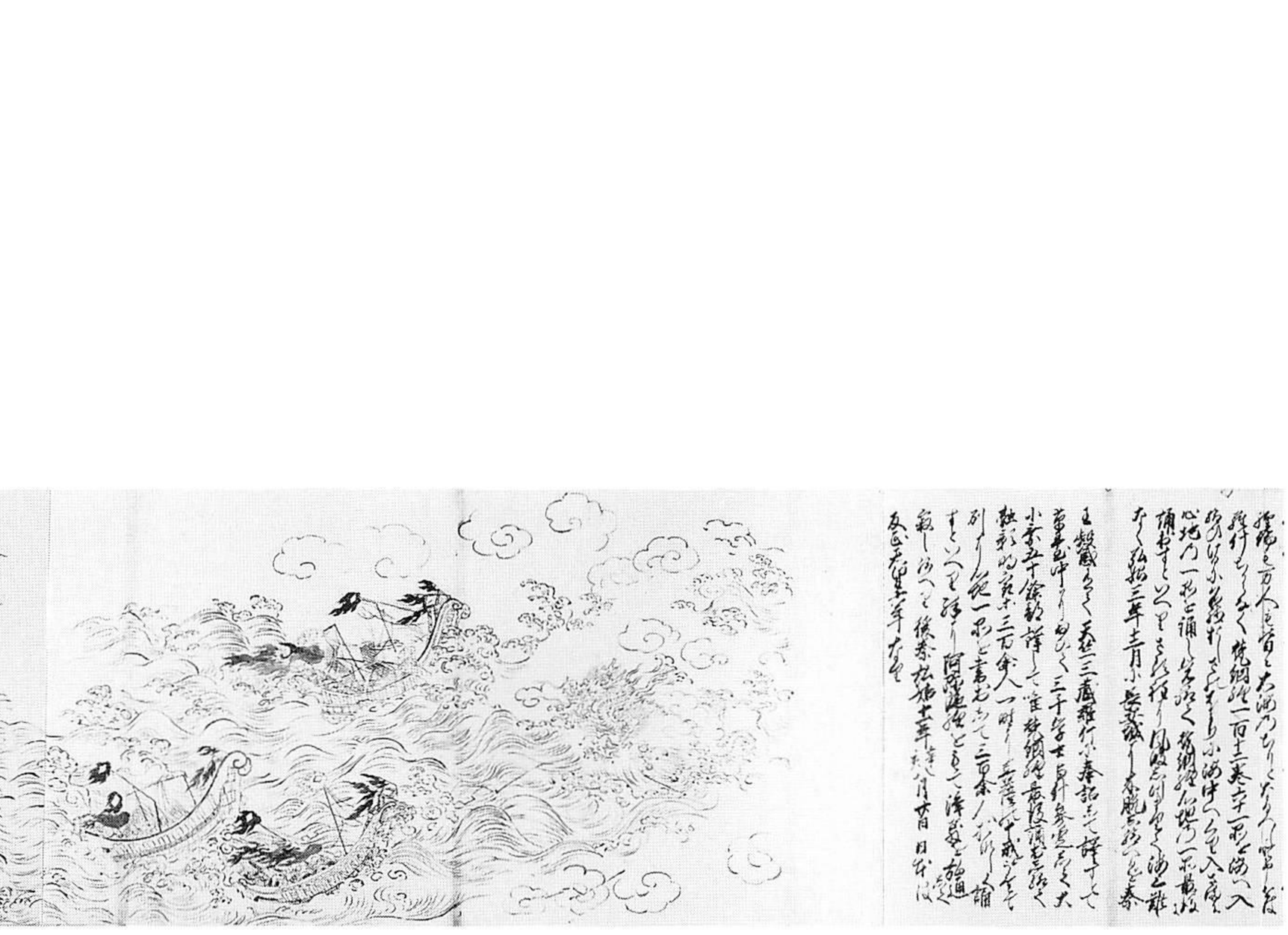




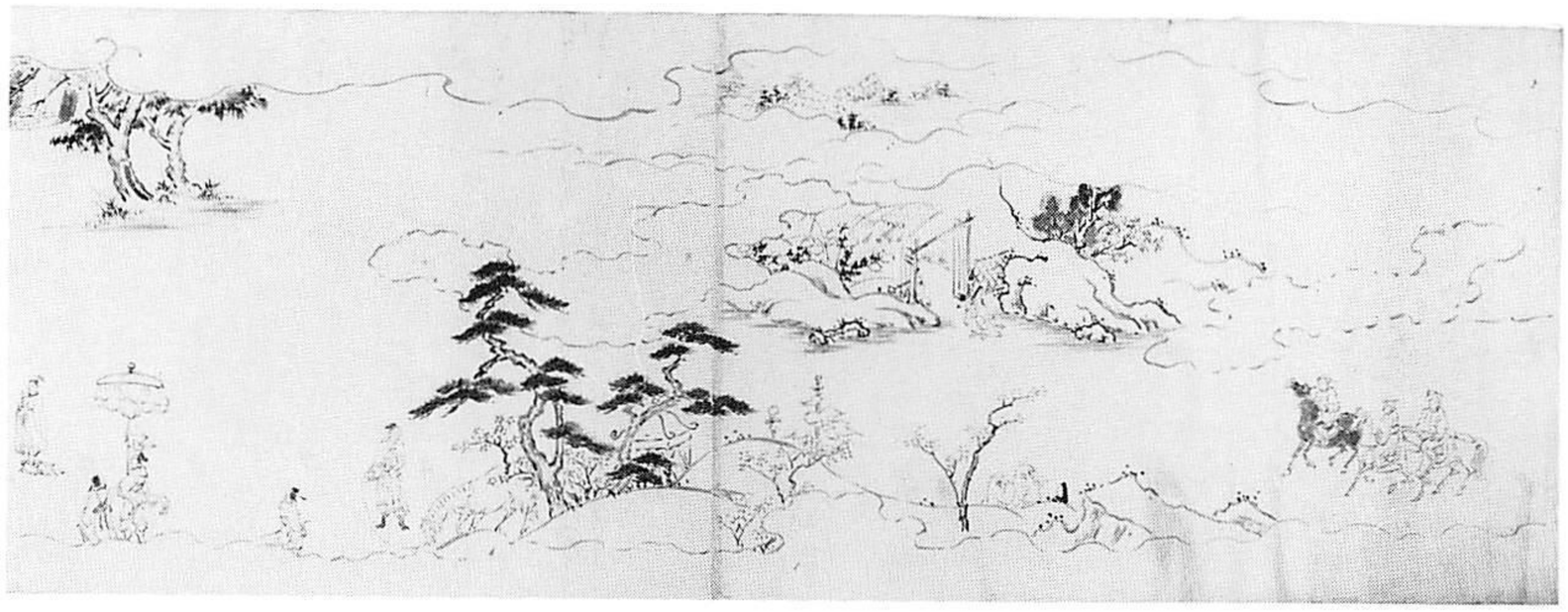




24片袖縁起絵巻　（二四〇）
紙本墨画　一巻　三三九×五二七二
享保八年（一七二三）
土佐光芳
十七紙継、焼筆あり
［本文別録］
（第十紙墨書）ケシ」
（第十七紙墨書）享保八年六月七日／真珠院殿取次」

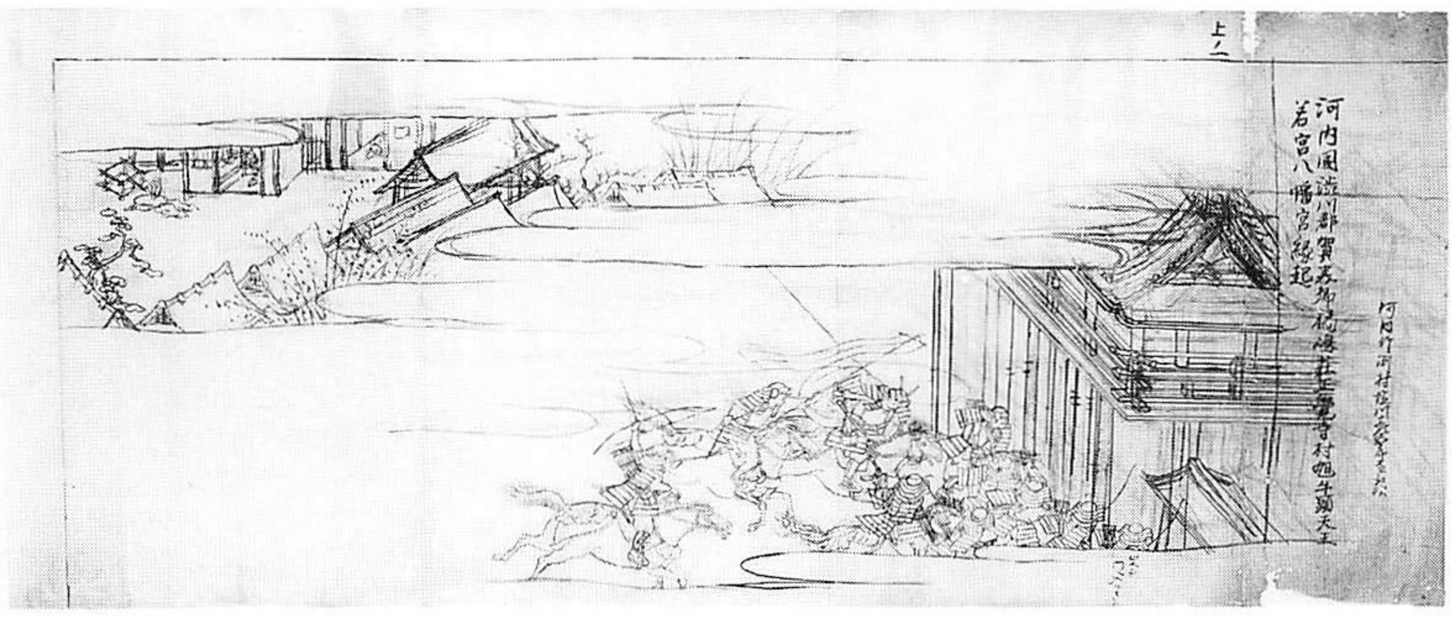


25羅什三蔵絵　（二七六）
紙本墨画淡彩　一巻　三四九×三八九七
十五紙継
［本文別録］
（第一紙裏右墨書）嵯峨釈迦之縁起」
（第一紙上右墨書）一」
（第二紙上右墨書）二」
（第三紙上右墨書）三」
（第四紙上右墨書）四」
（第五紙上右墨書）五」
（第六紙上右墨書）六」
（第七紙上右墨書）七」
（第十三紙上右墨書）ヲクノ一」
（第十四紙上右墨書）ヲクノ二」



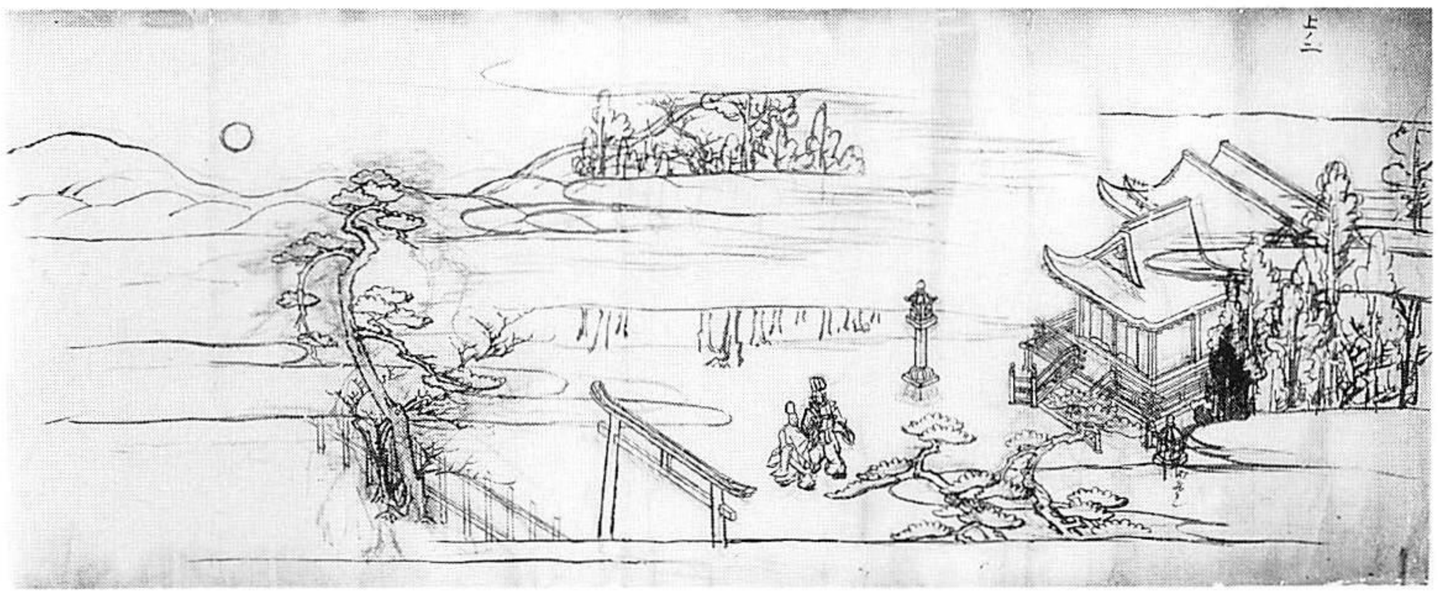
27橘嶋庄両社縁起図　（二五三―一）
紙本墨画　一枚　四一〇×九七六
土佐光芳
四紙継、焼筆あり

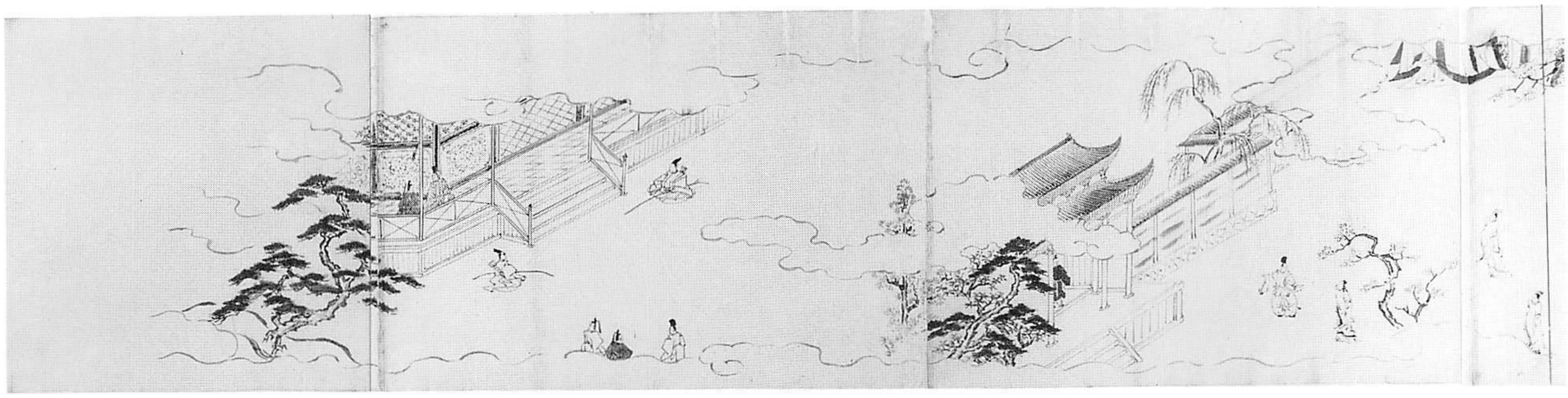
（右墨書）河内竹渕村塩川彦五郎殿取次」河内國渋川郡賀美郷橘嶋荘正覺寺村旭牛頭天王／若宮八幡宮縁起」上ノ一」
（下右墨書）此人形／門へ入カワリ」



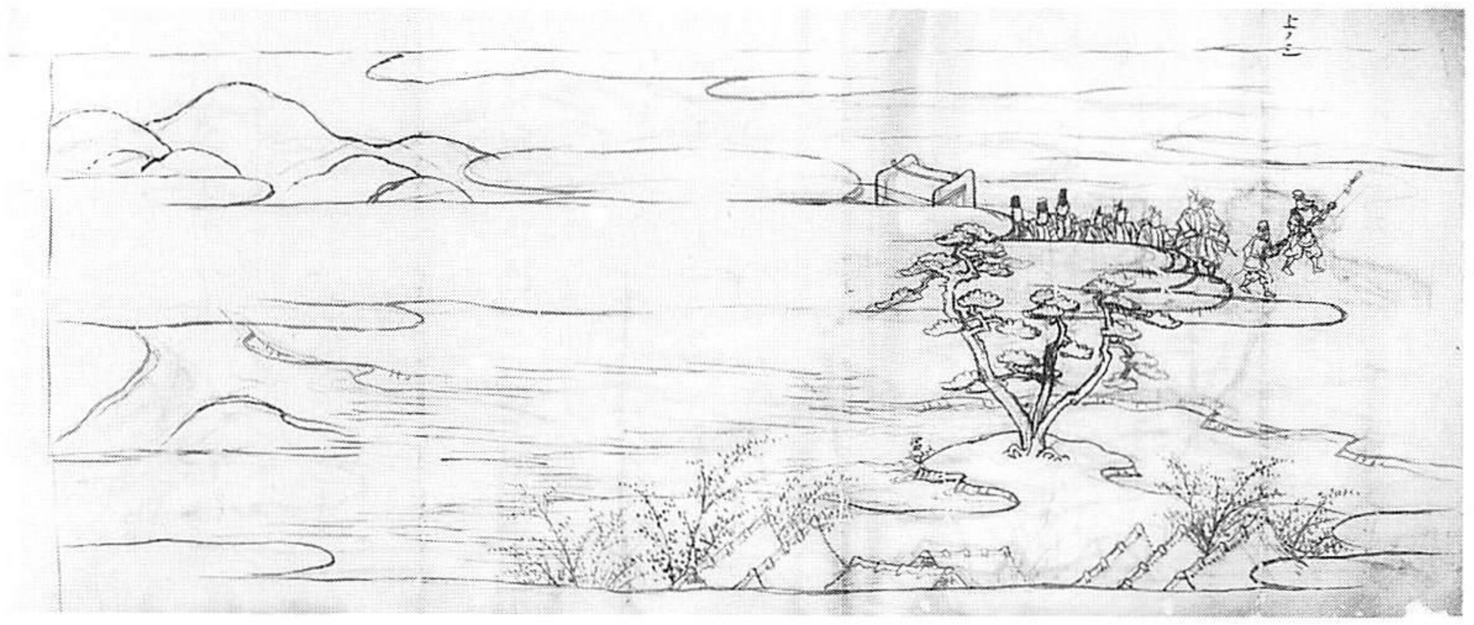
28橘嶋庄両社縁起図　（二五三―二）
紙本墨画　一枚　四〇六×九八〇
土佐光芳
四紙継、焼筆あり

（右上墨書）上ノ二」
（右中墨書）灯籠ケシ」

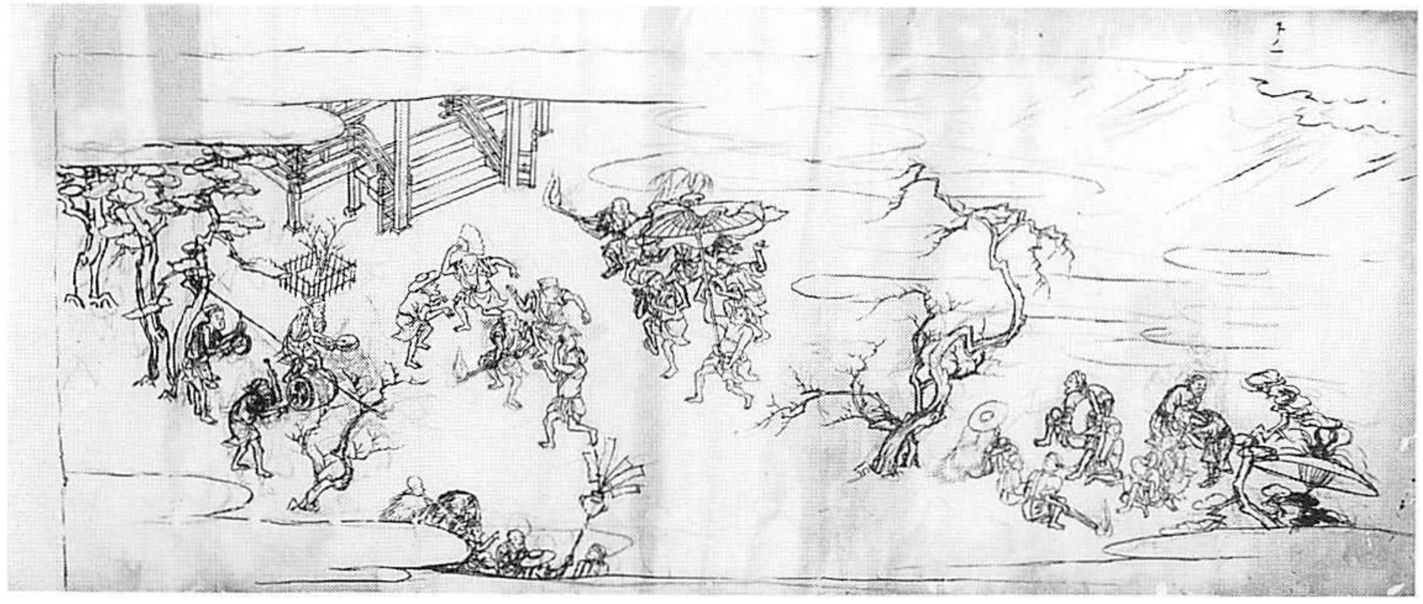




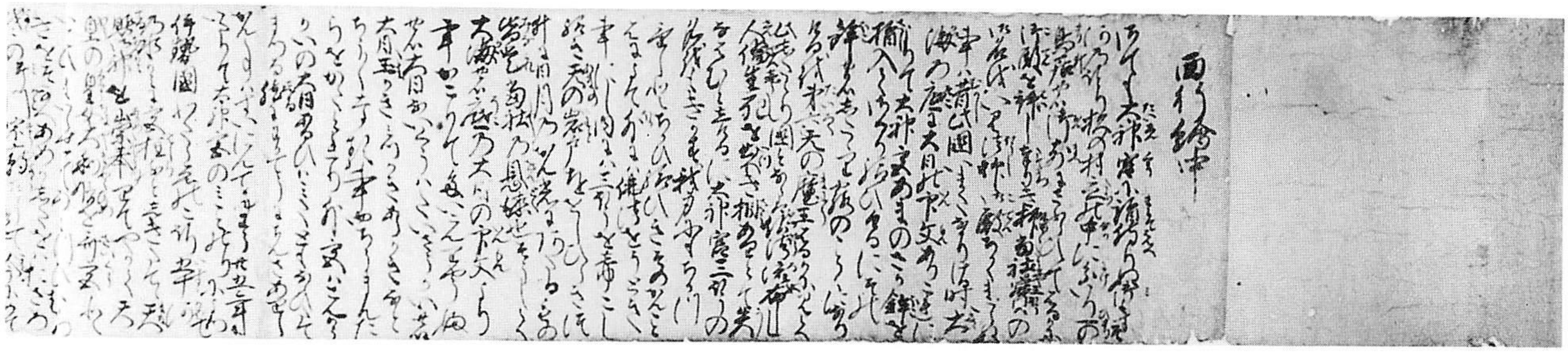
26 絵巻断簡　（二一四―一）
紙本墨画　一巻　三二七×二四一四
五紙継

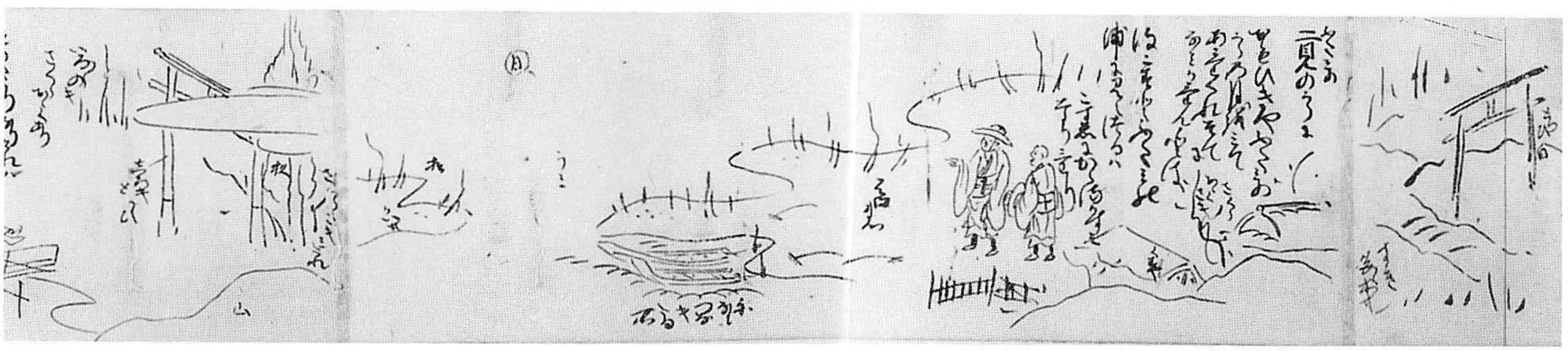


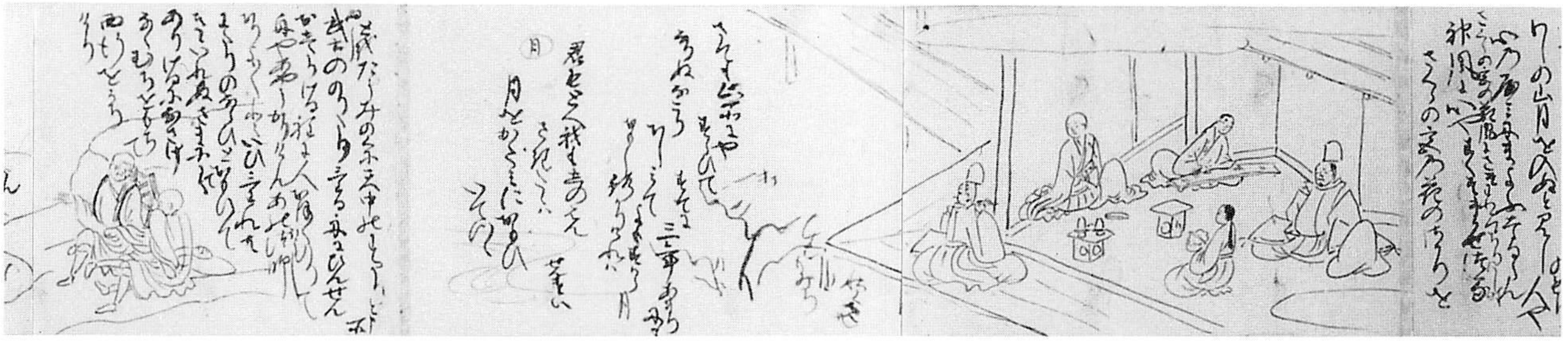
29 橘嶋庄両社縁起図　（二五三―三）
紙本墨画　一枚　四〇七×九七七
土佐光芳
四紙継、焼筆あり
（右上墨書）上ノ三」



30 橘嶋庄両社縁起図　（二五三―四）
紙本墨画　一枚　四〇七×九七八
土佐光芳
四紙継
（右上墨書）下ノ一」





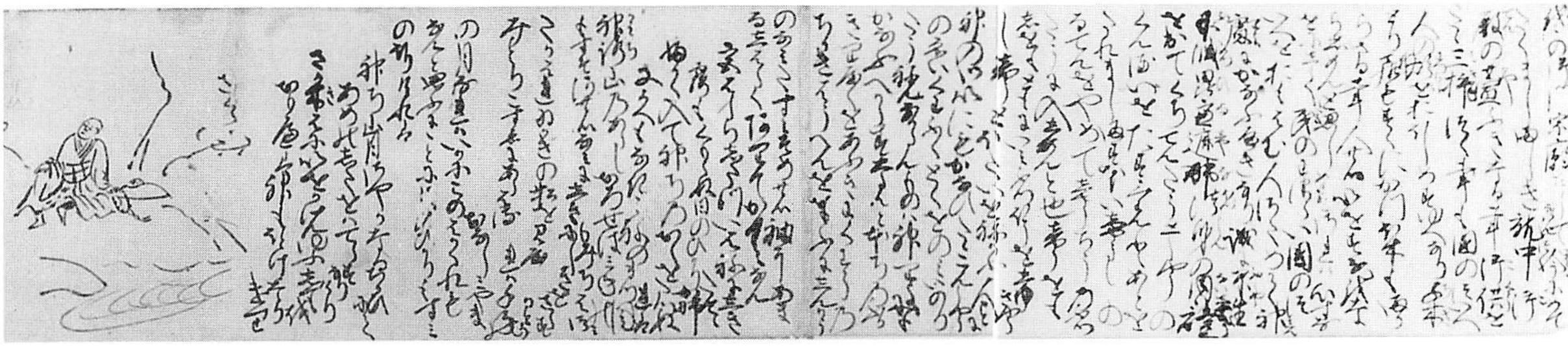


（第二紙墨書）西行繪中」さても太神宮に詣侍りぬ御もすそ／河のほとり杉の村立の中に分いり一の／鳥居の御前にさふらひてはるかに／御殿を拝し奉りき抑　當社〇〈三〉寶の／御名をいみ法師御殿ちかくまいらぬ／事ハ昔此國いまたなかりける時大／海の底に大日の印文ありこれに／よりて太神宮あまのさか鉾を／指入てさくり給けるにその／鉾のしたゝり露のことくになり／けるを第六天の魔王はるかにみて／此したゝり國とならは仏法流布し／人倫生死を出へき相ありとて失／なはんとしけるに太神宮三ほうの／名をもきかす我身にもちかつ／けしとちかひ給ひきそのおんこと／はによて外にハ佛法をうとき／事にし内にハ三ほうをしゆこし／給き天の岩戸ををしひらきつ／いに日月乃おん光にあたるもの／皆是當社乃恩徳也そうして／大海の底乃大日の印文より／事おこりてたいこんりやうふ／の大日ないくうハたいさうかいの／大日玉垣ミつかきあらかきなと／ちう〳〵なる事四ちうまんた／らをかたとれり外宮ハこんかう／かいの大日あるひハミたともならひたて／まつる然にわかてうにちんさありし」

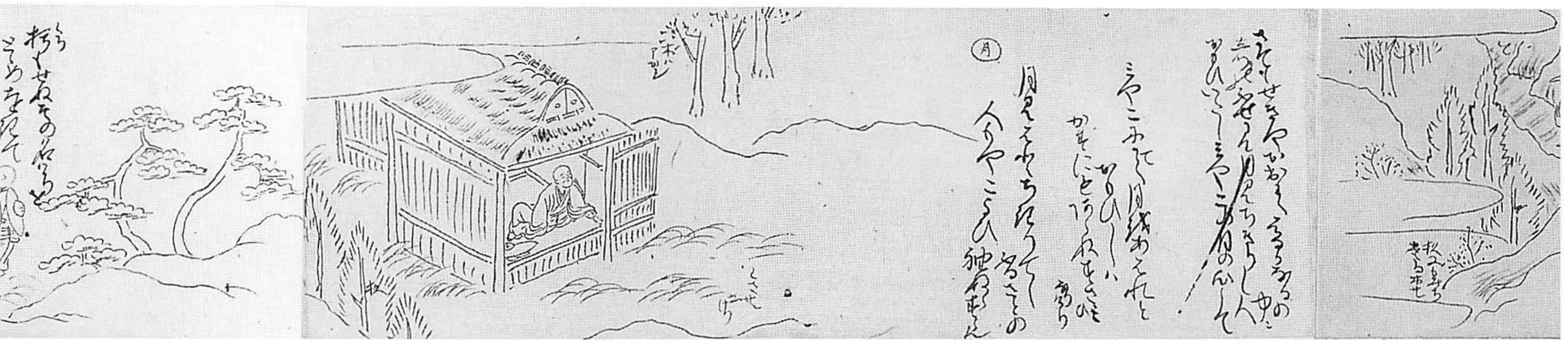
（第三紙墨書）おん事ハすいにんてんわう廿五年に／いたりて太神宮のミことのりによつて／伊勢國わたらゑのこほり五十河／乃水かミ宮柱ふとしきたてゝ天／照御神を崇奉りてやかて天／皇の皇女大和姫を齋宮と／いはひまいらせてあまつひむろ／きをそなへあめかしたをハをさめ／代々の御門宗廟として今にめて／たくましましき就中御／殿の萱ふきなる事御供を／たゝ三杵つく事も國のついへ／人の煩をおほしめすゆへなり千木／とり居もすくにかつほるかに／らさる事人の心をすなをな／らしめんと思しめすされハ心すな／をにして民のわつらひ國のつ／いへをおもはむ人さんたうししやうの／くんるいをたすけんとあとを／たれまします本いしやうしの／るてんをやめてしやうちう乃ふつ／たうに入しめんと也しやうをも／しをもともにいミふつほうをしゆきやう／ししやうとほたいをねかふ人ことに／神の御心にもかなひたゝこんしやう／のゑいくわふくとくをのミいのり／たうねんなからんものハ神りよにも／かなふへからすなんと本ち乃ふか／きりやくをあふきわくわう乃／ちかきほうへんをおもふにしんかう」

（第四紙墨書）のなミたすミそめの袖にあま／るしはらくありてかくなん」宮はしらしたついはねにしきたてゝ／露もくもらぬ日のひかりかな」ふかくいりて神ちのおくをたつぬれは／又うへもなきミねのまつかせ」神路山乃あらしおろせはミねの／もみちは御／もすそ河のなミにしき錦をさらすかとう／たかはれゑかきの松をみやれハ千年の／みとりこすゑにあらはる／おなしミやま／の月なれハいかにこのはかくれも／なんとおもふにことに月のひかりもすミのほりけれは」神ち山月さやかなるちかひにて／あめのしたをハてらすなりけり」さかきはに心をかけんゆふしてを／おもへは神もほとけなりけり」

（第四紙絵墨書）さくら」とり／ひ白」すき／



色、木共」
（第五紙墨書）二見（ふたみ）のうらに」おもひきやふたミの／うら乃月をミて／あけくれそてに／なみかけんとは」波こすとふたミの／浦に見えつるハ／こすゑにかゝるかすミ／なりけり」
（第五紙絵墨書）さくら／おゝく／さきて」くすや」はま／まつ」舟／なと／つな／き／たる／所」うミ」月」杉」かい共」
（第六紙絵墨書）さくらさきミたれ」杉」山」しろキ／とりひ」いろ〳〵のキ／さくらおゝくあり」かハ」山」
（第六紙墨書）花のさかりなりけれハ／よしのの花にも／まして」いはとあけしあまつミことのそのかみに／さくらをたれかうへはしめけむ」神ち山みしめにこもる花さかり／こはいかハかりうれしかるらん」風の宮乃花ことにわりなくさき／みたれたるミて」この春は花をおしまてよそならん／心をかせの宮にまかせて」
（第七紙絵墨書）さくら／さミたれ」とりひ」松」松」月」さくら」山」杉」
（第七紙墨書）月よミ乃宮にて／詣てたり／けるに」こすゑ（へ）見れは秋にかきらぬ／名なりけり／春おもしろき月よミのもり」さかやなるわしのたかね乃くもまより／かけやはらくる月よみのもり」わしの山月を入ぬと見し人や／心乃やミにまよふなるらん」
さくらの宮の花風にさそわれてちりにし時」神風に心やすくそまかせつる／さくらの宮乃花のさかりを」
（第八紙絵墨書）秋くさ共」もみち」松」月」せんすい」月」
（第八紙墨書）さても此所にや／すらひて／すてに三年あまり／にも／なりぬなこり／おしミて／よもすから／おもしろかりけれハ」君もとへ我もしのはん／さきたゝハ／月をかたミにおもひ／いてつゝ」
（第九紙墨書）とをたうみのくに天中のわたりと申所／武士（もし）ののりたりける舟にひんせん／おしたりける程に人おほくのりて／舟やあやうかりけんあの法師（ほうし）／おりよ〳〵といひけれ共／わたりのならひとおもひて／きゝいれぬさまにて／ありけるになさけなくむちをもて／西行をうち／けり」
（第八紙絵墨書）さいきやうこひん／より／うたる／也」
（第九紙墨書）としたけて又こゆへしと／おもひきや／いのちなりけれさやの／中山」
（第九紙絵墨書）山」もみち」さよの中山の／明神のまへにて」もみち」
（第十紙絵墨書）秋すゝき」
（第十紙墨書）するかのくにゝ、〇〈おかへとゆふしゆく〉あはれたる御堂に／たちよりやすミてみれハ此／ミたうにてかの同行はてゝかたミに／かさにようもんかきておきしお／かなしみて」かさハありその／身ハいかになり／ぬらん／あはれは／かなき／あめの／したかな」一かりのをとつれ心／ほそくて」秋たつと人ハつけねとしられけるに」こすゑ（へ）見れは秋にかきらぬ／名なりけり／春おもしろき月よミのもり」さかやなるわしのたかね乃くもまより／かけやはらくる月よみのもり」わしの山月を入ぬと見し人や／心乃やミにまよふなるらん」
さくらの宮の花風にさそわれてちりにし時」神風に心やすくそまかせつる／さくらの宮乃花のさかりを」
（第十一紙墨書）きよミかせきにつきぬれハ／おきのなミみきハのいわに／くたけ月の光しほにみち」清見かたおき乃／いはこすしら／波に／ひかりをかはす／秋乃夜の／月」
（第十一紙絵墨書）月」
（第十二紙墨書）するかの國にかゝりて」風



になひくふし乃／けふりの空にきえて／行ゑもしらぬ我おもひかな」いつとなきおもひは／ふしのけふりにて／まとろむほとや／うき嶋（しま）かはら」

（第十二紙絵墨書）さか」

（第十三紙墨書）あしから山にかゝりて／むかしさねかたの／中将の名もあしからの／こからしの風身にしむ／ハかりなり」山さとは秋乃／すゑにそおもひ／しる／かなしかり／けり木／からしのかせ」さかみくにおほはといふ所」とかみ原きりの／まより秋風に」ゑはまとふくすのしけミにつまこめて／とかみかはらに／おしかなく／なり」そのゆふかたにさはへのしき／とひたつおとしけれハ」心なきミにもあはれハ／しられけり／しき立さはの／あきの夕くれ」

（第十三紙絵墨書）松」くつや」あし」

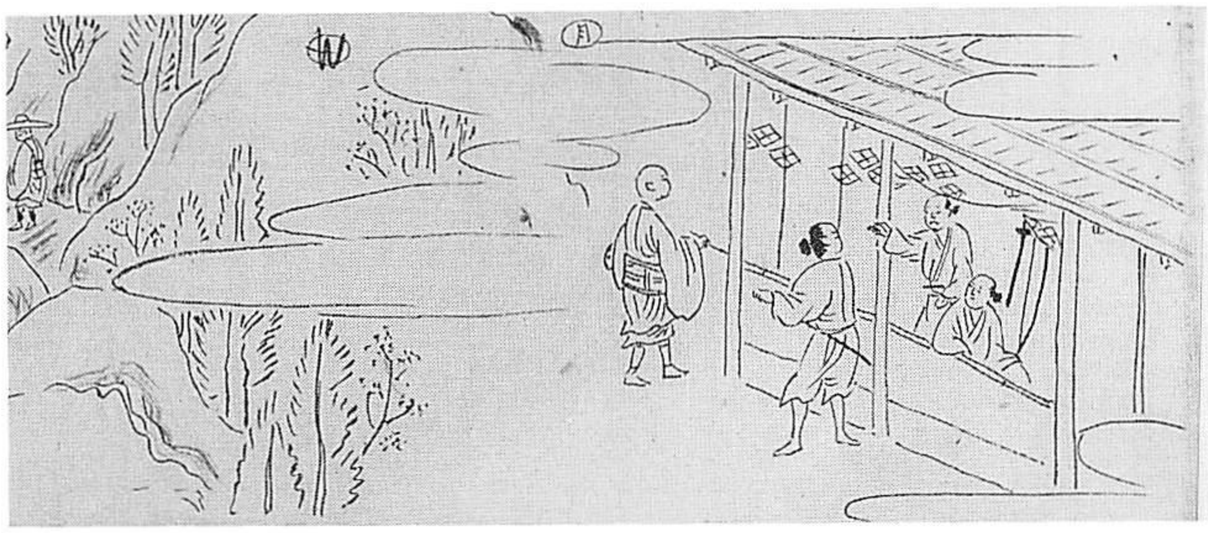
（第十四紙墨書）むさしのにわけ入てお花（はな）か露に／やとる月すゑこす風に」いかて我きよく曇（くも）らぬ身となりて／心乃月のかけをみかゝむ」いかゝすへき世にあらハこそ世をもすて／あなうの世やとさらにいとはん」

秋はたゝこよひハかりの名なりけり／おなし雲井（くも）に月ハすめとも」

（第十四紙絵墨書）月」あきくさ色々／しけりけり／おきすゝ／はき」

（第十五紙墨書）みちの國へ下白河の関といふ所ニ／とゝまりせやのはらに月おもしろかりけれは／のういん入道ミやこをハかすみとも／たちしかあき風そふく白河の」しら河のせき屋を月のもるからに／人の心をとむるなり／けり」たれすみてあはれしるらん山さとの／雨ふりすさむ夕／暮（くれ）乃そら」

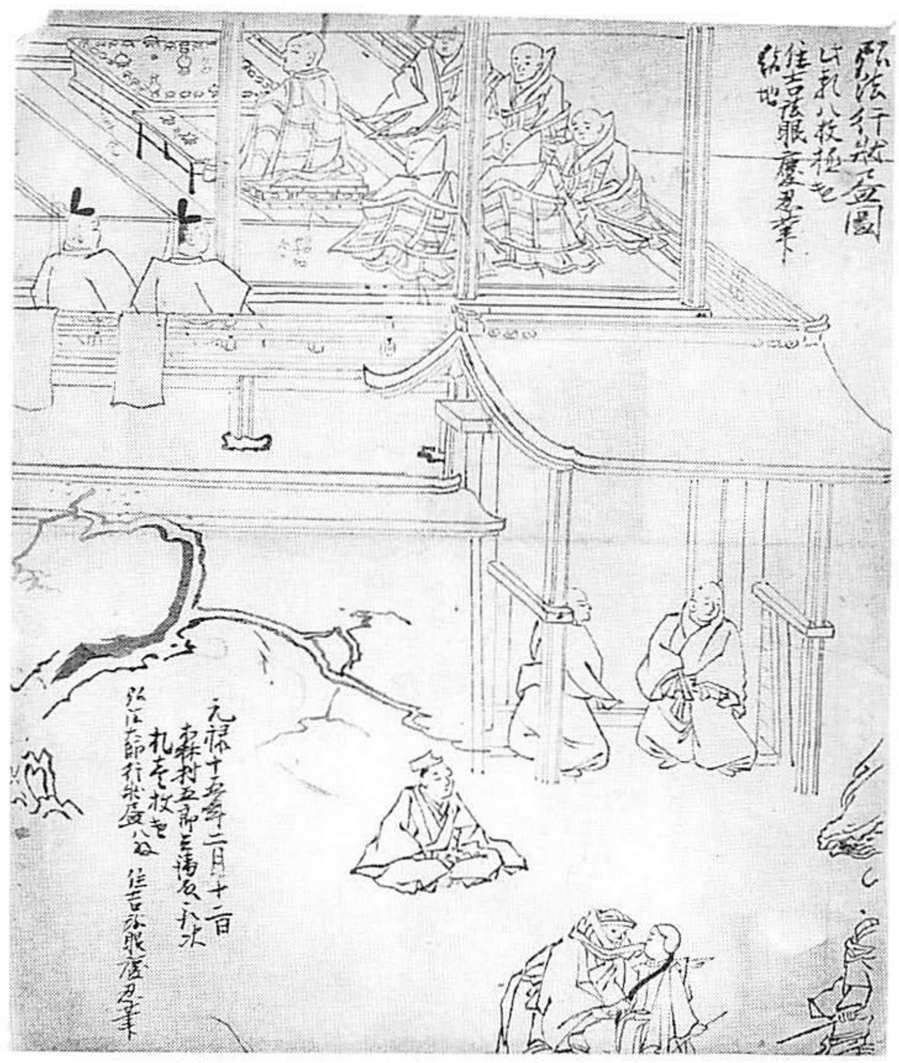
（第十六紙絵墨書）月」杉又もみち／茂る木

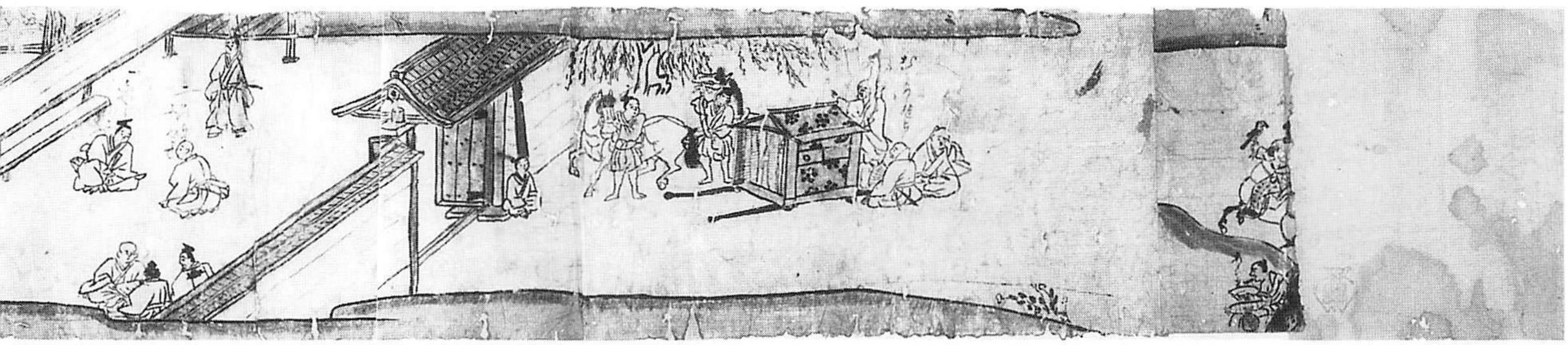


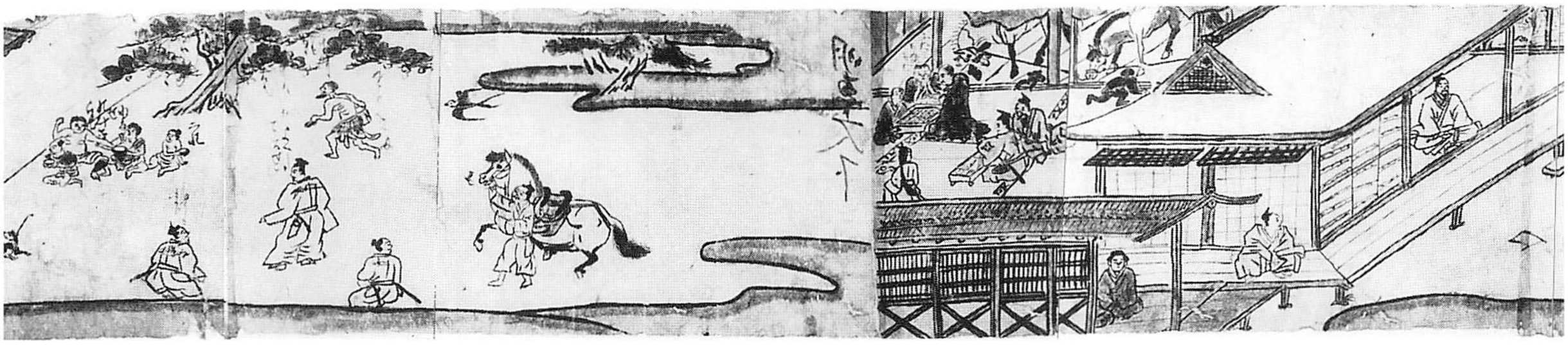
31弘法大師行状画図　（四二八）
紙本墨画　一枚　二七四×二三三
元禄十五年（一七〇二）

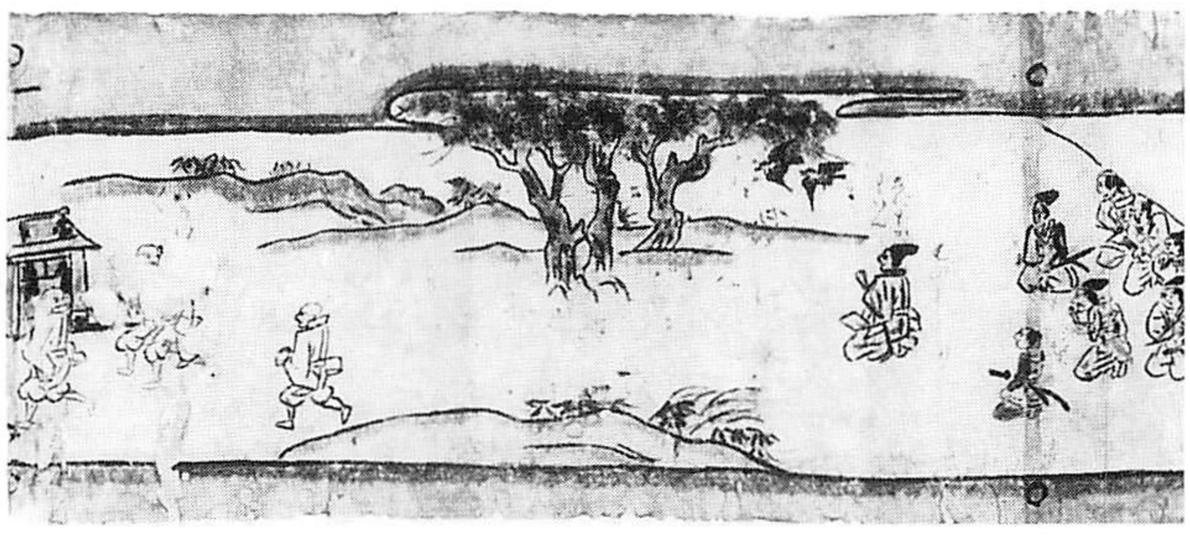
（右上墨書）弘法行状畫圖／此類八枚極遣／住吉法眼慶忍筆／絹地」
（左下墨書）元禄十五年二月十二日／森村五郎兵衛取次／札一枚遣／弘法大師行状畫八枚住吉法眼慶忍筆」

［画中色指示］
（左上屋台）クロ／カナ物／金」クロ」朱」ミナ金」









33明恵上人絵　（二七〇）

紙本墨画淡彩　一巻　一八三×二九五四

（第一紙左下朱文鼎印）藤原／光武」

十紙継

（第二紙左下墨書）あらす」

（第三紙中上墨書）むまをそら／たわい」

（第四紙中上墨書）二われらの／ふしやう／て」一しやう／人のこ／ふ」

（第五紙左上墨書）ふたミ／ちを／ちに」

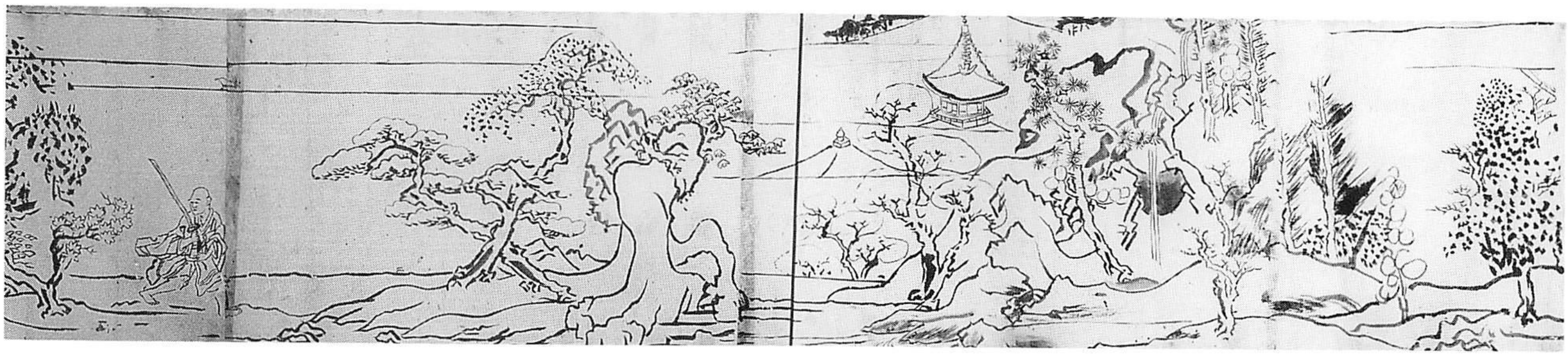
（第六紙裏右墨書）明恵上人下」

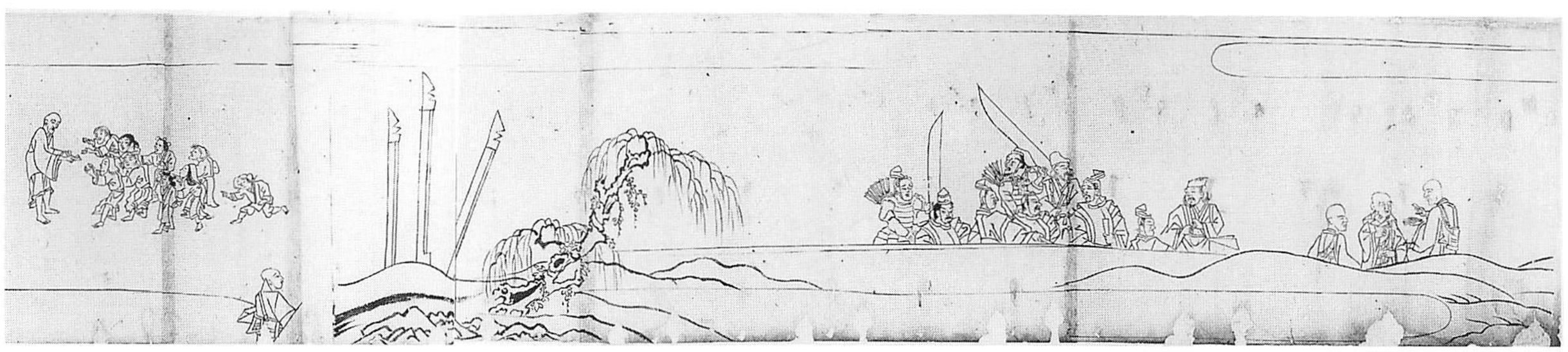
（第六紙左墨書）をりやくまハ」よくし／てくハせい」

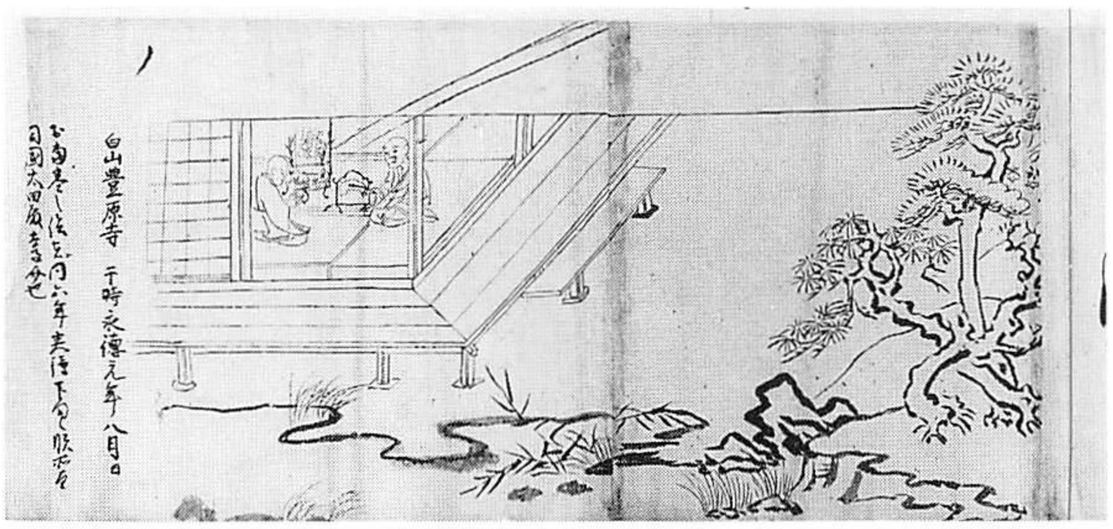
（第七紙墨書）かしこ／まり／候」二れ」ゆる／せ」八千を／くれ」まいは／い」こい、、」

（第八紙墨書）うしろ／いく」こほす／な」

（第十紙墨書）むのし、り」なにもか／もいん」いそけ／、、」

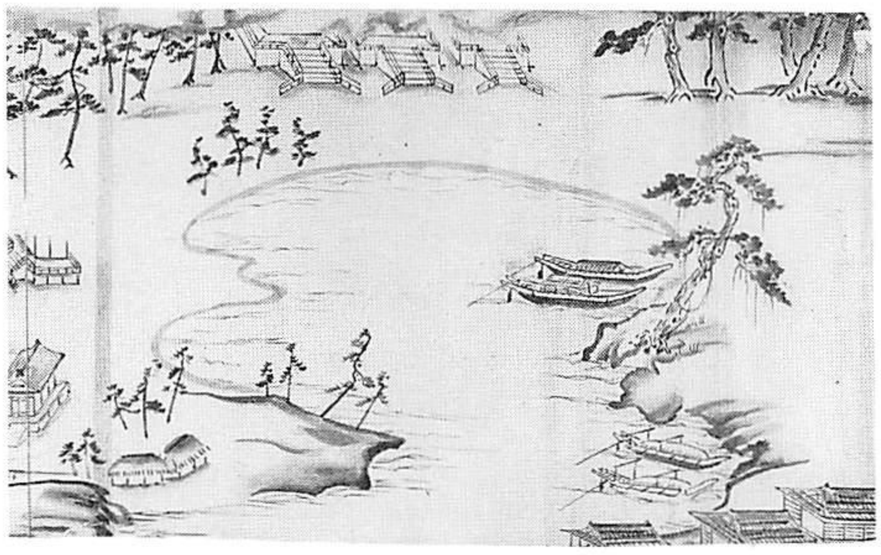


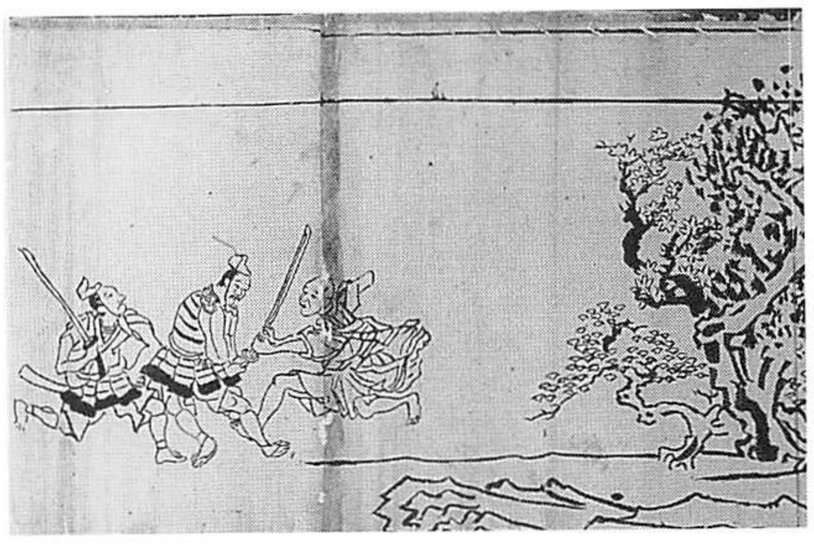




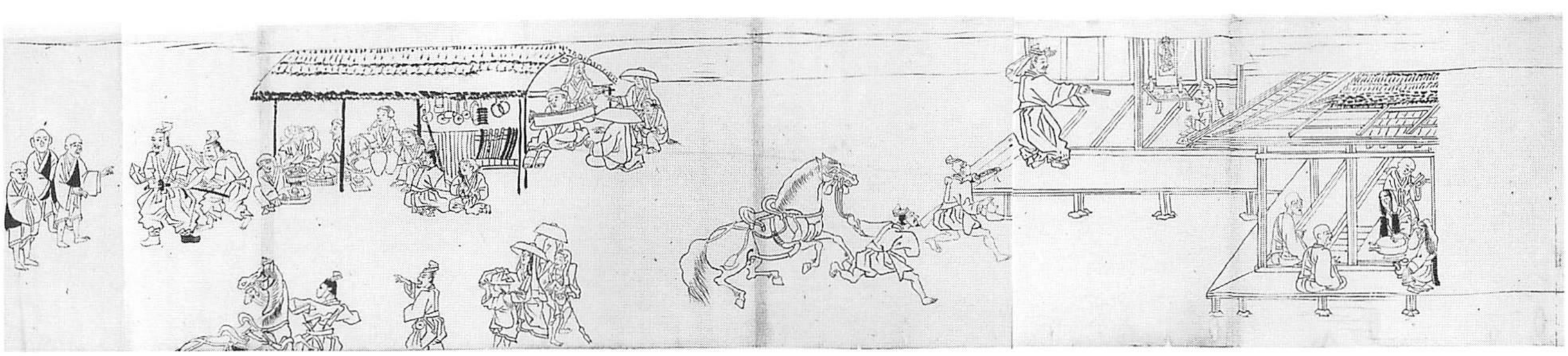
35遊行上人縁起絵　（二七四）
紙本墨画　一巻　二七五×三二一九
十紙継、第一・三紙に継紙あり、巻一・五・八の抜写

（第十紙墨書）白山豊原寺　于時永徳元年八月日」於當巻之繪は同六年夾鐘下旬之候所望／同國太田殿奉存介也」

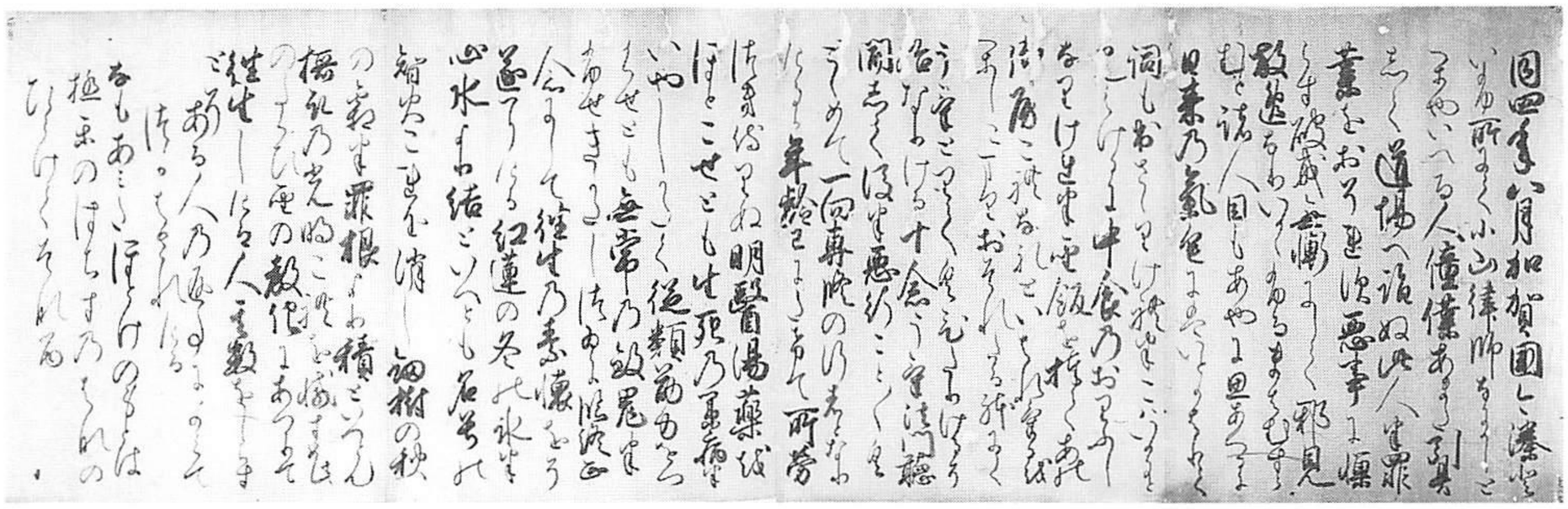




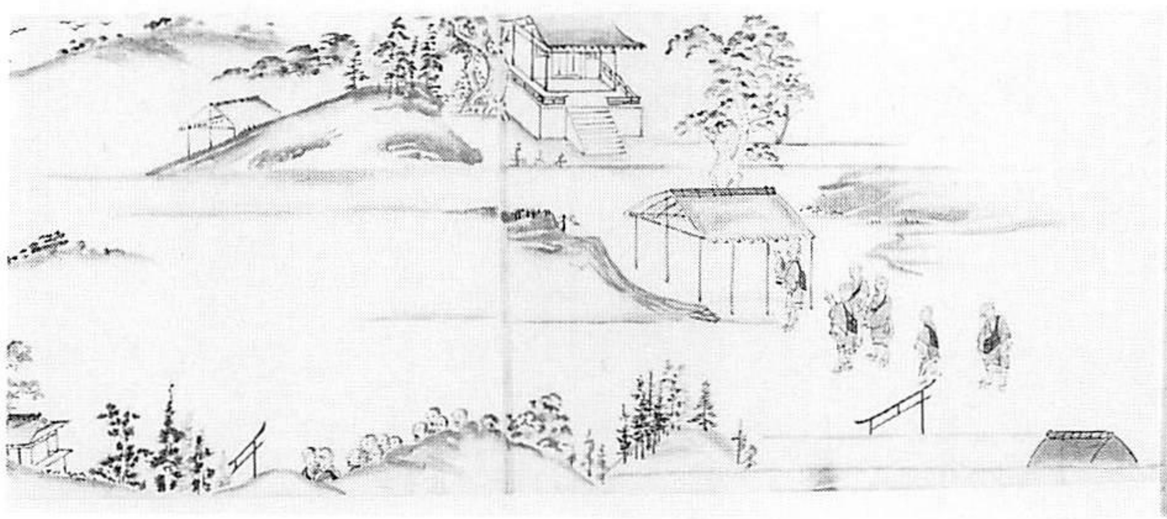
34遊行上人縁起絵　（四一八）
紙本墨画　一巻　二九七×一六二一
五紙継、第四・五紙に継紙あり、巻一の抜写

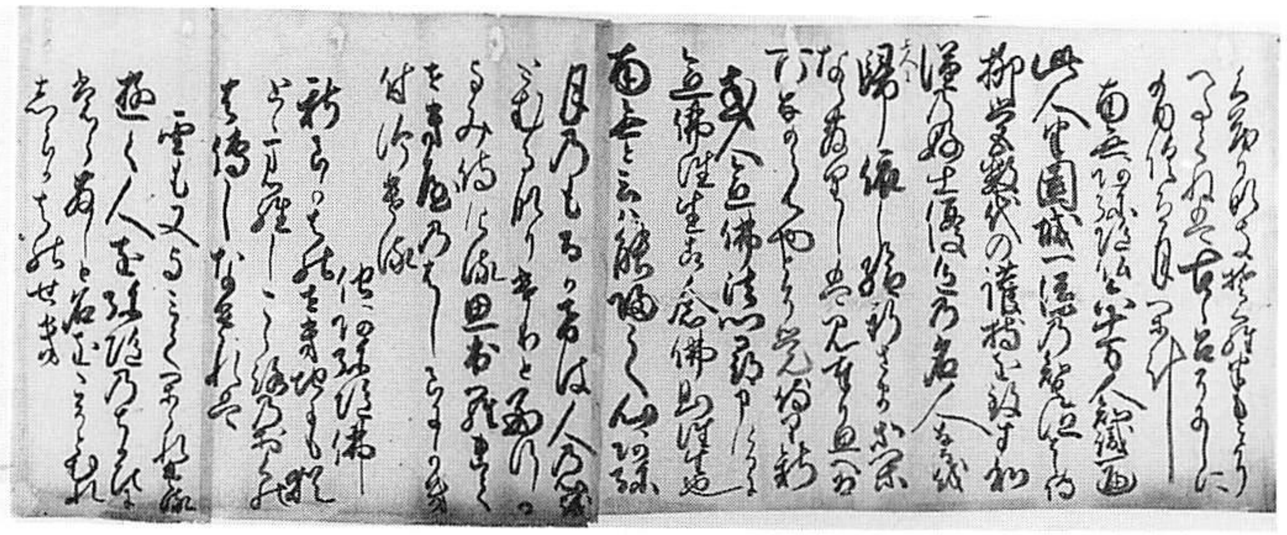


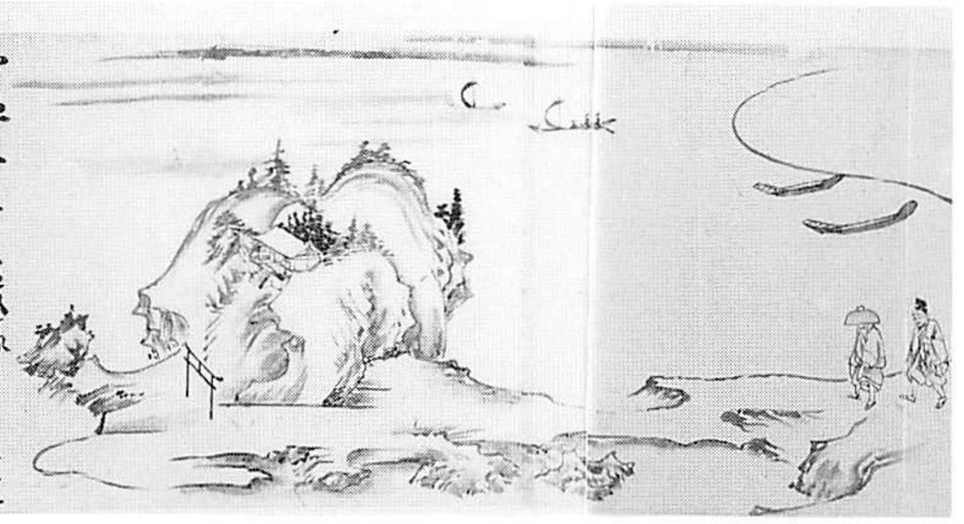
45遊行上人縁起絵詞断簡　（四二六―四）
紙本墨書　一枚　三〇二×九四五
巻五の第四段
［本文別録］

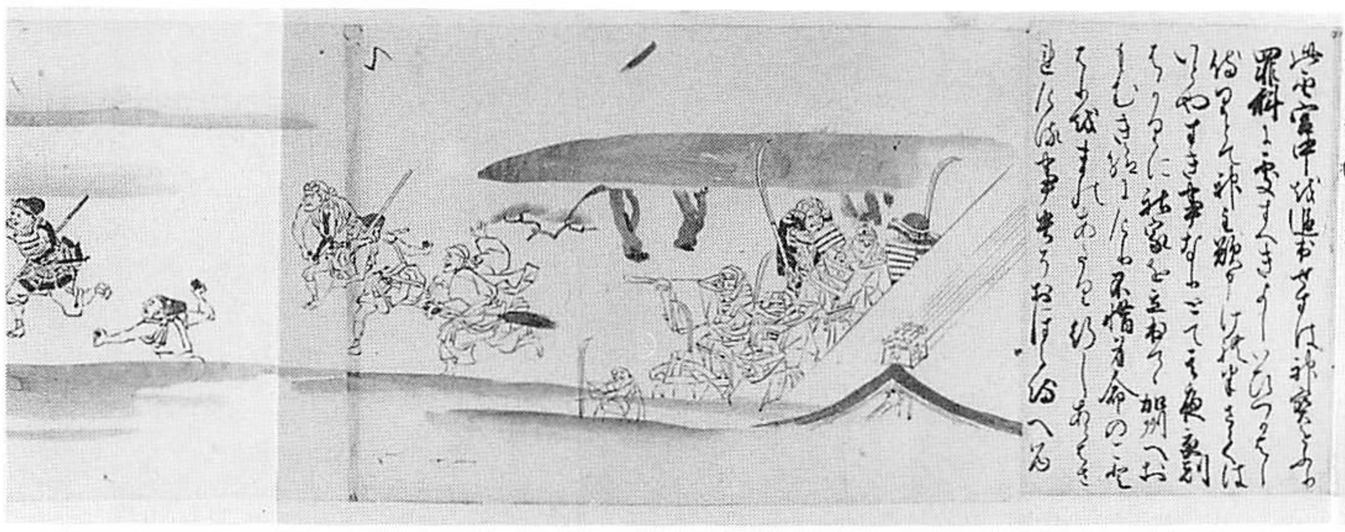


36遊行上人縁起絵　（二八二）
紙本墨画　一巻　二八一×一四九五
延宝五年（一六七七）
四紙継、巻二の抜写
（第四紙左墨書）延寶五年八月中旬写」三右衛門写」





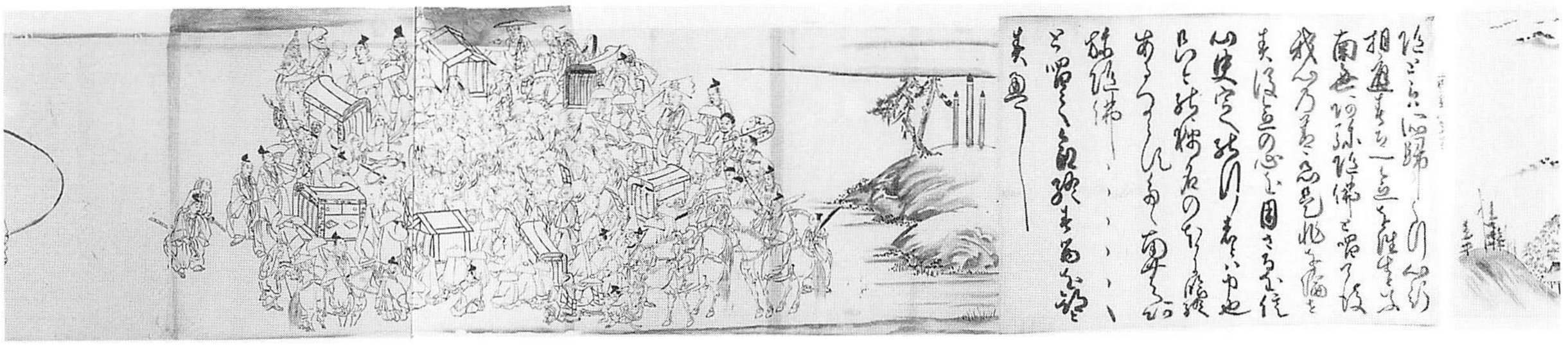


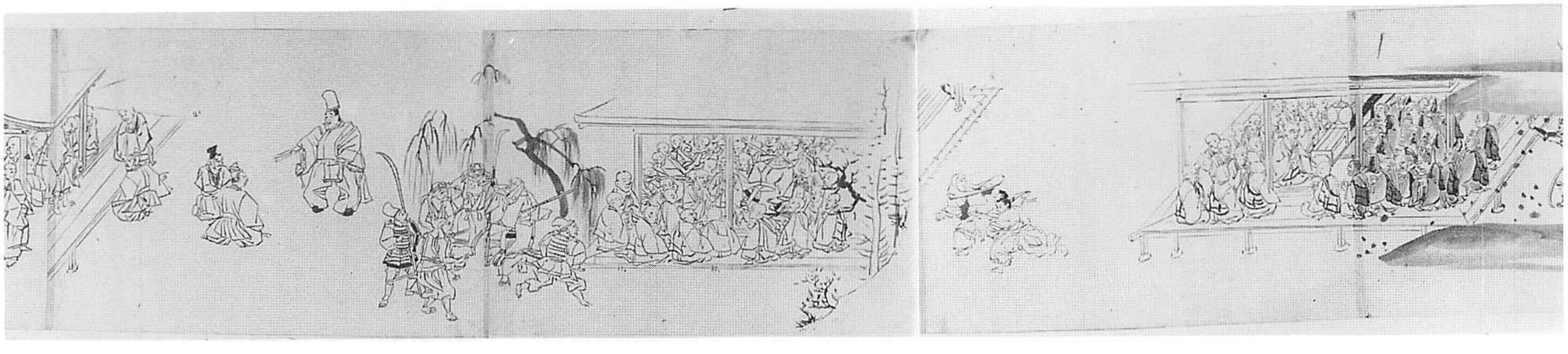


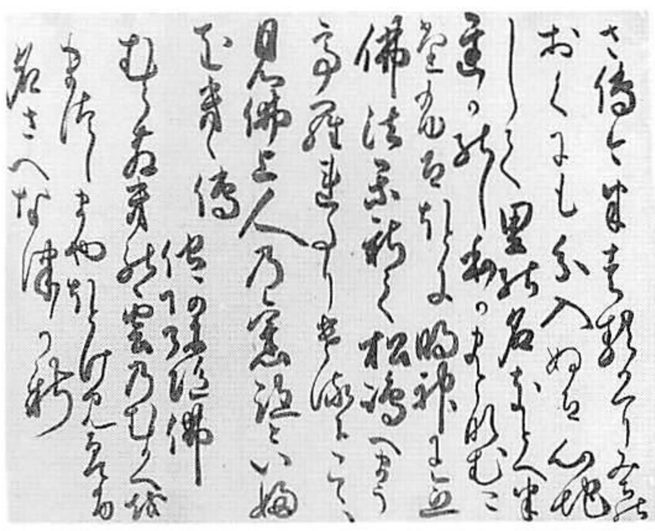
37遊行上人縁起絵
紙本墨画　一巻　三〇四×九二三四
延宝五年（一六七七）
二七紙継、第八紙に継紙あり、巻二・五・六の抜写

［本文別録］
（第一紙墨書）三」
（第二紙墨書）二」
（第三紙墨書）三」
（第五紙墨書）延寛五年八月中旬写」
（第六紙墨書）四」
（第一〇紙墨書）△」△」
（第一一紙墨書）△」△」>」>」
（第一二紙墨書）<」<」此詞書状見院ノ由」）」
（第一三紙墨書）（」（」
（第一四紙墨書）×」
（第一五紙墨書）×」〇〇」
（第一六紙墨書）〇〇」
（第一七紙墨書）本ノをく如此つ、カヌヲつク」始」一」△△」
（第一八紙墨書）二」△△△」
（第一九紙墨書）三」
（第二〇紙墨書）四」
（第二一紙墨書）一め」
（第二二紙墨書）二め」
（第二三紙墨書）三め」
（第二四紙墨書）四め」
（第二五紙墨書）五め」
（第二六紙墨書）六め」
（第二七紙墨書）七め」

［画中色指示］
（第七紙中人物）クロコク」
（第八紙中人物）コク、ロ」クロ」
（第二七紙月）スミグマ」



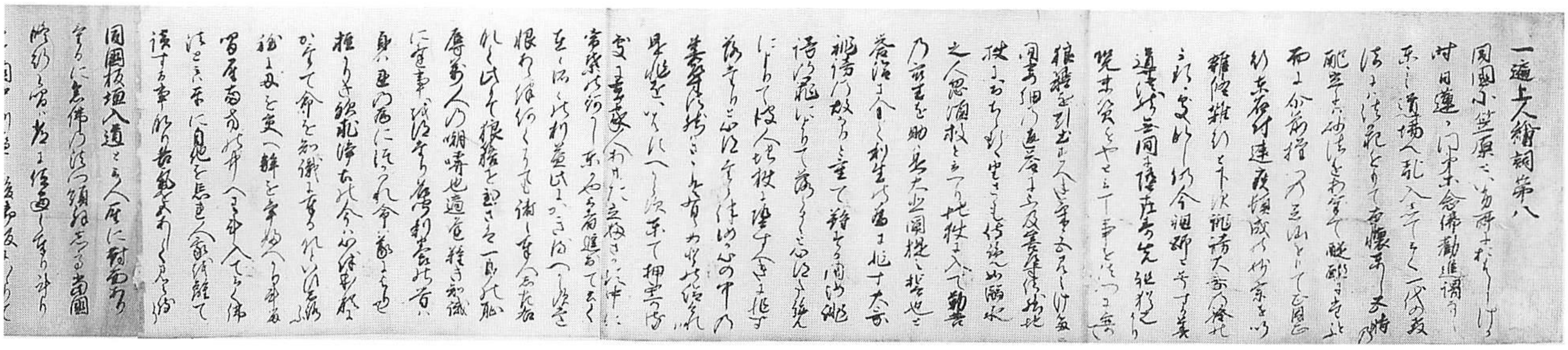




42遊行上人縁起絵詞断簡　（四二六―一）
紙本墨書　一枚　三〇三×二四〇
巻二の第二段
［本文別録］

43遊行上人縁起絵詞断簡　（四二六―二）
紙本墨書　一枚　二八〇×三五三
巻二の第三段
［本文別録］

44遊行上人縁起絵詞断簡　（四二六―三）
紙本墨書　一枚　二八九×八三〇
巻二の第四段
［本文別録］



一遍上人縁起絵第八

国国小笠原之荘領主遵阿弥陀仏帰依之事

時日遍之門弟不念仏勧進調之

来之道場へ乱入之云々依之一代之教法之為仏恩日夜御修行之所

能登守教時為聖化被召寄之処教時

和上分前掛之入道被成下御奉書之

雑掌難治之下状能登入道殿之後家尼

謀書之由令申之間被召決之処

証拠分明之上者不及是非之旨

御返事之間雑掌重訴之間

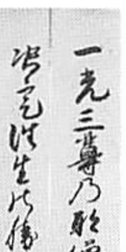
御奉書之内一事以上無

根拠之由被仰下之間

国国板垣入道殿之入国に対面

之ために無体乱入領地之間

時衆之宿坊ニ令打入之間



越前国南庄菊俣 堺吉継 賀茂北 太神宮大

日如来ト高跡仲哀天皇ヲ崇敬也奉重

九年当国一社向女ニ託シ何長ニ国

豊浦宮ニシテ崩御治国神功皇后摂政

ヲ給ハリ御遊ニ三韓ヲ責平テ御帰

還ノ後十三年ヲ経テ一本ニ余迴ラセ

人ヲモ七十余代ノ崇敬ヲ事新

陰陽ノ神壇ヲ祐テ花表鳥居ヲ

宮社ノ儀専ニ国繁栄ノ儀ヲ祈テ擁

幸ヒ鏡護ノ栄礼奉納其社ノ礼

歓作年旧ヲ朋新善賞ヲ尊勤給

神宮祈請拝殿拝ヲ奉ニ七日参

所ヲ建ヲ鐘ヲ懸ヲ海濱ノ人倫ヲ

道俗貴賤如ク船ヲ艤ヲ船ヲ出シ面ヲ

神ヲ宝殿ヲ荘厳ヲ船ヲ出シ面ヲ

発給ヒ方角ヲ差ヲ鏡ヲ賜ヲ所

ノ名所ト北風ノ事ヲヤ

ヲ詠ヒ神宝ヲ

等約束ノ

為ニ御宝殿ヲ

主殿ノ為ニ

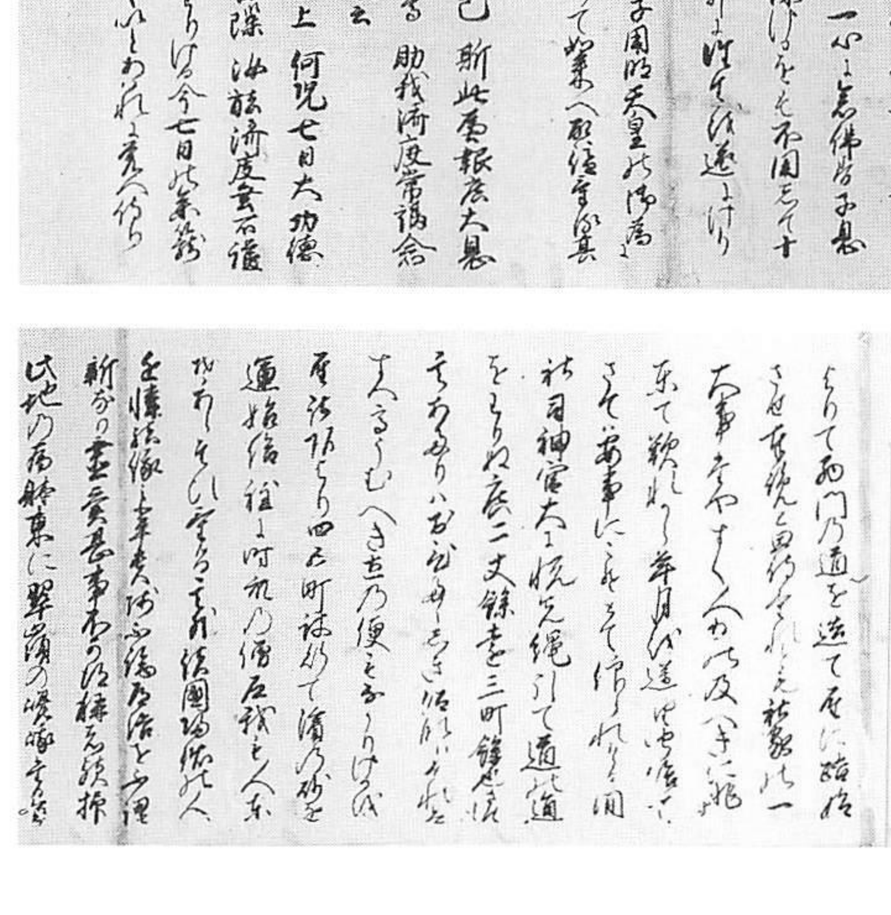
甲斐守ヘ

治テ面目

水食ヲ留テ一

視類荒国練

一日ト定テ



事ヲ枝葉漏ヲ

七日満ル為

調ル

七日勝揚功徳已 所此奉報大恩

仰願本師福地尊 助我衆度常随会

如来御返報云

一日精揚猶無上 何況七日大功徳

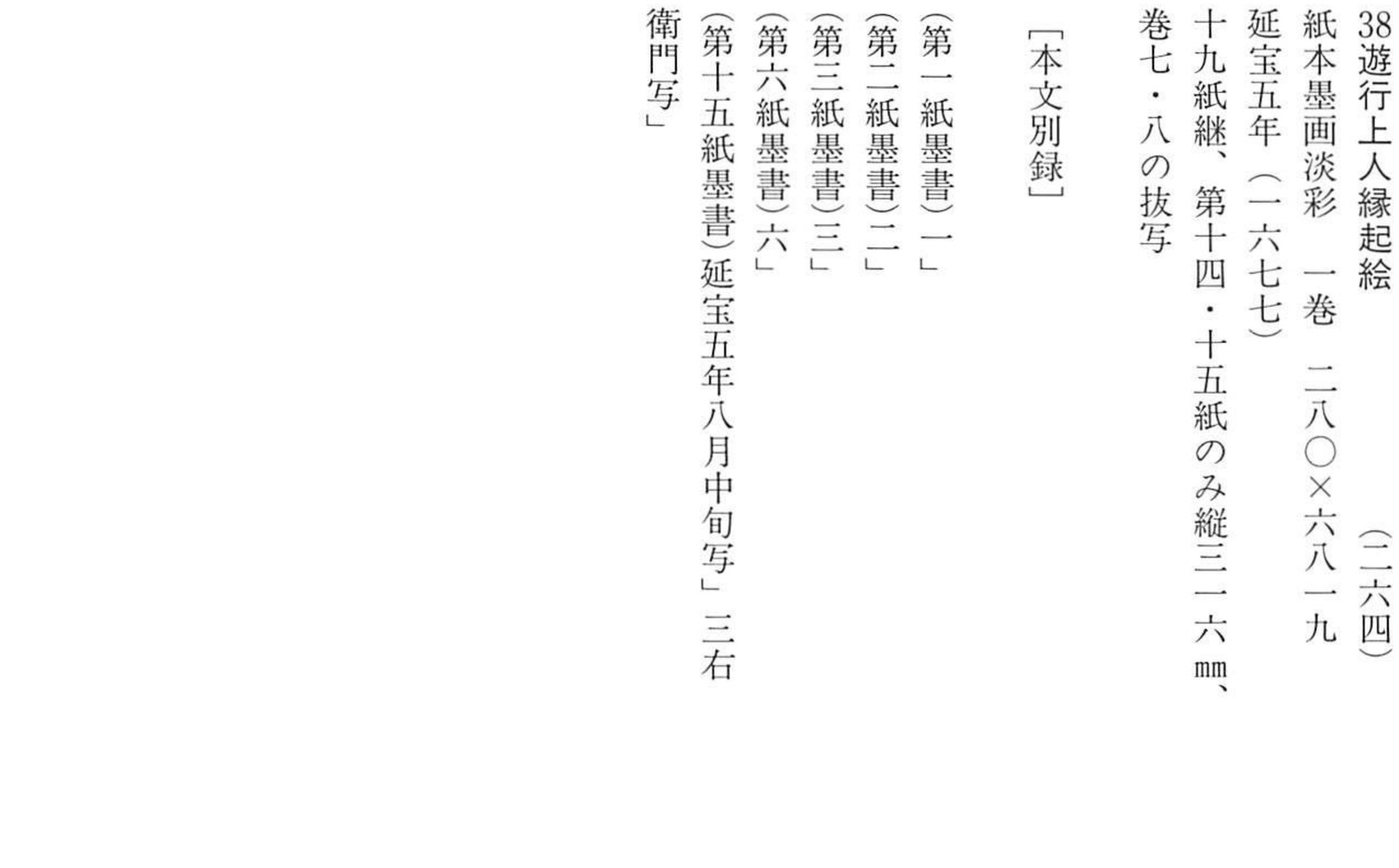
我等衆生心無際 決断済度会有縁

ヲモヘハヲノレヲノレカ

ヲ上ニ

新ノ

云ヒ



（二六四）

38遊行上人縁起絵　紙本墨画淡彩　一巻　二八〇×六八一九

延宝五年（一六七七）

十九紙継、第十四・十五紙のみ縦三一六㎜、

巻七・八の抜写

［本文別録］

（第一紙墨書）一」

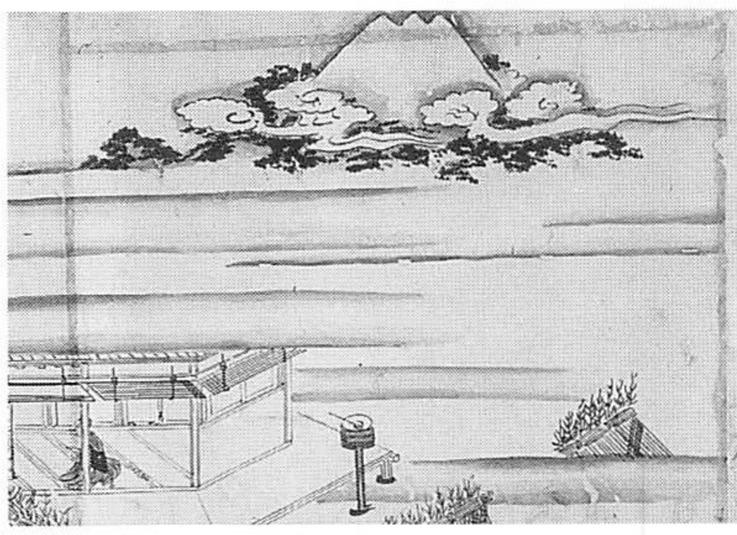
（第二紙墨書）二」

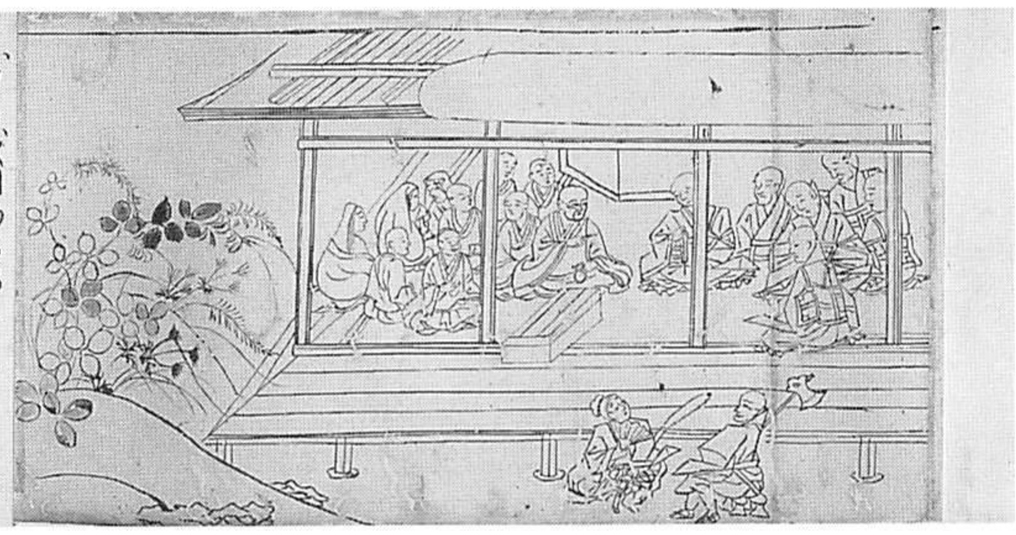
（第三紙墨書）三」

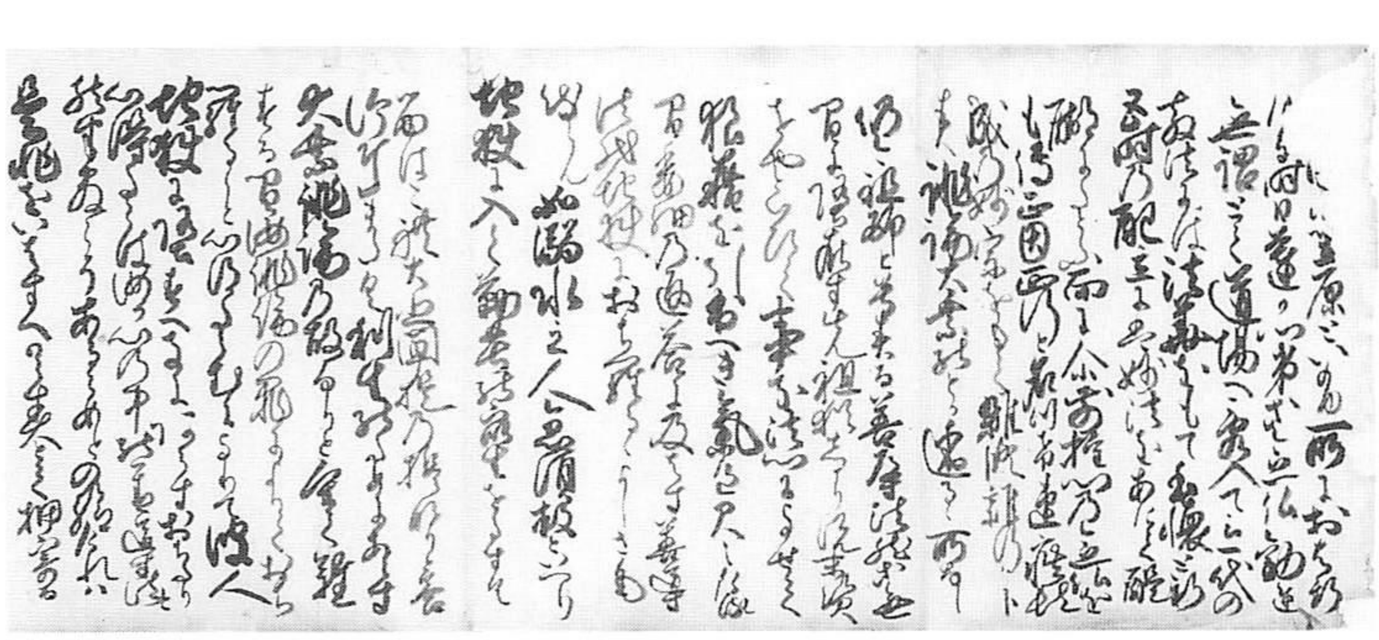
（第六紙墨書）六」

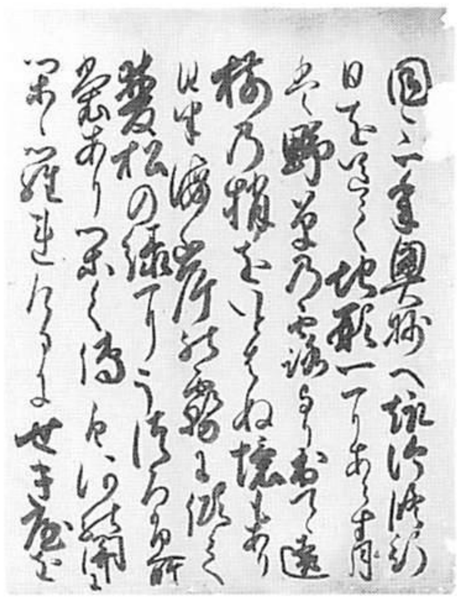
（第十五紙墨書）延宝五年八月中旬写」三右

衛門写」





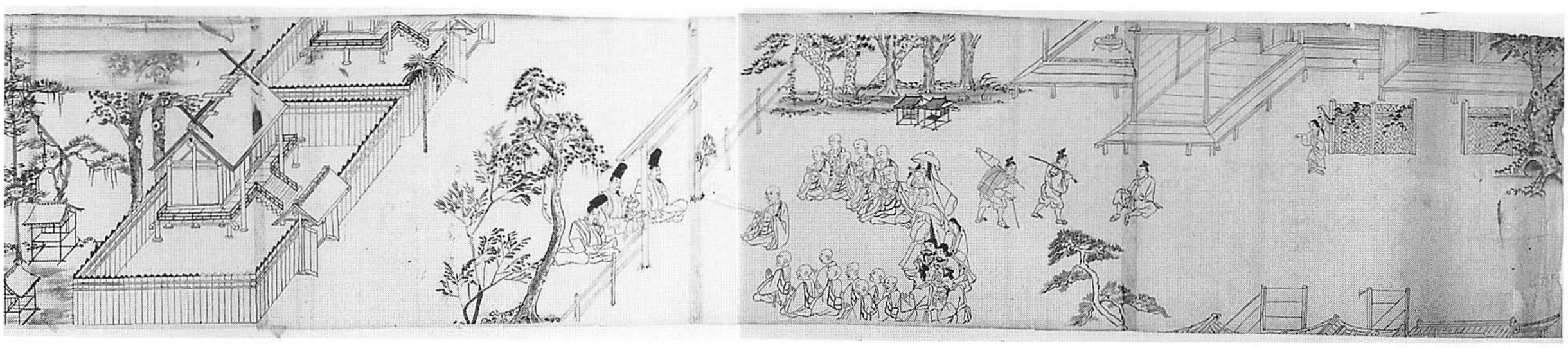




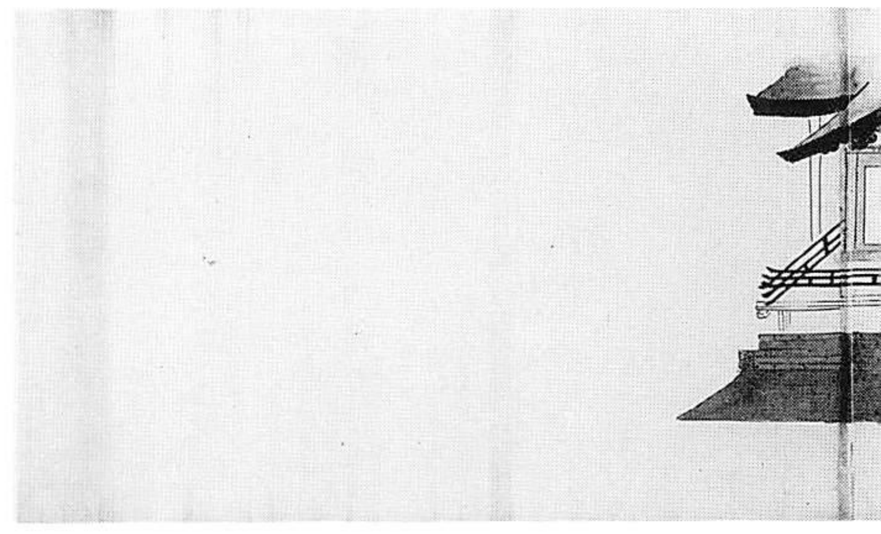
46遊行上人縁起絵詞断簡　（四二六―五）
紙本墨書　一枚　三〇九×七一〇
巻八の第一段
［本文別録］

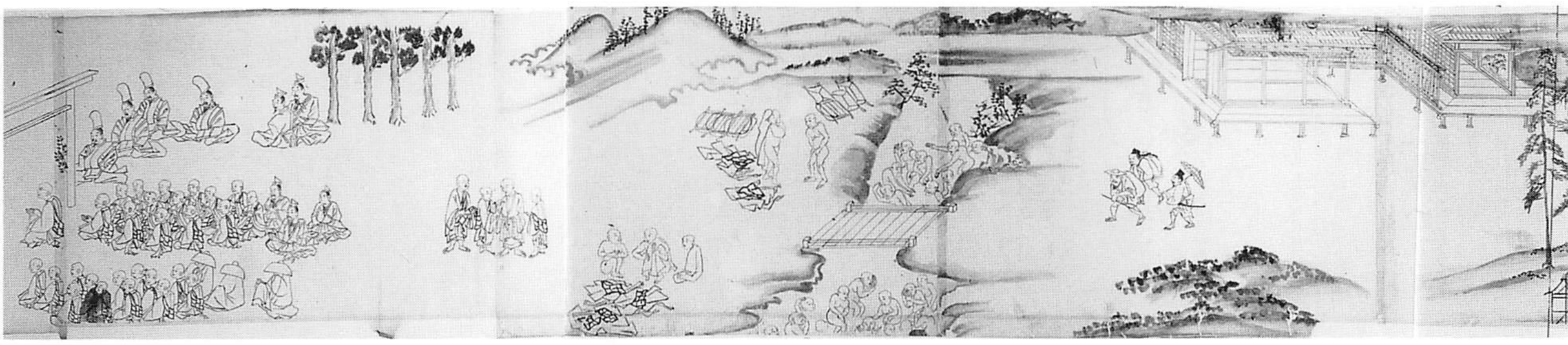
47遊行上人縁起絵詞断簡　（四二六―六）
紙本墨書　一枚　三〇二×二二八
巻八の第二段
［本文別録］

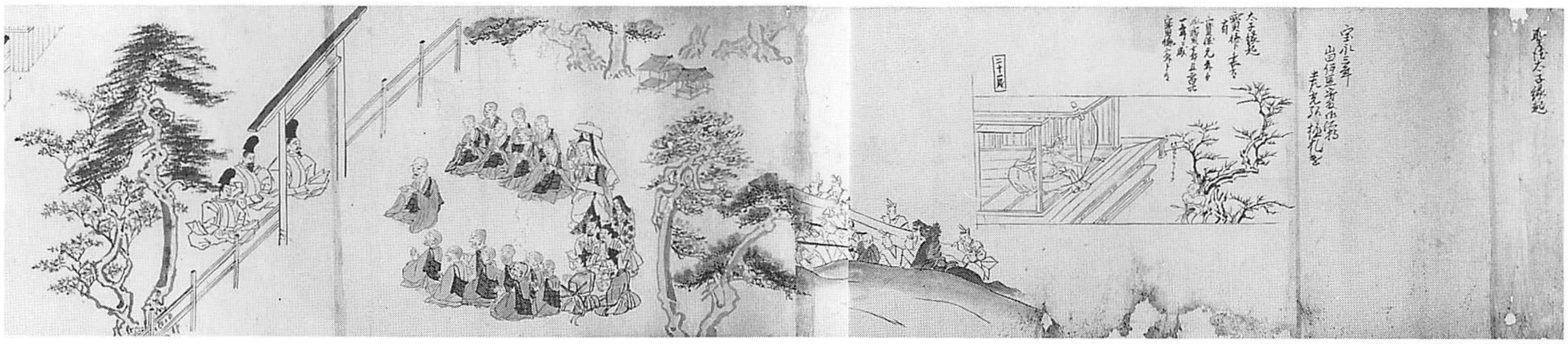
39遊行上人縁起絵　（四二〇）
紙本墨画淡彩　一巻　二八八×一八三〇
四紙継、巻八の抜写

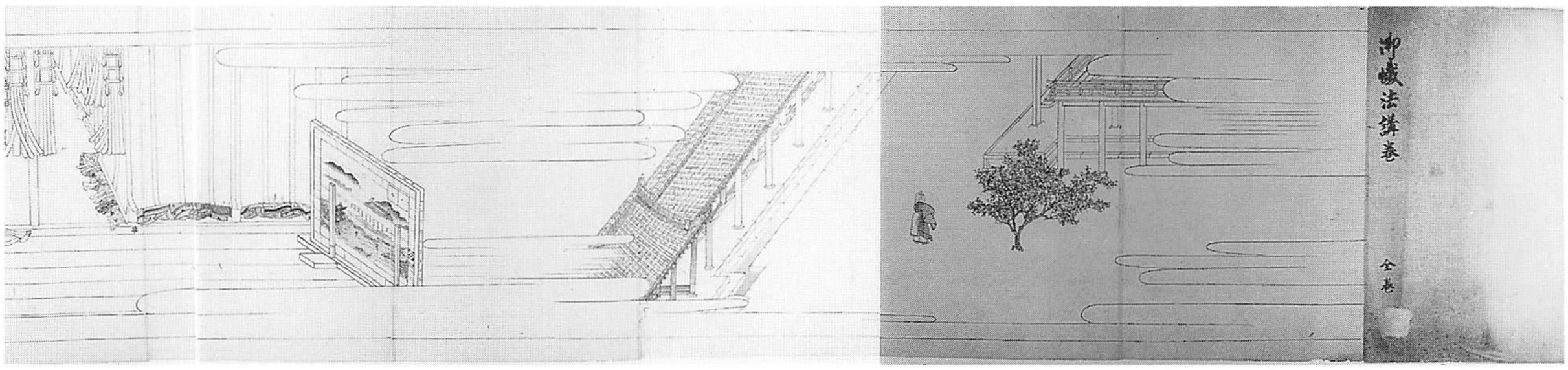


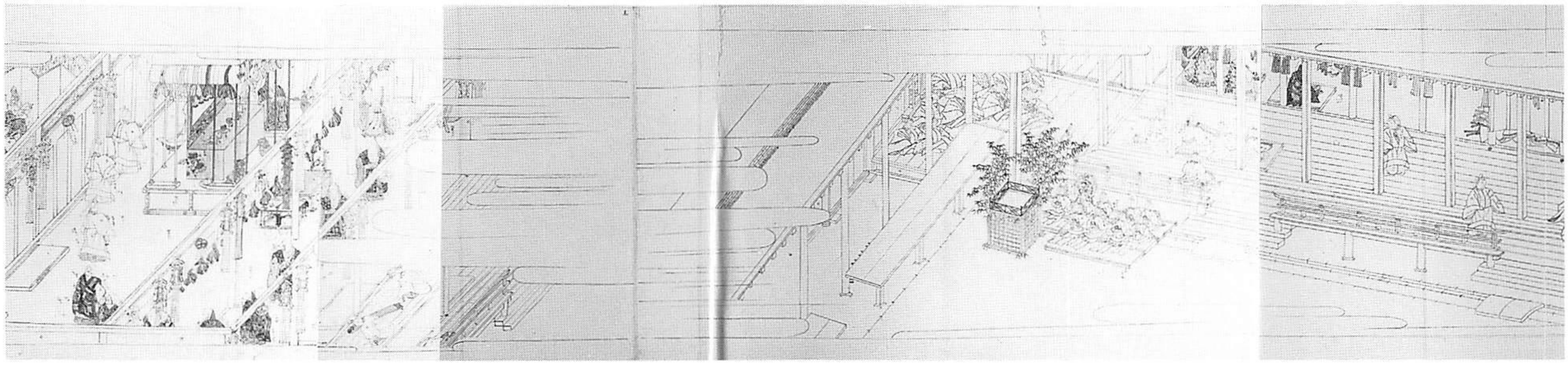
40遊行上人縁起絵　（四二四）
紙本墨画　一巻　二九五×四三〇六
十一紙継、第五・六紙に継紙あり、巻九の抜写

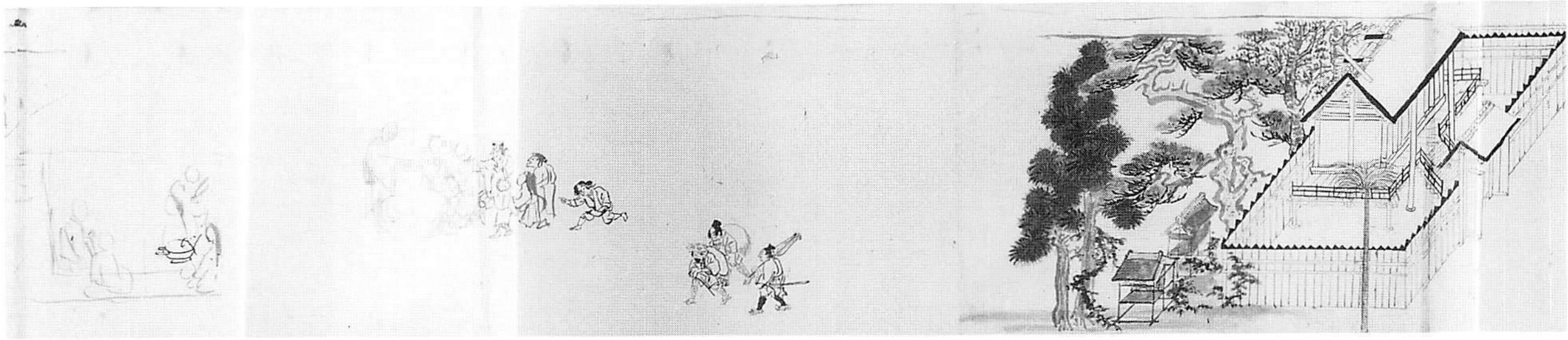




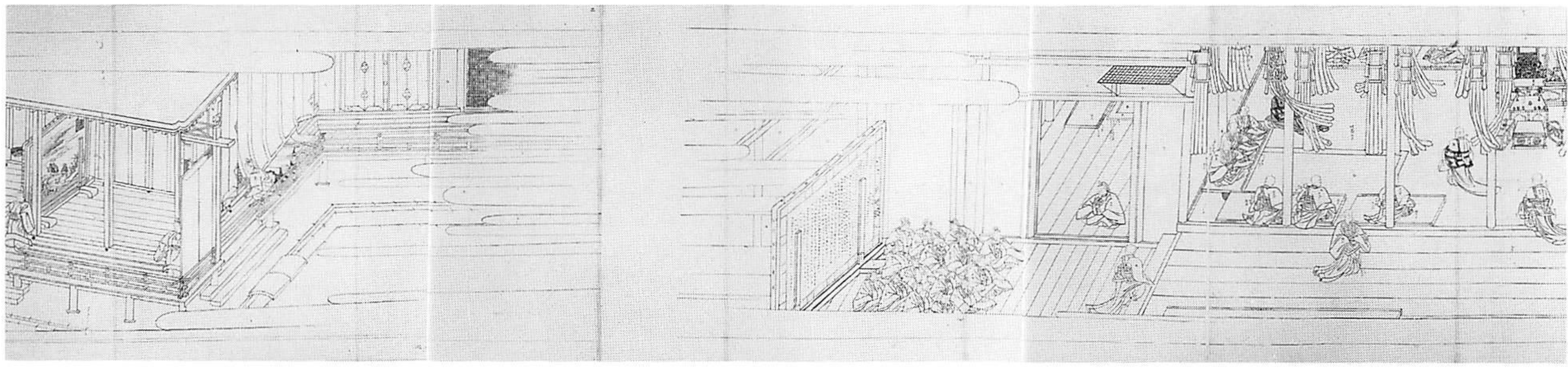

聖徳太子絵巻
宝永三年
二十段


仲哀法講巻
全巻





41遊行上人縁起絵　（二六六―一）
紙本墨画著彩　一巻　二八〇×三一七八
延宝七年（一六七九）宝永三年（一七〇三）
但し第一・二紙は聖徳太子絵伝（長さ六四一㎜）、第三～九紙が遊行上人縁起（長さ三八一九㎜）、後者は巻一・九の抜写
（第一紙裏右墨書）聖徳太子縁起」
（第一紙左墨書）宝永三年／山田伊豆守殿所持／土佐光弘極札遣」
（第二紙右上墨書）太子縁起／寶徳ト裏書ニ有」寶徳元年より延寶七年迄二百卅一年ニ成寶徳二年ト有」此間トウノケテ」二十一歳」



48御懺法講絵巻　（二六三）
紙本墨画淡彩　一巻　四〇二×五九二七
二十四紙継
（第一紙端裏墨書）御懺法講巻　全巻」
（第二紙右上墨書）一」
（第十二紙右上墨書）二」
（第十九紙右上墨書）三」
（第十九紙左上墨書）柱」

［画中色指示］
（第二十紙右上部）地黄土ク」朱」白／黄土ク〈スミケシ〉」白」白地」菊朱紫」朱」アサキ」ウスズミ／コン／カケル」ムラ／文共色」ムラ」
（第二十紙左上部）白」アカ／六／ク／グン／朱／六／朱／六／白六」赤」ムラ」ウラ／ムラ」赤地」ウスムラ」白」ムラ」スミ地／コン」チャ」クロ」金」六」キン」金」クロ」
（第二十紙右下）白」ムラ」クロ」白」
（第二十紙左下）朱」白」地ウス／ムラ／サキ」キク」ムラ」白」白地」地ヲウドク」朱」朱」朱」朱」白」コン」朱」朱」文コン」中ズミ」ムラ」ムラ」

絵巻粉本（二）本文釈文

＊本巻収録の絵巻粉本中、テキストが筆写されたもの十三点に対しては、目録本編に割愛したので、ここに全て翻刻した。

〈目次〉

10・絵師草紙 …… 66
16・天神縁起絵 …… 67
20・三韓退治物語絵巻詞 …… 68
24・片袖縁起絵巻 …… 70
25・羅什三蔵絵 …… 70
37・遊行上人縁起絵 …… 72
38・遊行上人縁起絵 …… 73
42・遊行上人縁起絵詞断簡 …… 75
43・遊行上人縁起絵詞断簡 …… 76
44・遊行上人縁起絵詞断簡 …… 76
45・遊行上人縁起絵詞断簡 …… 76
46・遊行上人縁起絵詞断簡 …… 77
47・遊行上人縁起絵詞断簡 …… 77
（頁）

10・絵師草紙

朝恩なれハかたしけなく悦
事かきりなし此よし家に
かへりてかたりけれハ妻子眷属
ともはしりつとひていまた未
到の土貢乃納所をもとめし
たゝむるありさまわらひのゝしる
こえ〳〵天地をひゝかして物を
ともきこえ侍らすそありし
さるほとに老母をハしめとして
うとからぬ輩と賀酒を
のみけるかはやゑいぬれハ
乱舞一聲におよふまゝに
次第にのみしかりつゝ
酒又とりよせけるか使も
ゑいぬれハゑんのやふれに
あしを入てたうれけれは
酒をもこほしぬ使しかねて
水を入くわへていたしたり
けれとも皆ゑいぬる心地
には善悪をわきまへすして
其日はあしたよりのみく

「　　（第二紙）

「　　（第三紙）

はし　あな知し朝先さほいけ　と　てこ此ひ寺行さ
はに忘な夫も従庭たさハハ第お　文雁海下次　ら
日ハいそき人こしらへつゝ田舎へ
つかハしぬさるほとに雲煙をしのく
路も月日すくれハ心もとなかりつる
の使も帰り来り先うれしくて
をひらき見るに所のありさまと
土　イ
ほしくて土民の武威をかうする次
先使かとりて年貢のなき事
カリ
かりをかきてこの外ハ何事も見え
りけれハ大方正躰なきにいよ〳〵煙
え行く家のありさま人の跡なき
のけしきなに、命のかゝるへきなれハ
類もちりゆきてをのつからとゝまる
のハ子をおもふ老母の悲にまとへる
をしたふ賤婦の別をなけくなと
れハミな飢をしのひまつしきを
て残ゐたりこのともからを見る
めもくるゝ心のうちたゝをし
からられたり

「　　（第四紙）

「　　（第十二紙）

「　　（第十三紙）

「　　（第十八紙）

「　　（第十九紙）

少年のむかしより強仕のいま
にをよふまてねてもさめても
やすむ事なししかれとも稽
古日をかさね奉公年をへぬる
うへ　舊院他異に召仕侍りし
かハ　君もいかてかすてさせ給ふ
へきに適の　朝恩ゆえなくめされ
ぬる事面目をうしなうのミに
あらす且は宮古にあとをとゝめ
かたく侍りさせるつみなき
身乃沈ハてなハすてに一流の
●亡となりなんこそ不便なれと
まめやかに悲涙をなかしつゝ
申けれは上卿いそき　奏給け
る　勅答にはあハれみおほしめされ
けるにや本の伊州を還給へき
よしうけ給るこそ先畏おほえしか
其時重て申入けるハ此所あま
りにはるかなるうへ又興行の
沙汰も身のちからなくてハ道ゆき
かたきあひた當時此地に命をか
けて奉公しかたく侍りをなしくハ
いますこしちかき小所に立替て
下されなんやとてさもありぬへき
所々あまたしるしてまいらせけれハ
御案案あるへしとハかりうけ給ハり
てすきにし秋のすへつかたより
春もすてになかはになりぬるにや
涙
愁の涙も猶いろそふ心地すれハ
しつみはてぬるにこそと心ほそき
ま、に榮花なき身に盛者
ら
必衰もしられ又妻子珍寶も
この世のちの世のともにあらすとき、し
かハ心つよくもおもひなりてさても
はつへきならハあらまほしくて
かまえて三密の法水をくみて
鎭に五智のいた、きに灌へし
とて一人の子をハ真言修行の
霊場をたつねてつかハしをきぬ
か歳
さるほとにうかりし歳ハくれて
あらたまの春にもなりぬれは

」（第二十紙）

」（第二十一紙）

」（第二十二紙）

」（第二十三紙）

いよ〳〵風もをりしり浪も時
ありてをさまれる　御代ハゆく
すへひさしくさかゆる國のすめ
るうらみをひとりのこすへきに
あ
あらねハ身つから鳥のあとを
つけつつかすかに思ふこゝろを
のふといへとも我道のわさなれハ
世
まことのありさまを後索に
詞
あらはして同もらし申す
なるへし

」（第二十四紙）

」（第二十五紙）

」（第二紙）

さてもしへいのおと、おもわれけるハ行儀もしらぬ
人にてくきやう殿上人になりあまつさへわれを
はをしこめつる事の口をしさよとおほしめして
わか身ハ大うちへしゆつしし給ひてらうとうともに
仰つけてしのひてたいりへ火をつけれは色々のけふり
となり一てんものらすあさましかりし事共
なりくわうていハおめ〳〵と御車にめされ二てう
の大ちへいてさせたまふ其時しへいのおと、
御車のなかへにとりつきて申されけるハ火つけ
申にすかハらの大しんのしわさとおほせは御ゆる
されをかふむりてをしよせくひをきりこんと
申されけれはきこしめしてすかハらの大しんハ

三韓退治物語

上一

昔神功皇后文神武之徳を以て三韓
をうちしたかへんとし給ふ時化人来り
て皇后に奏す寶國を得たまハん
にハ吾をまつり給へかならす守りたて
まつらむ皇后あやしミいつれ乃神に
とその名をとひ給へハ吾ハ日向國橘
乃御門の水底に筒男乃神といひ
てさり給

二

皇后郡臣に勅して齋宮を造
り神田をさためて溝をほり川
水を神田にまかせんとしたまひし
に迹驚岡に大磐ふさかりて水通
ことをえす皇后武うち乃宿祢を
めして劔鏡をさゝけて神祇を
いのり給

三

神乃めくみにかなひまし〳〵
ぬれは俄に雨ふり風吹て雷電お
ちて磐をこと〳〵く蹴さきけれは
水則神乃田に通り稲葉ミとりの
色をましぬ

四

皇后諸〳〵乃神達にミことのりし
給により鹿島にあつまり給しかれ
とも阿度目乃磯良ひとりまいらす
神達怪しみ庭火たき海上に

（第一紙）

舞臺を構て青和幣白和幣を
榊の枝にかけ奈良舞をなし給
磯良いてきたるその皃を御覧するに
汨螺かきの貝藻に住虫手足身に
とりつきて人乃形とも見えすなに
故その皃に成しぞ磯良奏し
けるハ吾滄海乃鱗にましわりて
久しく住侍る間此皃にてやんこと
なき神遊に参らんはつかしさに
いまゝておそなわり侍を曳々融々たる
律雅乃御声に愧をもわすれて
参り侍則磯良を龍宮乃御使にて
干珠滿珠をめされぬ龍王勅に
随ひ兩乃珠を奉り給

（第五紙）

五

武内宿祢吾瓮乃海人烏摩呂
を使ハして國いつれ乃かたにある
をみせしむ帰り来り申國みつけ
侍らすまた磯鹿乃海人名草を
つかハしてミせしむ

六

名草帰りていぬひの方に山あり
雲を帯してよこしまにわたれりこの
國にて侍らん皇后武内宿祢に勅し
て國々乃軍士をめし舩舶をあ
つめ給ひ火前國松浦郡玉嶋里小川乃
側にて食進たてまつる皇后針を
つけて釣とし裳乃いとをぬきて
釣乃つくりをにし食をゑとして
河中乃石にのほりつりをなけて
宣ふ朕財の國をやすく得ハ河の
魚つり給へ則年魚をつり希敷
物なりと宣ふ臣ミな奏す皇后財
乃國を得給ハん事功あらん

（第二紙）

七

皇后群臣ニ勅して暫ますらをの
貌になり強ちに雄略し上ハ

（第三紙）

神乃霊をたのミ下ハ郡臣乃助に
よりて功なさんもしなさずは
獨 罪あり郡臣ミな奏す皇后
今天下乃ためにはかります所ハ宗
廟社禝をやすくせんためなりいかて
罪臣まておよふへきとつゝしみ奏
しあく

八

皇后産胎にてよろひを召れん
にかなハす武内宿祢脇立を作り
てたてまつる皇后石を御腰に
はさみいのり給事おハりてかへらむ
時うまれ給へと

下一

皇后 自らほこをとり三軍に勅
して宣ふ敵軍士にむかふ時金
をうつ時ハすゝミ大鼓をうたハ退
旌旗まがひミたれん時士卒とも
整 すして財をむさほり内かへり
見せはかならす敵のためにとらハれ
む敵すこしくともあなづりそ敵大
強とも目おぢそおかし暴をハゆ
るすな自くたらんをハころす事
なかれ戦に功あらばたまものあら
ん背走ハ自 罪すへし軍士御
勅をつゝしみうけたまハる

二

冬十月和彌乃津より御舩に
めして肥前國乃海上にて大き
なる牛浪乃中よりいてきて御舩
を覆さんとする軍人おとろきさ
ハく所神老翁に化して軍
人乃舟におり牛乃二の角をとり
をし轉し給ぬそれより所の名を
牛まろはすと申てうしまどゝいへり
をひ風大に吹てほとなく新羅
にいたり給

（第四紙）

三

皇后 自ら浪風大小あらうして潮 新羅乃
都に滿新羅王おとろき昔より
獨 罪あり郡臣ミな奏す皇后
今天下乃ためにはかります所ハ宗
廟社禝をやすくせんためなりいかて
罪臣まておよふへきとつゝしみ奏
しあく

八

皇后産胎にてよろひを召れん
にかなハす武内宿祢脇立を作り
てたてまつる皇后石を御腰に
はさみいのり給事おハりてかへらむ
時うまれ給へと

下一

皇后 自らほこをとり三軍に勅
して宣ふ敵軍士にむかふ時金
をうつ時ハすゝミ大鼓をうたハ退
旌旗まがひミたれん時士卒とも
整 すして財をむさほり内かへり
見せはかならす敵のためにとらハれ
む敵すこしくともあなづりそ敵大
強とも目おぢそおかし暴をハゆ
るすな自くたらんをハころす事
なかれ戦に功あらばたまものあら
ん背走ハ自 罪すへし軍士御
勅をつゝしみうけたまハる

（第五紙）

二

冬十月和彌乃津より御舩に
めして肥前國乃海上にて大き
なる牛浪乃中よりいてきて御舩
を覆さんとする軍人おとろきさ
ハく所神老翁に化して軍
人乃舟におり牛乃二の角をとり
をし轉し給ぬそれより所の名を
牛まろはすと申てうしまどゝいへり
をひ風大に吹てほとなく新羅
にいたり給

（第六紙）

三

皇后 自ら浪風大小あらうして潮 新羅乃
都に滿新羅王おとろき昔より
獨 罪あり郡臣ミな奏す皇后
今天下乃ためにはかります所ハ宗
廟社禝をやすくせんためなりいかて
罪臣まておよふへきとつゝしみ奏
しあく

八

皇后産胎にてよろひを召れん
にかなハす武内宿祢脇立を作り
てたてまつる皇后石を御腰に
はさみいのり給事おハりてかへらむ
時うまれ給へと

下一

皇后 自らほこをとり三軍に勅
して宣ふ敵軍士にむかふ時金
をうつ時ハすゝミ大鼓をうたハ退
旌旗まがひミたれん時士卒とも
整 すして財をむさほり内かへり
見せはかならす敵のためにとらハれ
む敵すこしくともあなづりそ敵大
強とも目おぢそおかし暴をハゆ
るすな自くたらんをハころす事
なかれ戦に功あらばたまものあら
ん背走ハ自 罪すへし軍士御
勅をつゝしみうけたまハる

（第七紙）

24・片袖縁起絵巻

香盒と一具せるものあり此由来を委尋るに
奥州に信士あり年来観音大士を信仰しけるか
元和三年の夏西国三十三所の遵礼をこゝろさし
同行あまたいさなひて五月下旬に既古里をいつ六月
三日にもなれは箱根山の麓に着ぬ爰にしはしやすら
らひてやう〳〵進みゆき遥に権現の社を拝し
遠く富士の雪を望みて同行におくれ唯一人やす
らひ居たるにあやしき女人あらハれて目の前に立り
いかなる人そととふに答ていはく我はこれ津の国
住吉の社の氏人松太夫といふもの、妻なり今日身
まかりしか此山の地獄に堕し苦ミを受るに隙なし
といへとも常山権現の御方便にて聊暇を得て来れり」（第一紙）
願くは津の国平野の寺融通如来の御前におひて大念佛
の廻向に預り早く此地獄を出て極楽に往生せむ
ことをおもふ此よしを古里の夫の方へ告しらせて給る
へししるしなくは夫信すへからす是を夫に与へたま
ふへしとて懐より紫の朽葉の片袖ときよら
なる香盒を出して遵礼に渡す遵礼手にとり
慥に届申さむといひもあへぬに女を見失へり」（第二紙）

扨遵礼は使のしるしを持それよりこゝかしこの霊場を
拝ミめくり熊野より高野にまふて七月七日に住吉
松太夫か宅にいたりて事の体を窺に仏事あり
則松太夫に對面してゆへを問に過にし六月三日に
妻にてありしもの死してケふは五七日に当れハ施行
をなし侍と答ふ遵礼聞て扨は猶不思議の事こそ
侍れとて尋ね来る子細をしか〳〵と語るに太夫いふ
かしくおもへる体なり時にかの二いろのしるしを見せ
けれは手に取からにさめ〳〵と泣てしはしハ物もいはす
や、ありて是ハ正しく亡婦の日ひめて置しもの
なり扨は疑ふ所侍らす早く追福をなし申へし
とて遵礼に礼儀をのへねむころにもてなし
夜もすから亡者の生涯の事なと語りて明る朝
はるかに見送りてわかれケる」（第六紙）

さりけれは松太夫は亡者の告にまかせ大念佛の
回向を請せむとて急き當寺にまふて三十六世
道和上人に拝謁し事の次第を語りけれハ上人
哀愍をたれてやかてその日供鐘をならし大衆を
集めて融通如来の御前にをひて億百万遍の
法事を修したまふ松太夫ハ今宵此御堂に
通夜し上人は其夜深更に及ひて耿々たる残の燈
をかゝけおしまつきによりて念佛し居たまふに
夢ともなくうつゝともなく紫雲一片庭上にそひきて
瑞巌なる女人忽にあらはれ足に蓮花をふミ
身に美香を帯て合掌していはく上人の大悲
により如来の御引接を蒙りて今なむ即往安
楽の本意を遂侍る今日御回向の亡魂礼謝のため
に来れりとて光を放ちて西の空に飛去ぬ翌朝
になり上人此よしを松太夫に告たまふ喜ふ事限なし
即融通の念仏を受て礼をなして下向すかの片袖と
香盒は後代證信のためなりとて永く當寺に納置て
霊寶となし給へり」（第八紙）

25・羅什三蔵絵

第二十五祖羅什三藏乃父鳩摩琰は中天竺の
大臣なり或時大王彼大臣に勅し給ふ様ハ朕は
いまた代になからん政をせんと仰事ありし時大臣
乃思はれけるハいかにも謀をめくらして大善根を
せさせ奉らんとたくミて却初より代になからん政は
大善か大悪かにて侍るへきよしを奏給ひけるに
しからは大悪を成すへし先三寶を滅せんとて
堂塔経論等を破損し僧尼をころし給たれハ
案に相違してしかるへからさるよしを頻にいさめ
申されけれともかなはさりしかハこれこそ善知
識なれとて則僧になり鳩摩琰と号して今乃
嵯峨乃釈迦栴檀の瑞像法華梵網阿弥陀経等
を肩て流沙葱嶺を過給ふに夜は尺迦の像
かたしけなくも鳩摩琰を肩給て東晋建武之
年戊寅に丘茲國に来給けり彼國の王感悦し給て
崇敬甚しらりけるか此沙門はたゝ人にあらす
彼種をつきて國の寶とせんとて妹の姫宮遣して
鳩摩琰を春宮成て國の信を譲らんと宣旨有
けるにしるへからすと勅答申されけれハ此國の
ならひに勅命に背くものは命をたつなり
しかれハ法に任すへしとありけるにもとより捨」（第一紙）

（第十二紙）

（第十三紙）

たる身なれハ命をうしなはれん事もくるしからすと
の給ひけれともさすか人間に生をうくるならひ命を
おしまぬ事もなし又煩悩の根源をきることも
かなはされハさるに勅にしたかひ給ぬさる程に
姫宮懐任し給ひしきさみ鳩摩琰重病をうけて
今はかきりと見え侍りし時申し給けるハ我思の外の
難にあひて宿願はたさすして空くならんこそ
無念乃事にて侍れ胎内の子ハ男子なるへし相構
僧になして我願をとけて彼瑞像経論等を漢土へ
渡し給へと宣給けれは誠にしるへし遺言を
そむき奉るへからすとの給しときとハおもふ事
なしとてすなはちおはり給ぬさても姫宮はつ
きせぬ御名残にもしなれぬならひなれは月日かさ
なり時来りて大真四年丗辛歳に男子を誕生し給
けりさてそたて給へハ法器におハしましけるを七
歳にして出家せさしめて学文をはしめ給ひけれハ
日誦三万二千言九歳にして母とおなしく罽賓國の
磐頭達多の會下に行て弟子と成給き又十二歳に
して母と共に月氏に行給へとも仏法滅して佛像経
こ乃に沙弥を見るに震旦にて大法を弘むへき瑞相
論もなく沙門等も見えさる事をなけき給ふところに
ありと悦てやかて弟子となし大法秘術をのこりなく
傳授して丘茲國へ帰り給へとも彼佛像経論を漢土へ
渡さすしていたゆらに年月を送るところに東晋に
ある山人の申しけるハあの北山おおくにこそ貴き
異星出現する事ありき符堅王の勅し給ひしは
異星出現のゆへをしらす勘申へきよし宣下有し
羅漢ハおハしまし給へと申すを聞給ひ尋入て須利
とき関中大史奏て申さく外國に大徳の智人ある
耶蘇摩にあひて求法乃志を乃へしかハ蘇摩の云く
相なりと奏せしとき大王乃宣給けるはけにさる
こ乃に沙弥を見るに震旦にて大法を弘むへき瑞相
事あり丘茲國に羅什三藏とて大得法乃聖人有て
ありと悦てやかて弟子となし大法秘術をのこりなく
此國に来るへき瑞相なりとて丘茲國の白純王へ勅
傳授して丘茲國へ帰り給へとも彼佛像経論を漢土へ
使を遣されける趣は西天乃仏像経論聖人等佛法
渡さすしていたゆらに年月を送るところに東晋に
東漸乃儀にて震旦へ来覧とし給ふ處に無理に
ある山人の申しけるハあの北山おおくにこそ貴き
抑留乃事そのこゝろをえすいそき渡し給覧と有し
異星出現する事ありき符堅王の勅し給ひしは
かは丘茲國のしゆ乃宣けるは彼仏像経論聖人は此
異星出現のゆへをしらす勘申へきよし宣下有し
土に因縁ありて来給へりいかなる子細によりて漢
とき関中大史奏て申さく外國に大徳の智人ある
渡り給はんするに定め給ふやらん不審なり所詮渡し
相なりと奏せしとき大王乃宣給けるはけにさる
申さぬまてにて侍るよし三度まて勅答ありしかハ
事あり丘茲國に羅什三藏とて大得法乃聖人有て
符堅王の勅し給ふ様はとは大軍をさし向て丘茲
此國に来るへき瑞相なりとて丘茲國の白純王へ勅
國を打亡して迎取へしとて呂光将軍を大将と
使を遣されける趣は西天乃仏像経論聖人等佛法
してせめけれとも叶はさりしかハ重て大勢を渡て
東漸乃儀にて震旦へ来覧とし給ふ處に無理に
数年乃合戦にうち勝て本尊経論聖人等を震
抑留乃事そのこゝろをえすいそき渡し給覧と有し
旦へわたしける海中にて淳風東に扇て大船悉く
かは丘茲國のしゆ乃宣けるは彼仏像経論聖人は此
破損せんとせしとき船人共の申けるハいかさまわたし
土に因縁ありて来給へりいかなる子細によりて漢
給へる経論等を龍神のおしみ給へる故と覚え侍り
渡り給はんするに定め給ふやらん不審なり所詮渡し
経論等を海中にしつめられて万人をたすけ給はんは
申さぬまてにて侍るよし三度まて勅答ありしかハ
しかるへき大善根にて侍るへしいかにおしみ給ふとも
符堅王の勅し給ふ様はとは大軍をさし向て丘茲
経論も万人も皆々大海乃ちりとなるへしと申せは
國を打亡して迎取へしとて呂光将軍を大将と
羅什ちからなく梵網経一百十二巻六十一品を海へ入
不焦黒至閣維竟其舌作紅蓮華色什公位證三
給ひける経論に名残おしさのあまりに海中へくり入さまに
賢譯経首従七佛其来尚矣
心地乃一品を誦し覚給て梵網経心地乃一品最後に
西晋恵帝求康年中長安青門燉煌菩薩竺法
誦出すといへりさる程に風波しつまりて海上難
護者初翻此経名正法華初翻有十巻題名無妙蓮東晋安帝
なく弘始三年十二月に長安城に来脱し給へるを秦
王叡感有て天竺三藏羅什に奉詔して譯すとて
草臺中におひて三千学士與什參定して大
小乗五十餘部譯して唯梵網経最後誦出し給て
融影明最等三百余人一時に菩薩の十戒をうけて
別に心地一品を書出して三百余人おなしく誦
すといへり殊に阿弥陀経をもて浄教を弘通して
寂し給へり後秦弘始十一年辛寅八月廿日日本は
反正天皇六年なり

（第一紙）（第二紙）（第三紙）（第四紙）（第五紙）（第六紙）（第七紙）（第十三紙）（第十四紙）

隆安年中後秦弘始丘慈沙門鳩摩羅什次翻此
経名妙法蓮華次在西晉之後翻仍如妙蓮什法師事迹如前已釈　隋氏仁壽
大興善寺北天竺沙門闍那笈多後取翻同名妙法闍那具云闍那屈多笈具云達磨笈多二師同譯添品法華

37・遊行上人縁起絵

くもりなきそらはもとより
へたてねはこころそにしに
ふくる月かけ
南無阿彌陀佛六十万人知識一遍
此人ハ園城一流の智徳として
柳營數題の護持を致す和
漢乃好士優色の名人なるを
上人に
歸依し給しさまほか
ならさりしは見奉り思へる
所なからんやとそ覚侍りし
或人念佛法門尋申けるに
念佛往生者念佛則往生也
南無と云ハ能歸の心阿彌
月乃もるかけは人乃心を
とむるなりけりと西行か
よみ侍ける思出られて
せきやのはしらにかき
付給ける
他阿彌陀佛
しらかはのせきちにも猶
とゝまらしこころ乃おくの
はてしなけれは
聖も又よみてかゝれける
ゆく人を彌陀乃ちかひに
もらさしと名をこそとむれ
しらかはのせき

（以上巻二の四段のロ）

」（第十五紙）

侍想も奉もてこは東見國聖神疑かす御やのあに立籠よ越正　すと彌
応三年夏機縁にまかせて
前國府へいり給當國惣社
り召請ありける間七日参
して今南東といふ所へ
給へきにて侍りけるに神殿
歌をかきをかれたり
すよりはたれにとはまし
りのミちゆふしてかけて
らしとそおもふ
寶殿乃中なとへはたや
く人のよる事も侍らぬに
ゝる不思議の侍へるは
なく権現の示給にこそとて
主頼基披露し侍けりさて
ハ今南東へうつり給けるに
府乃在家人或時霊夢を
る権現とおほえさせ給て
帯たたしき人乃二三十人
かり紅頭を出給を夢心ちに
れは聖乃迎に出させ給と覚
夢さめにけり其後幾程
なくて彼所乃直人等請し
る間重て参詣し給神慮
さこそ納受あるらめと夢
の告思あはせられて貴そ
へる

（以上巻二の四段のイ）」（第一紙）

」（第二紙）

陀と云ハ所歸の行心行
相應する一念を往生といふ
南無阿彌陀佛と唱て後
我心の善悪是非を論せ
す後念の心を用さるを信
心決定の行者とハ申也
只今の稱名のほかに臨終
あるへからすたゝ南無阿
のゝち佐々生瓜生なといふ
々修行して念佛勧給ほ
に夏過き秋暮ぬれは
冬漸迫来て深雪路を
つみ青陽已に隣をしめて
嵐梢をはらふ程なるに又
社より召請ありける間其
乃別時は彼社壇にして
せられけり焼香匂絶されは
麝薫を譲て煙松壻に
郁し供華粧鮮なれは
陀かさりをうつして風廟
に繽紛たりさて神主ハ
面にして七日乃間結縁し

（以上巻五の二段）

」（第十一紙）

」（第十二紙）

」（第三紙）

」（第十五紙）

侍るに明神と覚させ給て長
二尺許なる小冠束帯たゝ
しくして神主か左右乃肩を
ふミて立給へり諸人まのあ
たりこれを拝す上人を加
護し法味を喰受し給よと
ありかたく貴そ侍る凡毎年歳
末七日夜乃間ハあかつきこ
とに水をあミ一食定斎にて
在家出家をいはす常座合
掌して一向稱名の行間断
なく番張を定て時香一二寸
を過さす面々に臨終乃儀
式を表せられけるは月日
むなしくうつりきて露乃
命もきゆることはりの至極
するところを行しあらはされ
けるなるへしいとあはれにそ
きこえ侍る
別時結願の〻ちよみ給ける
のとかなる水にハ色もなきものを
かせのすかたやなみとミゆらん
をはりまつこゝろは聲に出にけり
くちにほとけのミ名そきこゆれ
同五年秋乃比或人召請し奉ける
間又越前國惣社へ参詣あり國中の
歸依尊卑首を傾すといふ事なし
而に平泉寺法師等偏執して國
中を追出すへしとて數百人乃勢を
引率して府中へ赴よし粗聞け
れハ結縁衆等申云左右なくを
しよせて狼籍を致さむにをきてハ
互に雌雄を決すへきよし各憤り侍
けるを聖諫日此事にをきて聊
なりとも喧嘩をも引出し給はゝ
永師弟乃契約を變すへし在家の
人をこそ引導すへき身なれ在
家にたすけらるへき謂侍らす本
より衆生にあたへぬる身命なれハ
善悪に付て他にまかする上は今
更打殺されしと思へきにあらす六
道四生二十五有に流轉する事ハ
た〻身命をおし故也然は煩悩
具足乃依躰を打損せられは無始
以來の敵をとりすましたるなるへし

（以上巻五の三段）

（第十六紙）

（第十七紙）

（第十八紙）

ゆめ〳〵憤給へからす又日來申つる
法門たゝ今行し顯て見せ奉らむ
なと再三諫られけれハ知識の命
を背かむ事を恐て掌を合て念
佛する程に衆徒等是非をいは
す社壇をうちかこみて時をつく
り廻廊乃中へ責入て飛礫を打事
しけき雨のことくなりけれとも時
衆一人にもあたらすかくて半時はか
りにも成ぬらむと思程に念佛の
聲もたえす合掌の手も亂さりけ
れは衆徒等力をよはす歸けるか
又儀て云所詮聖をとりて出せとて
重てうち入つゝ求たてまつるに肩を
をさへ膝をふミて過るやからもあり
けれともつゐに見つけ奉らすして
空く引退て神主がもとへ使者を立て
此聖宮中を退出せすは神寶をふり
罪科に處すへきよしいひつかはし
侍りとて神主歎申けれはさては
いとやすき事なりとて其夜亥剋
はかりに社家を立出て加州へお
もむき給にけり不惜身命のこと
はりをまのあたり行しあらはさ
れける事貴そおほえ侍へる

（以上巻六の二段）

（第十九紙）

（第二十紙）

（第一紙）

一遍上人繪詞第八
同國小笠原といふ所におはしける
時日蓮か門弟等念佛勸進謂なし
とて道場へ乱入して云一代の教
法にハ法花をもて本懐とし五時乃
配立にハ妙法をあけて醍醐にたとふ
而に尒前権門乃念佛をもて正因正
行と名つけ速疾頓成の妙宗を以
雑修雑行と下す誹謗大乘乃咎の
かるゝ所なし仍今祖師と号する善
導法然無間に堕在す先祖猶しかり
況末資をやと云て事を法門に寄て
狼籍をひき出へき気色見えける
間委細乃返答に不及善導法然地
獄におちらるゝ由さも侍らん如溺水

之人急須救と云へり地獄に入て勤苦
乃衆生を助ハ是大悲闡提の誓也と
答給に全く利生の為に非す大乗
誹謗乃故なりと重て難する間汝誹
謗乃罪によりて彼人地獄に堕すへきに非す
落たりと心得たらは汝か心の中乃
善導法然ハさこそ有らめとの給けれハ
是非をいはすへからすとて押寄る
処に在家人あまた立ふさかる中に
常盤の何かしとかや云者進出て云く
在ゝ所ゝの利益此にかきるへからす遺
恨あらは何くにても謝し奉るへし左右
なく此にて狼籍を至さハ一身の恥
辱萬人の嘲哢也滴逢難き知識
に逢事を得たり名聞利養の昔ハ
身ハ恩乃為につかハれ命ハ義によりて
軽かりき欣求浄土の今ハ心は本願に
かけて命を知識に奉るなといひしろふ
程に刃を交へ鋒を争ふへかりける
間聖兩方の中へわけ入て云く佛
法と云ハ互に自他を忘れ人我を離て
談する事なり各気色あしく見え侍り（以上巻八の一段のイ）」（第三紙）
同國板垣入道と云人聖に對面あり
けるに念佛乃法門領解して當國
修行の間は常に値遇し奉りけり
さて國中利益の後御坂にかゝりて
相州へおもむき給此山ハ名を得たる嶮路
餘に超たる難所也青巌峯遠して
雲旅人の衣を埋ミ白霧山深して露行
客乃袖を濡す然に彼人年齢わ傾て
首の霜を拂むそち乃坂を超て聖を
送奉りけむ懇志の至とそいと哀に
こそ侍れ労敷や思れけむ乗馬す
へき由度々の給はせけれとも知識
乃歩行にておわするにいかゝ馬にハ乗（以上巻八の二段のイ）」（第四紙）
不審あらは後日に來給今日ハ速に歸
らるへしと打わらひての給けれハ偏
執をたをし慢心とらけけるにや日蓮か
門弟等引返て事故なく静をけり
若雌雄を決し是非を争ハましかハゆゝ
しき人乃大事ならましを身命を顧
すなためられけるにや拙子細ことなく
しつまりにけりいと不思議なる事にや（以上巻八の一段のロ）」（第五紙）
さて越後國府より關の山熊坂に
かゝりて信州へ趣給ふ山路に日暮
ぬれハ拂苕て露を臥す交語者ハ樵
哥牧笛の聲澗戸に天明ぬれハ梢
をわけて雲をふむ眼に遮るものは竹
煙松霧の色凡視聽にふるゝ所厭
離の思を勧欣求の心を催すと
いふ事なしかくて善光寺に詣給に
式日の外にハ希にも勤られさる舎
利會臨時に行ハれて御戸開れたり
是併如來の慈悲方便にてこそまし
ますらめとて寺家より日中の行法ハ
禮堂にて有へき由申請たれハ如來
前にして勤給へり昔より未かゝる
例なしとて萬人首やは傾たる此
如來ハ天竺の靈佛として日域乃
本尊となり給へり酬困の來迎を示して
影向を東土の境にたれ有縁乃歸依
を顯して靈場を信州乃中に示給ふ
一光三尊野形像如來の密意を表し
決定往生の勝地他方乃浄土に超たり
今宿縁あさからさるによりて奉逢事
を得たりとて七日参篭有けるに日中
の念佛ハ毎日御前の舞臺にして勤られ（以上巻七の五段のイ）」（第六紙）
斐あるへき身にもあらす只かちよりこそ
とて其日ハ河口といふ所まてつきぬ老
耄の身餘年も不幾後會又其期
をしらす今生の面拝も是を限と悲
けるいと理にこそ侍れさて夜明けれ
は立給にたもとに取付ておさなき
物母をしたふか如く泣かなしみけれハ
いかに心なきも袖をしほらぬ類ハなかり
けるとそ家を出て世を遁さらん程ハ
かくてしも有へきならねハ何くにても
も往生を遂給ハむのミこそ本
意なるへけれとて子息共あまた
有て心ならす取返しける間同生を
花開野朝に期し再會を終焉の
夕に契奉りて泣々留ぬさて宿所
に歸けれともいとゝ心も身にそはす
成行けれハ持佛堂へ入て聖乃
眞影に向て涙を流しつゝ會者
定離ハ有為無常乃境なれは歎とも
甲斐有へき身にも非すとく浄土に
詣て不退乃友と成奉らんとて（第七紙）
（第八紙）

水食を留て一心に念佛す子息
親類菟角諫けるをも不用して十
一日を経てついに往生を遂にけり（以上巻八の二段のロ）」　（第十紙）
けり彼聖徳太子用明天皇の御為に
七日の御念佛ありて如來へ啓給ける其
詞曰
七日稱揚功徳已　斯此為報廣大恩
仰願本師彌陀尊　助我濟度常護念
如來御返報云
一日稱揚猶無上　何況七日大功徳
我待衆生心無厭　汝能濟度豈不護
とそあそハされたりける今七日の参籠
も思合られていとあハれに覚へ侍り（以上巻七の五段のロ）」　（第十一紙）
或ハ合戦闘諍の禍に逢或ハ恩愛離別
乃悲に引れて命を捨身をほろほすそ
皆輪廻の妄業にして全く得脱の因縁
に非す此ハ出離乃要法をき、往生の安
心をあたへられ奉ぬる恩徳を思芳顔
を慕て忽に思死にしける事ためし
すくなくこそ侍れ彼雪山童子の身を投
常啼菩薩の肝をさきし皆深位の大
士法身の薩埵乃化儀なれハ申に不及
末世乃凡夫にをきてはかゝる不思議ハ
有かたくこそ　（以上巻八の二段のハ）」　（第十三紙）
越前國角鹿笥飯（近來言敦賀氣比）太神宮ハ大
日如來の垂跡仲哀天皇の崇廟也天皇
九年異國へ發向せむとし給し時長門國
豊浦宮にして崩御給間神功皇后嬢妊
たりなから遂に三韓を責平て歸朝の
後皇后十三年みつから神主となりて祭礼
を始れしより以來一千余廻舊たりと
いへとも七十餘代の崇敬改事なし北
陸幽奇の祠壇を祐て花夷靜謐乃
官社に備專異國征伐乃儀式をもて猶
本朝鎮護の祭祀とす夏衿秋嘗の礼
欽仰年旧たり朝祈暮賽の輩効験日（以上巻八の四段のイ）」　（第十六紙）
神官社僧遊君遊女に至まて七日夜の間ハ
肩をきしり踵をつけり海濱頗人倫を
道倍益市如し加之社頭を掃除し宮
中を崇敬して砂を散し石をたゝまし
め給大方玉を瑩き鏡を懸か如し聖
乃道徳に非すハ争かたやすく此大功
を成んや此間靈異甚しけしと

同三年奥州へ趣給修行
日を送て地形一にあらす月
は野草乃露より出て遠
樹の梢をいとはぬ境もあり
日は海岸の霧に傾て
雙松の緑にうつろふ所
もありかくて白河の關に
かゝられけるにせき屋を
（巻二の二段）」

43・遊行上人縁起絵詞断簡

「さて今ははるかにみちの
おくにも分入ぬる心地
して里の名をとへは
ちかのしほかまとなむこ
たふるほとに明神に念
佛法樂して松嶋へまう
てられたりけるにこゝハ
見佛上人乃舊跡といふ
をきゝて
他阿彌陀佛
むらさきの雲乃むかへを
まつしまやほとけみるてふ
名さへなつかし

（巻二の三段）」

44・遊行上人縁起絵詞断簡

「弘安五年相模國龍口といふ所にて
利益せられけるに鎌倉乃邊土な
れは貴賤上下群集す紫雲の
立朝もあり花のふる夕もあり瑞
相一にあらす其比詫麻僧正（于時法印）
送給状云
佛子公朝胡跪合掌而言
南無西方極樂化主阿彌陀
佛南無觀音勢至諸菩
薩清淨大海衆照無二之
誠心哀專一之勤修歳去
歳來往生願無倦若坐若
立稱念功漸稱而聞上人濟
度之悲願溺下愚随喜之
涙行且為結縁且為値遇
奉寄書信於沙村之淨場
欲期引導於金刹之妙
土縦有前後之相違莫忘
慇懃之芳契恐、敬白
五月廿六日法印公朝状
還來穢國上人足下
くもりなき空にふけゆく
月も見よ心は西に
かたふける身そ

返報云
一稱名号中三尊垂化用
十方衆生前九品顯來迎

（巻二の四段）」

45・遊行上人縁起絵詞断簡

「同四年八月加賀國今湊と
いふ所にて小山律師なにかしと
かやいへる人僮僕あまた引具
して道場へ詣ぬこの人ハ罪
業をおそれす悪事に憚
らす破戒無慚にして邪見
放逸なりいかゝふるまはむすら
むと諸人目もあやに思あへるに
日來乃気色にはいとかはりて
詞も出さゝりけれハこハいかにと
見えけるに中食乃おりふし
なりけれは聖飯を捧てあの
御房これなれといはれけるを
かしこまり恐たる躰にて
うけとりてくひたりけるそ
始なりける十念うけ法門聽
聞して後は悪行こと〳〵く
と、めて一向專修の行者となり
けるか年齢すてにたけて所勞
つき侍ぬ明醫湯藥を
ほとこせとも生死の業病は
いやしかたく從類筋力をつ
くせとも無常乃殺鬼は
ふせきかたしつゐに臨終正
念にして往生乃素懐をそ
遂にける紅蓮の冬の氷は
心水より結といへとも名号の
智火これを消し劒樹の秋
の霜は罪根より積といへとも
攝取乃光明これを滅す如此
のたくひ聖の教化にあつかりて
往生しける人其數をしらす
とそ
或人乃返事によミて
つかはされける
なもあミたほとけの身とは
極樂のはちす乃はなの

（第一紙）」

ひらけてそなる

（巻五の四段）」

（第二紙）

46・遊行上人縁起絵詞断簡

（欠）小笠原といふ所におはしける時日蓮か門弟等念佛勸進無謂とて道場へ亂入て云一代の教法には法華をもて本懐とし五時乃配立には妙法をあけて醍醐にたとふ而に尒前權門乃念佛をもて正因正行と名つけ速疾頓成乃妙宗をもて雜修雜行と下す誹謗大乘のとか遁るゝ所なし仍今祖師と号する善導法然等無間に堕在す先祖猶しかり況末資をやといひて事を法門によせて狼籍をひき出へき氣色見えける間委細乃返答に及はす善導法然地獄におちらるゝよしさも侍らん如溺水之人急須救といへり地獄に入て勤苦の衆生をたすくるはこれ大悲闡提乃誓なりと答給にまたく利生のためにあらす大乘誹謗乃故なりと重て難する間汝誹謗の罪によりておちらるゝと心得たらんによりて彼人地獄に堕すへきにあらすおちたりと心えたらは汝か心乃中の善導法然はさこそあるらめとの給けれハ是非をいはすへからすとて押寄る

（巻八の一段）」

47・遊行上人縁起絵詞断簡

同國板垣入道といふ人聖に對面ありけるに念佛の法門領解して當國修行の間は常に値遇し奉けりさて國中利益乃後御坂にかゝりて相州へ趣給此山は名を得たる嶮路餘にこえたる難所也青巌峯遠して雲旅人乃衣を埋ミ白霧山

（巻八の二段）」